

スポーツを「ささえる」活動における楽しさと継続 意志・行動の関係

元嶋, 菜美香

<https://hdl.handle.net/2324/7329401>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (人間環境学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



令和 6 年度博士論文

スポーツを「ささえる」活動における
楽しさと継続意志・行動の関係

九州大学大学院人間環境学府

行動システム専攻健康・スポーツ科学コース

平成 30 年度博士後期課程編入学

元嶋 菜美香

目次

序論	1
第1節 問題の所在	2
1. 日常的なスポーツを「ささえる」人材の不足	2
2. 多様な人材に対する活動継続の期待	3
3. 継続性を高めるマネジメントの必要性	4
第2節 先行研究の考証	6
1. スポーツを「ささえる」活動の活動実態と定義	6
2. スポーツを「ささえる」活動の継続に関する調査・研究の概観	8
1) スポーツを「ささえる」活動の継続要因	9
2) スポーツを「ささえる」活動の継続意志	11
3) 継続要因と継続意志・行動の関係	12
4) 個人属性と活動形態による差異	12
3. 先行研究の課題と本研究における定義	13
1) スポーツを「ささえる」活動の定義	13
2) スポーツを「ささえる」活動の楽しさの定義	14
3) 楽しさと継続意志・行動の関係	15
4) 楽しさの要素と継続意志・行動の関係	16
5) 個人属性と活動形態による差異	17

第3節 理論的枠組み	19
1. スポーツコミットメントの定義とモデル	19
2. 楽しさ、スポーツコミットメント、行動指標との関係	21
3. スポーツを「ささえる」活動における援用	22
4. 楽しさと継続意志・行動の関係を検証するうえでの課題	23
第4節 本研究の目的および論文構成	25
1. 研究の目的	25
2. 研究対象の位置づけ	25
3. 研究方法	26
4. 研究仮説および仮説モデル	28
1) スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志の関係	28
2) 継続意志・行動の関係	29
3) 楽しさと継続意志・行動の関係	30
4) 個人属性と活動形態による差異	30
5. 論文構成	33
第1章 スポーツを「ささえる」活動の継続要因としての楽しさの検討	35
第1節 緒言	36
第2節 運動・スポーツ活動の楽しさ尺度の作成（研究1-1）	37
1. 目的	37

2. 方法	38
1) 調査対象者と調査の手続き	38
2) 調査内容	38
3) 分析対象者の選定	41
4) 分析手順	42
5) 倫理的配慮	42
3. 結果	43
1) 分析対象者の属性	43
2) 正規分布の検討	43
3) 基礎統計量の算出と信頼性の検討	45
4) 構成概念妥当性の検討	45
5) 基準関連妥当性の検討	47
4. 考察	48
5. 要約	49
第3節 スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の作成（研究1-2）	50
1. 目的	50
2. 方法	51
1) 調査対象者と調査の手続き	51
2) 調査内容	52
3) 分析対象者の選定	54

4) 分析手順	55
5) 倫理的配慮	56
3. 結果	57
1) 分析対象者の属性	57
2) 正規分布の検討	59
3) 基礎統計量の算出と信頼性の検討	59
4) 構成概念妥当性の検討	60
5) 基準関連妥当性の検討	61
4. 考察	62
5. 要約	63
第4節 楽しさと継続意志・行動の関係の検証（研究1-3）	64
1. 目的	64
2. 方法	65
1) 調査対象者と調査の手続き	65
2) 調査内容	66
3) 分析対象者の選定	69
4) 分析手順	71
5) 倫理的配慮	72
3. 結果	73
1) 分析対象者の属性	73

2) 信頼性と構成概念妥当性の検討	73
3) 仮説モデルの検証	75
4) 個人属性と活動形態による差異の検証	76
4. 考察	81
1) 分析対象者の属性	81
2) 仮説モデルの検証	81
3) 個人属性と活動形態による差異	83
5. 要約	89
 第2章 スポーツを「ささえる」活動の楽しさに関わる要素の検討	90
第1節 緒言	91
第2節 スポーツを「ささえる」活動の楽しさに関わる要素の抽出	
(研究 2-1)	92
1. 目的	92
2. 方法	93
1) 調査対象者	93
2) 調査対象とした地域スポーツ教室の特性	93
3) 調査内容および調査の手続き	94
4) 分析手順	95
5) 倫理的配慮	96

3. 結果	97
1) 調査対象者の属性	97
2) 分析対象の選定	97
2) 記述の分類プロセスおよび分類結果	97
4. 考察	101
1) 調査対象者の属性	101
2) 分析対象の選定	101
3) 記述の分類結果	102
5. 要約	105
第3節 楽しさの要素と継続意志・行動の関係の探索的検討（研究 2-2）	
.....	106
1. 目的	106
2. 方法	107
1) 調査対象者および分析対象者の選定	107
2) 調査内容	107
3) 分析手順	109
4) 倫理的配慮	109
3. 結果	110
1) 正規分布の検討	110
2) 基礎統計量の算出と基準関連妥当性の検証	110

3) 楽しさの要素と継続意志・行動の関係	111
4. 考察	116
1) 楽しさの要素の基準関連妥当性	116
2) 楽しさの要素と継続意志・行動の関係	116
5. 要約	125
 第3章 総括	 126
第1節 本研究の成果	127
1. スポーツを「ささえる」活動の継続要因としての楽しさの検討 ...	127
2. スポーツを「ささえる」活動の楽しさに関わる要素の検討	128
第2節 総合考察	130
第3節 本研究の学術的意義	132
第4節 本研究の実践的意義	133
1. スポーツを「ささえる」活動の楽しさの測定	133
2. スポーツを「ささえる」活動の楽しさを提示したマッチング	134
3. スポーツを「ささえる」活動の楽しさの強化	135
第5節 本研究の課題と今後の展望	137
1. スポーツを「ささえる」活動の分類	137
2. 追調査による回答の信頼性の検証	138
3. モデルの改良と拡張	139

4. 質問項目の明確化と調査対象者の拡大	140
5. 尺度化と予測力の検討	141
6. 生涯スポーツの視点を踏まえた縦断的調査	142
引用文献	144
資料	162
参考論文	173
謝辞	174

序論

第 1 節 問題の所在

1. 日常的なスポーツを「ささえる」人材の不足

第 3 期スポーツ基本計画において、「スポーツは『する』『みる』『ささえる』という様々な形での『自発的な』参画を通して、『楽しさ』や『喜び』を感じることに本質を持つもの（文部科学省，2022，p.10）」と記載されている。スポーツの指導や運営などの活動は，スポーツを「ささえる」と総称され（文部科学省，2022），スポーツ環境の維持に重要な役割を果たす。日常的なスポーツ指導やクラブの運営は，スポーツイベントの審判などの不定期的な活動に比べ，年間の実施回数が多く（笹川スポーツ財団，2019），定期的・継続的な関与が求められる。

令和 5 年度より，中学校運動部活動を学校単位から地域単位の取組とすることが提案された（スポーツ庁，2022a）。この背景には，専門性や意思に関わらず，教師が部活動の顧問を務める指導体制の継続が難しいこと（スポーツ庁・文化庁，2023），過剰な負担に伴う顧問の希望者の減少が関係していること（スポーツ庁，2018a）といった，活動に対する負担感や継続意志の低下が関係している。

中学校運動部活動の地域移行化に伴い，スポーツ指導やクラブの運営・世話といった日常的な活動に，継続的に関与する人材確保・育成が急務となっている。しかし，受け皿である総合型地域スポーツクラブの 82.2%が，指導者の確保を地域移行化の課題として挙げている（スポーツ庁，2022b）。同様に，スポーツボランティアの課題として，

高齢化や若い世代の確保が挙げられる（日本スポーツ協会・笹川スポーツ財団，2019；笹川スポーツ財団，2015）。また，日常的・定期的なスポーツボランティア実施率は 4.1%であり（スポーツ庁，2023），一部の活動者に依存している。以上のことから，日常的に活動する指導者や運営者，スポーツボランティアなどのスポーツを「ささえる」人材が不足していること，中学校運動部活動の地域移行化に伴い，日常的なスポーツ環境の維持が困難になるという問題が推測される。

2. 多様な人材に対する活動継続の期待

質の高い指導者を数多く確保するための方策として，運動部活動に所属する大学生による部活動指導が提案されている（スポーツ庁，2022a）。大学生は，自主的な参加に加え，講義や部活動・サークルの一環としてスポーツボランティアに参加している（二宮，2020）。この結果，大学生のスポーツボランティア実施率は，就業者に比べ高い（笹川スポーツ財団，2022）。また，大学生や就業者を含む 10・20 代の成人（以下，若年層とする）はそれ以降の年代に比べ，スポーツ指導やスポーツクラブの運営・世話などの日常的な活動の実施率が高い（スポーツ庁，2023）。しかし，20 代の成人は，スポーツボランティア実施者に比べ，現在は活動をしていない非継続者の割合が高い（笹川スポーツ財団，2019）。また，スポーツボランティア実施率は，20 代以降に低下する（笹川スポーツ財団，2019）。つまり，大学生は，スポーツを「ささえる」人材として活躍が期待されているものの，20 代以降に活動から離脱している可能性がある。

大学生に加え、多様な人材がスポーツを「ささえる」活動に関与することが期待されている。例えば、スポーツ指導者における若年層や女性の不足が指摘されており（スポーツ庁，2021）、女性指導者の育成が進められている（スポーツ庁，2018b）。また、日常的なスポーツを「ささえる」活動において、大学卒業後の継続を望む保護者が確認され（大山ほか，2011）、大学生が卒業後も継続的に指導にあたるシステムの構築が予定されている（スポーツ庁，2024a）。つまり、これまでスポーツを「ささえる」活動を担ってきた男性や大学生に加え、女性や社会人などの幅広い人材の活躍が期待されている。しかし、これらの人材の活動実態や継続性は明らかになっていない。

3. 継続性を高めるマネジメントの必要性

20代におけるスポーツボランティアのきっかけは、職場や学校、地域のグループやスポーツ関連団体からの依頼が約6割を占める（笹川スポーツ財団，2019）。中学校運動部活動の地域移行化に伴い、若年層は、大学や職場、部活動・サークル、スポーツ団体、地域から、これまで以上に依頼を受けると予測される。また、大学、スポーツ団体、地方公共団体などの組織・団体が、若年層のマネジメントやコーディネートを担うことが予想される。これらの組織は、若年層の活動継続者を確保するために、スポーツを「ささえる」活動を継続できるようマネジメントをおこなう必要がある。

現在、中学校運動部活動の地域移行化に伴う人材確保の方策として、研修プログラムや就業環境の整備、適切な対価の支払いといった外的要因が挙げられている（スポーツ

庁, 2022c). しかし, 地方財源には限りがあり, 就業環境の整備は十分に進んでいない. 一方で, スポーツ指導者は, 報酬などの外的要因よりも, 活動に対する「楽しい」といった心理的要因を強く認識している (青柳ほか, 2013). また, ボランティアコーチは, 活動を楽しいと思う, 活動に喜びを感じることで活動の促進要因になること (志賀・荒井, 2013) が明らかになっている. つまり, 外的要因よりも, 活動の楽しさが継続を促進する可能性が推測される. 日常的なスポーツを「ささえる」人材の継続性を高める取り組みを検討するために, 活動の楽しさに着目する必要があると考える.

序論では, まず, スポーツを「ささえる」活動の先行研究や公的資料を整理し, 先行研究で残された課題を明らかにする. 次に, 理論的枠組みとなる運動・スポーツ活動を対象とした先行研究や理論モデルを提示し, スポーツを「ささえる」活動への援用可能性について述べる. 最後に, 本博士論文の目的および論文構成について述べる.

第 2 節 先行研究の考証

前節で述べたように、日常的にスポーツの指導・運営を担う人材が不足しており、継続的に関与する多様な人材が求められている。日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続者を増やす、活動者の継続性を高める取り組みを検討するために、スポーツを「ささえる」活動の活動実態を明らかにし、活動継続に関連する知見を整理する。

まず、「スポーツをささえる（支える）」や「ささえるスポーツ」を題目、もしくはキーワードに含む先行研究・公的資料から、活動実態と定義を整理する。次に、スポーツ指導者やスポーツボランティアなどの活動継続者を対象とした先行研究・公的資料を概観し、活動継続に関連する知見を整理する。最後に、先行研究において残された課題を整理する。なお、ボランティアがスポーツを「ささえる」活動を担う人材として位置づけられること（文部科学省，2022）から、スポーツボランティアを対象とした先行研究・公的調査をレビュー対象に加えた。また、ボランティアに対するスタンスが国ごとに大きく異なること（文部科学省，2007）、ボランティア精神の根底にある宗教的思想が異なること（湊，2011）から、日本国内で発表された日本語文献を主なレビュー対象とした。

1. スポーツを「ささえる」活動の活動実態と定義

令和 5 年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」（スポーツ庁，2024b）では、

運動・スポーツ活動を「ささえる」活動として、スポーツの指導、大会・イベントの運営や世話、スポーツ団体やクラブでの補助的な活動などが挙げられている。同様に、先行研究では、スポーツを「ささえる」活動として、スポーツイベントの企画・運営や体験会・クラブでの指導（檜皮ほか，2019）、案内や受付、運営サポート（中原ほか，2020）、試合進行や審判（谷藤，2018）などが挙げられる。つまり、スポーツを「ささえる」活動は、指導や運営、その他幅広いスポーツ支援活動を指している。しかし、スポーツを「ささえる」活動が定義されていないことが確認された。

次に、第3期スポーツ基本計画（文部科学省，2022）では、スポーツを「ささえる」活動をおこなう人材として、指導者やトレーナー、コーチ、審判員、スタッフ、ボランティアが挙げられている。先行研究では、ボランティアや審判、競技スタッフなどの支援者（本多，2021）、スポーツイベントの実行委員長（西村・池田，2020）、大会参加者兼運営者（谷藤，2018）、コーチやイベントスタッフ（松本・田引，2009）などが挙げられている。これらの人材は、市長が委嘱する非常勤職員（檜皮ほか，2019）やボランティア（中原ほか，2020）などの活動形態で活動をおこなっている。つまり、スポーツを「ささえる」人材は、就業やボランティアなどの形態で活動をおこなう指導者や運営者、スポーツボランティアを指している。

一方で、令和4年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」（スポーツ庁，2023）や「スポーツライフに関する調査」（笹川スポーツ財団，2022）では、スポーツボランティアを「ささえる」スポーツとして捉え、実施率や活動内容を調査している。スポーツボランティアは、「報酬を目的とせず自分の労力、技術、時間を提供して地域社会

や個人・団体のスポーツ推進のために行う活動と定義する。ただし、活動にかかる交通費や食事代など、実費程度の金額の支払いは報酬とみなさない（笹川スポーツ財団，2022, p.12）」と定義される。つまり、これらの調査では、スポーツを「ささえる」人材は、無償のスポーツボランティアに限定されている。しかし、スポーツを「ささえる」活動の活動形態は、無償スポーツボランティア以外にも確認されている。例えば、無償ボランティアとアルバイトなどの有給職員の活動形態の中間的に位置する有償ボランティア（労働政策研究・研修機構，2006），依頼を受けボランティアと認識せずに活動している無自覚ボランティア（笹川スポーツ財団，2019）が確認されている。スポーツボランティアの活動形態が多様化し、活動と定義の乖離がみられることから、スポーツを「ささえる」活動を定義したうえで、包括的な調査が必要であると考える。

2. スポーツを「ささえる」活動の継続に関する調査・研究の概観

スポーツを「ささえる」活動の活動継続に関連する知見を整理するために、スポーツ指導者や運営者、スポーツボランティアを対象とした先行研究や公的調査を整理した。これらの調査・研究では、運動部活動の顧問（中澤，2011，2012）や外部指導者（青柳ほか，2013），公認スポーツ指導者（笹川スポーツ財団，2015），障害者スポーツのコーチ（志賀・荒井，2013），地域スポーツに参加する子どもの保護者（大橋ほか，2022），スポーツボランティア（山口ほか，2018）などの活動継続者が対象となっている。また、「スポーツ人材の基礎調査」（スポーツ庁，2021）では、正社員や契約社員

などの就業者，パート・アルバイト，専業・非専などの活動形態で指導や運営に従事する人材を調査対象としている．

これらの調査・研究では，活動に対する認識，活動継続を促進・阻害する要因，活動継続に対する意欲や意図が測定されている．また，継続に対する意図と継続要因の関係の検証や，個人属性による継続要因の比較がおこなわれている．次項では，活動継続に関連する知見として，継続要因，継続意志，継続要因と継続意志・行動の関係，個人属性による差異の観点から，先行研究の知見を整理する．先行研究の整理に際して，継続に関連する類似した用語が定義されずに使用されていることから，本研究では，用語を操作的に定義する．具体的には，「継続的な参加意欲」（大山ほか，2012）や「継続意図」（大橋ほか，2022）などの継続的な活動に対する意欲や意向を示す類似語について，活動継続に対する積極的・消極的な欲求や意向を含むことから，「継続意志」とした．同様に，「継続要因」（青柳ほか，2013）や「促進要因」（志賀・荒井，2013）などの継続意志や行動を予測する要因を示す類似語について，参加要因と区別する目的から，「継続要因」とした．最後に，「継続参加」（大山ほか，2012）や「かかわり続ける」（中澤，2012）などの継続的に参加する行動を示す類似語について，一過性の参加行動と区別する目的から，「継続的な参加行動」とした．加えて，継続意志と継続的な参加行動を併記する場合，簡略化を目的として「継続意志・行動」と表記することとした．

1) スポーツを「ささえる」活動の継続要因

スポーツを「ささえる」活動の継続要因として，促進要因と阻害要因が調査されてい

る。これらの研究では、継続を促進する要因として、心理的要因や外的要因が抽出されている。心理的要因の例として、活動や競技に対する愛着（青柳ほか，2013；元嶋ほか，2023），自己成長（志賀・荒井，2013），スポーツの楽しさの普及（笹川スポーツ財団，2015）などがある。また、外的要因として、謝礼金や活動形態、顧問や同僚などの重要な他者との関係などが抽出されている（青柳ほか，2013；元嶋ほか，2023）。一方で、継続を阻害する要因として、専門的な指導力不足（青柳ほか，2013），時間的制約（志賀・荒井，2013）などが抽出されている。加えて、阻害要因は、構造的、個人的、対人的要因に分類されている（山口ほか，2018）。

先行研究から、活動そのものに対する「好き」や「楽しい」などの肯定的な感情や認識は、運動部活動の外部指導者（青柳ほか，2013）や、就業・アルバイト・ボランティアとして活動する若年層（元嶋ほか，2023）の継続要因として共通している。また、スポーツボランティアは、「指導活動を通して自分自身がスポーツを楽しめている」と感じている（笹川スポーツ財団，2015）。つまり、促進要因として、「好き」や「楽しい」などのスポーツを「ささえる」活動に対する肯定的な認識が共通している。さらに、運動部活動の外部指導者は、謝礼金をはじめとした外的要因よりも、楽しさを継続要因として認識していること（青柳ほか，2013）が明らかになっている。つまり、活動に対する肯定的な認識は、外的要因よりも活動継続を促進する可能性が示されている。しかし、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが定義されておらず、楽しさが継続意志・行動に与える効果は検証されていない。さらに、どのような要素に楽しさを感じているかが明らかになっていない、という課題が残されている。

2) スポーツを「ささえる」活動の継続意志

スポーツを「ささえる」活動の継続に対する認識に関して、地域スポーツに参加する子どもの保護者（大橋ほか，2022）やイベントボランティア（長ヶ原ほか，1991）の活動継続に対する意欲が測定されている。また、質的研究では、「部を残していきたい」「部活動を指導したい」という積極的な意欲を示す運動部活動の顧問が確認されている（中澤，2011）。つまり、スポーツを「ささえる」活動の継続者は、活動の継続に対して、積極的・肯定的な継続意志を有していることが確認された。

一方で、スポーツを「ささえる」活動に対して、消極的・義務的な関わりを求められる継続者が確認されている。例えば、地域スポーツに参加する子どもの親は、道具の管理や試合の引率・送迎、コーチ役や練習補助などをおこなうことが期待され、自発性よりも義務感から活動を継続している（大橋ほか，2022）と推測される。同様に、スポーツ指導者の約3割が本人の意思に反してやむを得ず指導をおこなっている「不本意ボランティア」であること（石黒，2019）が確認されている。また、管理職などの説得や圧力、職場環境などの理由から「顧問をしなくてはならない」という消極的・義務的な態度で継続している運動部活動の顧問が問題視されており（中澤，2012）、運動部を含む中学校部活動顧問の半数が来年度の顧問を希望していない（内田ほか，2018）。つまり、スポーツを「ささえる」活動に対して義務的・消極的に継続しなければならないと認識し、離脱を希望する意志が確認された。先行研究から、スポーツを「ささえる」活動の継続者は、積極的・肯定的／消極的・義務的な継続意志を有することが確認されたが、継続的な参加行動に与える影響は検討されていない。

3) 継続要因と継続意志・行動の関係

スポーツを「ささえる」活動の継続要因と継続意志の関係について、重回帰分析やパス解析にて検証がおこなわれている。例えば、自分の子どもがチームに楽しく参加していると感ずること（大橋ほか，2022）、個人属性や動機づけ（長ヶ原ほか，1991）が、継続意志を予測することが明らかとなっている。また、計画的行動理論（Ajzen, 1991）およびトランスセオレティカル・モデル（Prochaska et al., 1992）のモデルと尺度を援用し、スポーツボランティアの継続意志を従属変数とした重回帰分析がおこなわれている（堀田ほか，2012）。質的研究では、スポーツのボランティア活動の楽しい経験や使命感によって継続意志が高まり、継続参加に至るプロセスが抽出されている（大山ほか，2012）。つまり、スポーツを「ささえる」活動に対する肯定的な認識が継続意志・行動を予測することが仮定される。しかし、継続要因と継続意志・行動の関係が示されていないという課題が残されている。

4) 個人属性と活動形態による差異

スポーツを「ささえる」活動の継続に関する研究において、個人属性と活動形態によって、継続要因や継続意志・行動に差異があることが示唆されている。例えば、性別や年代によって、継続の阻害要因が異なる（山口ほか，2018）。また、スポーツ指導者の約 8 割は男性であること（スポーツ庁，2021）、スポーツ団体における女性役員やスタッフ育成の必要性が提示されていること（日本スポーツ協会，2023）から、男性は女性に比べ継続的に活動していると推測される。さらに、活動形態に関して、専門のスポ

ーツ指導者は、スポーツボランティアに比べ、活動頻度が高いことが明らかになっている（笹川スポーツ財団，2019；スポーツ庁，2021）。

同様に、若年層を対象とした先行研究や公的調査から、性別による意欲や活動実施率の差があること（清宮ほか，2021；スポーツ庁，2024b）が明らかになっている。また、大学生に比べ、就業者のスポーツボランティア実施率が低いこと（笹川スポーツ財団，2022）、大学生は金銭的報酬がスポーツボランティアへの活動意欲を予測しないこと（清宮ほか，2020）が明らかになっている。これらの先行研究から、性別、ライフステージ、活動形態による継続要因や継続意志・行動の差異が推測される。しかし、スポーツを「ささえる」活動の継続者を対象とした調査・研究が少なく、差異が検証されていないという課題が残されている。

3. 先行研究の課題と本研究における定義

先行研究から、スポーツを「ささえる」活動の実態が明らかになり、継続要因として楽しさが継続意志・行動に関係する可能性があること、これらの関係は個人属性と活動形態による差異がある可能性が確認された。しかし、先行研究において残された課題として、以下の5点があると考えられる。

1) スポーツを「ささえる」活動の定義

1 点目は、スポーツを「ささえる」活動の定義が示されていないことである。その結

果、活動形態が多様化しているにもかかわらず、スポーツボランティア以外の活動形態を対象とした研究が少ないという課題が残されている。

以上を踏まえ、本研究では、第 3 期スポーツ基本計画（文部科学省，2022）や活動実態（スポーツ庁，2023）を参照し、スポーツを「ささえる」活動を「スポーツ場面における指導・運営・補助的活動などのスポーツ支援活動」と定義する。また、大会・イベント運営などの不定期的な活動と区別するために、スポーツ指導やクラブの運営などの日常的・定期的な活動を「日常的なスポーツを『ささえる』活動」と操作的に定義する。次に、スポーツを「ささえる」活動形態として、企業や組織と雇用契約を結んだ正社員，パートやアルバイトなどの非正規職員，有償スポーツボランティア，無償スポーツボランティア，無自覚ボランティアを位置づける。なお、笹川スポーツ財団（2015a）のスポーツボランティアの分類を参照し、自身や自身の子ども（家族）のみを対象とした活動（家事・育児）は除外した。

2) スポーツを「ささえる」活動の楽しさの定義

2 点目は、スポーツを「ささえる」活動の楽しさや、その対象が定義されていないことである。その結果、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの重要性が示唆されているものの、活動そのものに楽しさを感じているのか、何らかの要素に対して活動を楽しいと認識しているのかが確認できていないという課題が残されている。

スポーツを「ささえる」活動の楽しさに関する研究を進めるうえで、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを定義し、対象を明確に示す必要がある。例えば、スポーツの楽

しさは、喜び、好み、面白いなどの一般化された感情を反映するスポーツ経験へのポジティブな感情反応と定義される (Scanlan et al., 1993a). 同様に、運動の楽しさはポジティブな情動、ポジティブな感情状態 (Wankel, 1993) と定義される. この定義を踏まえ、スポーツ活動そのものの楽しさを測定する尺度が作成され、楽しさを感じることで継続意志が促進されることが検証されている (Scanlan et al, 1993b).

以上のことから、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの定義として、「スポーツの楽しさ」の定義 (Scanlan and Simons, 1992) を参照し、「喜び、好み、面白いなどのスポーツを『ささえる』活動へのポジティブな感情反応」と操作的に定義した. 次に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを、「活動そのものに対する楽しさ」と、「活動に楽しさを感じる内容や条件 (要素)」に分け、前者を「スポーツを『ささえる』活動の楽しさ」、後者を「スポーツを『ささえる』活動の楽しさの要素」と操作的に定義した.

3) 楽しさと継続意志・行動の関係

3 点目は、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志・行動の関係が明らかになっていないことである. これは、運動・スポーツ活動に比べ、スポーツを「ささえる」活動に関する研究が進んでおらず、継続要因の抽出や、継続要因と継続意志の関係検証が中心的課題であったためである. その結果、継続的な参加行動との関係を示すに至っていないという課題が残されている.

スポーツを「ささえる」活動の継続性を高めるためには、スポーツを「ささえる」活動の行動プロセスを明らかにしたうえで、継続的な参加行動を促進するマネジメントを

検討する必要がある。この理由として、様々な領域で、理論的背景にもとづいた継続要因や継続意志・行動の関係が確認され、マネジメント方略が検討されていることが挙げられる。例えば、スポーツマネジメント領域では、スポーツ観戦の価値などの予測要因が再観戦意図を媒介し、観戦頻度を予測すること（吉田ほか，2013）が確認されている。また、スポーツ科学領域では、予測要因、行動意図、行動指標を含む計画的行動理論や行動変容ステージモデルにもとづく介入により、身体活動の促進効果が検証されている（原田，2013）。さらに、マネジメント領域では、組織への愛着や必要性、義務感・強制感などの組織コミットメントが高い就業者は組織にとどまること、組織コミットメントが欠席や望ましい行動と関係することが確認されている（Meyer et al., 2002）。つまり、「する・みる」スポーツ活動や就業を対象とした先行研究において、理論モデルにもとづき、予測要因と継続意志・行動の関係が検証されている。

以上のことから、継続的な参加行動を促進する方策を検討するために、継続要因、継続意志、継続的な参加行動を含んだモデルが使用されていることが確認された。本研究では、スポーツを「ささえる」活動の継続要因として、活動の楽しさに焦点をあて、「スポーツを『ささえる』活動の楽しさは、継続意志・行動を予測するか」というリサーチクエスチョンを設定した。また、次節で提示する運動・スポーツ活動の理論モデルにもとづき、楽しさと継続意志・行動の関係を検証することとした。

4) 楽しさの要素と継続意志・行動の関係

4 点目は、スポーツを「ささえる」活動のどのような要素に楽しさを感じているかが

検討されていないこと、楽しさの要素と継続意志・行動の関係が明らかになっていないことである。その結果、楽しさの要素を強化するマネジメント方策が提示されていない。

スポーツを「ささえる」活動を促進する方策を検討するうえで、楽しさを感じる要素を明らかにし、継続意志・行動との関係を明らかにする必要がある。この理由として、運動・スポーツ活動の独自の楽しさが抽出され、楽しさを強化する取り組みが検証されていることが挙げられる。例えば、スポーツ（和田，1988）や運動（徳永・橋本，1980）の楽しさの要素が抽出されている。また、活動頻度が高い大学生は低頻度群に比べ、運動部活動に所属する大学生は非所属学生に比べ、運動の楽しさの要素を強く認識していることが明らかとなっている（徳永・橋本，1980）。この結果から、運動・スポーツ活動の楽しさの要素が、活動頻度や継続意志と関係する可能性が推測される。さらに、「運動の基本的欲求の充足」や「人間関係」などの楽しさの要素を強化した運動プログラムの効果が検証されている（金ほか，2014）。そこで、本研究では、「若年層は、スポーツを『ささえる』活動のどのような要素に楽しさを感じるのか」、「どのような楽しさの要素が、継続意志・行動と関係するか」というリサーチクエスションを設定し、探索的に関係を明らかにすることとした。スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素と継続意志・行動の関係を明らかにすることで、活動の楽しさを強化するための具体的な知見を得ることができると考える。

5) 個人属性と活動形態による差異

5 点目は、個人属性と活動形態による差異が明らかになっていないことである。その

結果、性別などの個人差や活動形態の違いを踏まえたマネジメントが検討されていない。

スポーツを「ささえる」活動を促進する方策を検討するうえで、個人属性と活動形態による特性を踏まえる必要がある。この理由として、発達段階や性別によって、運動・スポーツ活動の楽しさを感じる要素やその程度が異なること（梶・小野，2020；徳永・橋本，1980；和田，1988）が挙げられる。また、運動・スポーツ活動の実施率向上のために、ライフステージに応じて楽しさの要素を工夫した事業が展開されている（日本レクリエーション協会，2013）。ライフステージは、生涯スポーツ領域において、「人の生涯をある何かの基準で区分した諸段階」と定義され、ライフサイクルを区分する基準として年齢や心身の発達、地位や役割、人生の出来事が適応される（金崎，2000）。10・20代の生活様式は、大学在籍中と卒業後で大きく変化し、生活環境の変化が継続意志や継続的な参加行動と関連することが推測されることから、本研究では若年層の大学在籍／卒業を区分としたライフステージに着目する。

最後に、スポーツを「ささえる」活動の活動形態が多様化しているにもかかわらず、活動形態による特性は明らかになっていない。これは、スポーツを「ささえる」活動の実施率が低いこと（笹川スポーツ財団，2019；スポーツ庁，2021）、網羅的な調査を実現する手法がなかったこと（石黒，2019）が原因であると考えられる。その結果、組織に所属するスポーツ指導者など、特定の集団を対象とした調査が多い。以上のことから、大規模調査をおこない、性別、ライフステージ、活動形態の特性を踏まえて、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ、継続意志・行動の関係を明らかにすることで、若年層の実態に即した詳細な知見が得られると考える。

第 3 節 理論的枠組み

先行研究の課題として、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志・行動の関係が検証されていないこと、継続的な参加行動を予測する理論モデルがみられないことが明らかとなった。そこで、本研究では、運動・スポーツ活動の楽しさと、継続意志や継続的な参加行動との関係を明らかにした先行研究の知見を参照することとした。

運動・スポーツ活動のメカニズムを示す理論モデルは、計画的行動理論（Ajzen, 1991）やトランスセオレティカル・モデル（Prochaska et al., 1992）をはじめとして、多数存在する。本研究では、以下の 3 点の理由から、スポーツコミットメント理論を選定し、援用することとした。1 つ目は、スポーツコミットメントが活動継続を予測する心理的要因であること、2 つ目は、理論モデルにもとづき、楽しさと継続意志・行動の関係が検証されていること、3 点目は、測定尺度がスポーツを「ささえる」活動に援用されていることである。まず、スポーツコミットメント理論およびモデルにもとづいた先行研究で得られた知見を整理する。次に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志・行動との関係を検証するうえでの課題について述べる。

1. スポーツコミットメントの定義とモデル

スポーツコミットメントは、主に社会学分野で使用されていたコミットメントが、スポーツ社会学分野に取り入れられた、スポーツ活動の実施や継続を説明する概念である

(金崎, 1992). 人々が活動に関与し続ける理由を説明する一連の要因として, コミットメントの概念 (e.g., Brickman, 1987) にもとづいたスポーツコミットメント理論が提唱された (Scanlan and Simons, 1992). この理論モデルとして, スポーツコミットメントモデル (Sport Commitment Model: 以下, SCM とする) が提案され, 青少年のアスリートを対象に検証されている (Scanlan et al., 1993a, 1993b).

萩原・磯貝 (2014) は, Scanlan et al. (1993a) のスポーツコミットメントの定義を「特定のスポーツプログラムへの参加, または継続に対する願望や決意を表している心理的な状態」と和訳し, スポーツ実施・継続行動のメカニズムを検証している. その他にも, スポーツコミットメントに関する多数の研究が, Scanlan et al. (1993a) のスポーツコミットメントの定義および SCM に依拠している (e.g., Carpenter et al., 1993; Wilson et al., 2004; Weiss et al., 2001). また, スポーツコミットメント尺度 (Sport Commitment Questionnaire: 以下 SCQ とする) が作成され, スポーツコミットメントと予測要因の測定に使用されている (Scanlan et al., 1993b).

SCM にもとづいた一連の研究から, 年齢, 性別, スポーツの種類, 技能レベルの多様な青少年において, 「スポーツの楽しさ」がスポーツコミットメントと最も強く関係すること, 「スポーツの楽しさ」とその他の予測要因と中程度の相関関係にあること (e.g., Carpenter et al., 1993; Scanlan et al., 1993b), 予測要因間の多重共線性の問題 (Weiss and Weiss, 2007) が確認されている. この結果, いくつかの予測要因が「スポーツの楽しさ」を媒介してスポーツコミットメントを予測する, 媒介モデルの有用性が検証されている (Weiss et al., 2001; Weiss and Aloe, 2019).

また、スポーツコミットメントと行動指標の関連として、スポーツコミットメントがスポーツの活動頻度を予測することが確認された (Casper et al., 2007 ; Jeon and Ridinger, 2009). さらに、SCM を運動や身体活動を対象に拡張し、積極的な運動コミットメントが運動参加行動 (頻度×強度) と関係すること、義務的な運動コミットメントは関係しないことが示された (Wilson et al., 2004). 行動的な結果を加えたモデルの有用性から、「スポーツの楽しさ」がスポーツコミットメントを媒介し、スポーツ参加行動 (頻度・強度・継続時間) を予測する仮説モデルが提唱されている (Weiss and Amorose, 2008 : 久崎・石山, 2012).

日本国内では、萩原・磯貝 (2014) が、スポーツ行動の実施や継続化を説明する有効な理論として SCM を参照し、日本語版スポーツコミットメント尺度 (以下、日本語版 SCQ とする) を作成している。日本語版 SCQ は、SCQ の下位尺度であるスポーツコミットメントを測定する 1 因子 6 項目を翻訳した尺度である。大学生アスリートを対象に尺度の妥当性および信頼性が確認され、スポーツコミットメントがスポーツ活動状況 (頻度×強度×時間) を予測することを確認している (萩原・磯貝, 2014). 以上のことから、SCM が楽しさ、スポーツコミットメント、スポーツ活動の関係を示すモデルであること、若年層のスポーツ継続を予測する有効なモデルであることが確認された。

2. 楽しさ、スポーツコミットメント、行動指標との関係

個人は、「活動したいから」というポジティブな理由と、「活動しなければならないか

ら」というネガティブな理由から活動を継続する。スポーツコミットメントを2側面から測定するために、新たな SCM にもとづいたスポーツコミットメント尺度 2 (Sport Commitment Questionnaire-2: 以下 SCQ-2 とする) が作成された (Scanlan et al., 2016)。SCQ-2 では、スポーツコミットメントの2側面を測定する2つの下位尺度が設定された。1つ目は、従来のスポーツコミットメントと同義であり、長期にわたってスポーツを続けたいという願望および決意と定義される情熱的コミットメントである。2つ目は、長期にわたってスポーツを続けなければならないという義務感と定義される強制的コミットメントである。新たな SCM に関する研究では、「スポーツの楽しさ」が情熱的コミットメントを正に、強制的スポーツコミットメントを負に予測するという点で一致している (Berki et al., 2020; Scanlan et al., 2016)。さらに、Hagiwara (2017) は、SCQ-2 の下位尺度である、情熱的・強制的スポーツコミットメントを測定する2因子11項目 (以下、日本語版 SCQ-2 とする) を翻訳し、情熱的・強制的コミットメントが大学生アスリートのトレーニング時間を弱く正に予測することを示した。つまり、「スポーツの楽しさ」が2側面のスポーツコミットメントを予測し、2側面のスポーツコミットメントが継続的な参加行動を予測することが確認されている。

3. スポーツを「ささえる」活動における援用

スポーツを「ささえる」活動を対象とした研究において、SCQ および SCQ-2 を使用した先行研究が確認されている。例えば、Vanuytperen (1998) は、コミットメントが

残留／離脱行動を決定づけることから、バレーボールの審判を対象に SCQ の予測因子の妥当性を検証し、審判を辞める意図（以降、離脱意図とする）と実際の継続行動との関係を検証している。その結果、審判の楽しさが審判としての活動の離脱意図を媒介して継続（残留／離脱）を予測することを明らかにした。同様に、Cuskelly and Hoyer (2013) は、ラグビーの審判を対象に SCQ の予測因子の妥当性を検証し、楽しさが継続意図を予測することを明らかにしている。国内では、日本語版 SCQ-2 を援用したスポーツ指導者・コミットメント尺度が作成され、運動部活動の顧問を対象に妥当性および信頼性が確認されている（八尋・萩原，2019）。先行研究から、SCQ や SCQ-2 が、就業者やボランティアの継続意志や継続要因の測定に援用されていること、日本語版のスポーツコミットメントの測定尺度が作成されていることが確認された。

4. 楽しさと継続意志・行動の関係を検証するうえでの課題

スポーツコミットメント理論と新たな SCM にもとづき、楽しさと継続意志・行動の関係を検証することで、スポーツを「ささえる」活動の継続に至るメカニズムを明らかにできると考える。しかし、関係を検証するうえで、2つの課題が挙げられる。1つ目は、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを測定する尺度が作成されていないことである。本研究では、スポーツの楽しさを測定する SCQ-2 を援用し、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを測定する尺度を作成することとした。

2つ目に、スポーツを「ささえる」活動の行動指標を選定する必要がある。先行研究

では、継続性を示す行動指標として、平均活動時間（笹川スポーツ財団，2015；スポーツ庁，2018a），継続年数（北村ほか，2005），年間平均参加回数（笹川スポーツ財団，2015），活動頻度（青柳ほか，2013；スポーツ庁，2018a）が測定されている．しかし，活動年数は年齢によるバイアスがかかることから，継続指標としての妥当性が指摘されている（桜井，2005）．また，日常的にスポーツを「ささえる」活動をおこなう継続者は，過去の参加回数を正確に想起することが難しい．以上のことから，本研究では，継続的な参加行動の行動指標として，活動頻度を用いることとした．

第4節 本研究の目的および論文構成

1. 研究の目的

本博士論文の目的は、スポーツを「ささえる」活動の継続要因として楽しさに着目し、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが継続意志・行動を予測するのか、どのような楽しさの要素が継続意志・行動と関係するのかを明らかにすることである。また、それらの関係の特徴を個人属性と活動形態ごとに明らかにする。この目的を達成するために、2つの研究課題を設定する。

第1に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが、継続意志を媒介して継続的な参加行動を予測することを検証する。また、個人属性と活動形態による関係や予測力の差異を明らかにする。

第2に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素と継続意志・行動との関係を、個人属性と活動形態別に明らかにする。

2. 研究対象の位置づけ

本博士論文では、日常的なスポーツを「ささえる」活動を継続する人材不足を社会的課題とし、スポーツを「する・みる・ささえる」活動のうち、スポーツを「ささえる」

活動を対象とする。次に、スポーツを「ささえる」活動を継続する人材を拡大する、継続性を促進するために、本研究では活動の継続要因に着目する。継続要因として、人間関係や自己成長などの多数の要因が挙げられるが、本研究では、複数の研究において抽出されている活動の楽しさに焦点をあてる。最後に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを促進するマネジメントを提案するために、楽しさを感じる具体的な要素を探索的に明らかにする。本博士論文にて研究対象とする概念の位置づけを図 1-1 に示す。

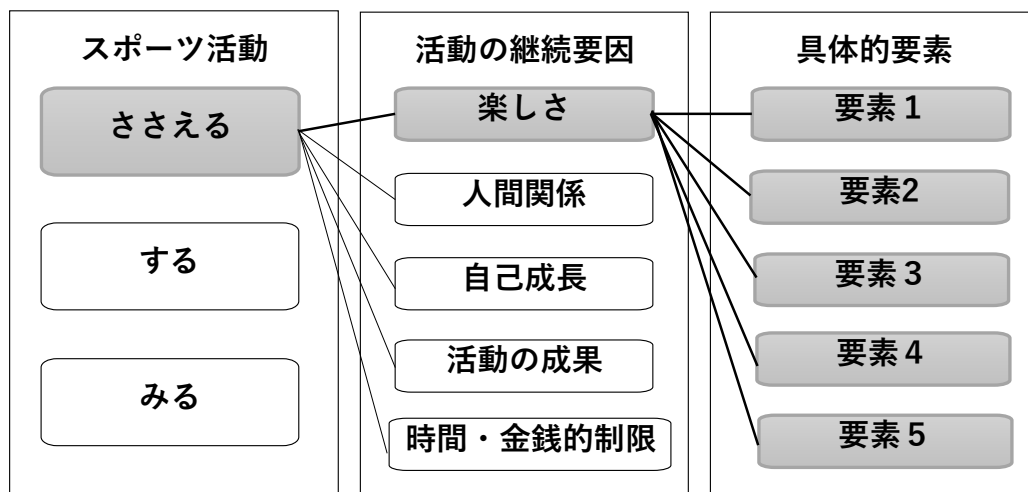


図 1-1 本博士論文にて研究対象とする概念の位置づけ

3. 研究方法

本博士論文では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ、継続意志・行動の関係を検証するにあたり、各変数を操作的に定義する。まず、継続意志としてスポーツコミットメント、継続的な参加行動の行動指標として活動頻度を設定する。また、スポーツを

「ささえる」活動の楽しさを、活動の継続要因としての「活動そのものに対する楽しさ」と「活動に楽しさを感じる具体的な要素」に分類し、検証的・探索的に関係を明らかにする。

第1章では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ、スポーツコミットメント、活動頻度の関係を明らかにするために、仮説モデルの検証をおこなう。まず、スポーツを「ささえる」活動そのものの楽しさを測定する尺度を作成するために、運動・スポーツ活動の楽しさを測定する日本語尺度を作成し（研究 1-1）、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの測定に援用した場合の妥当性および信頼性を確認する（研究 1-2）。最後に、日常的にスポーツを「ささえる」活動を継続している若年層を対象に調査をおこない、仮説モデルを検証するために、共分散構造分析をおこなう（研究 1-3）。さらに、個人属性と活動形態による関係や予測力の差異を明らかにするために、多母集団の同時解析をおこなう。第1章における研究仮説および仮説モデルは、次項にて詳細を記載する。

第2章では、個人属性と活動形態別に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素と継続意志・行動の関係を探索的に明らかにする。まず、大学生を対象として、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを感じる要素を抽出する（研究 2-1）。次に、日常的にスポーツを「ささえる」活動を継続している若年層を対象とし、個人属性と活動形態別に、楽しさの要素、スポーツコミットメント、活動頻度の相関係数を算出する（研究 1-3）。第2章では、仮説を設定せず、「どのような楽しさの要素が、継続意志・行動と関係するか」というリサーチクエスチョンに対して、探索的に関係を明らかにする。

4. 研究仮説および仮説モデル

第1章では、仮説モデル（図1-2）を用いて、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと、スポーツコミットメント、活動頻度の関係を検証する。仮説および仮説モデルの設定に際して、SCMもしくは新たなSCMにもとづく、SCQもしくはSCQ-2を使用した、コミットメントの概念を用いた、スポーツを「ささえる」活動を対象とした先行研究の知見を参照する。なお、実線は有意なパス、破線は有意でないパスを示し、誤差変数は省略する。

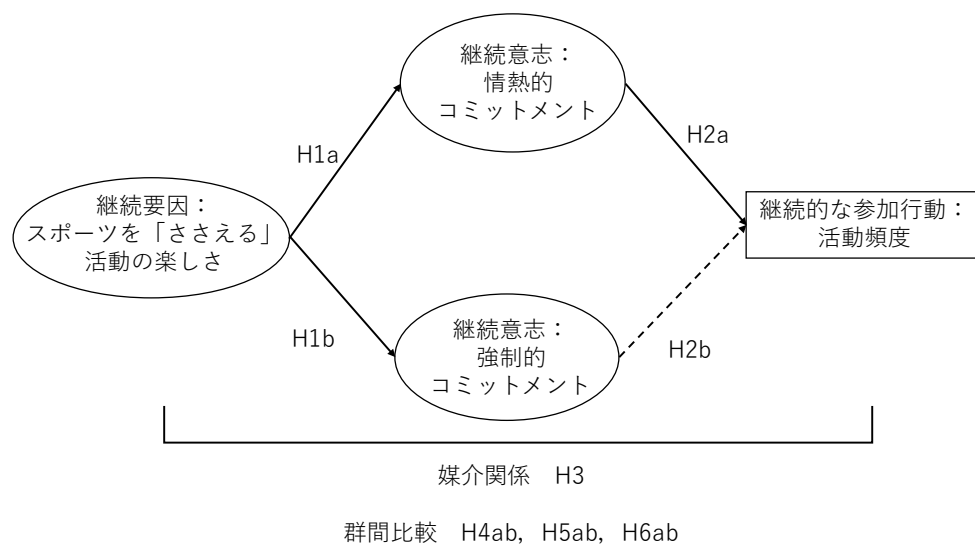


図1-2 スポーツを「ささえる」活動の継続的な参加行動を予測する仮説モデル

1) スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志の関係

スポーツ活動の楽しさは、継続意志を最も予測する要因であり、情熱的コミットメントを正に予測する（Scanlan et al., 2016）。同様に、スポーツを「ささえる」活動の楽

しさが審判の継続意志に最も関係すること (Cuskelly and Hoyer, 2013) が示されている。また、大学生ボランティアが、活動に楽しさを見出すことで継続意志を形成する可能性 (大山ほか, 2012) が示唆されている。

一方で、スポーツの楽しさは、強制的コミットメントを負に予測することが示されている (Scanlan et al., 2016)。スポーツを「ささえる」活動における楽しさと強制的コミットメントの関係は確認されていないが、楽しさが離脱意図を抑制する関係にあることから (Vanperen, 1998)、楽しさは強制的コミットメントを負に予測する可能性が示唆される。よって、以下の仮説を設定する。

H1a：スポーツを「ささえる」活動の楽しさは、情熱的コミットメントを正に予測する。

H1b：スポーツを「ささえる」活動の楽しさは、強制的コミットメントを負に予測する。

2) 継続意志・行動の関係

SCM にもとづいた継続意志と行動指標の検証結果から、スポーツコミットメントがスポーツ活動状況を予測すること (萩原・磯貝, 2014)、運動コミットメントが参加行動を正に予測すること (Wilson et al., 2004) が示されている。また、スポーツボランティアを対象とした先行研究から、ボランティアの役割に対する愛着や誇りが、費やした時間やイベントへの参加を予測することが示唆されている (Engelberg et al., 2011)。

一方で、義務的なコミットメントと継続的な参加行動の関係は弱い (Hagiwara, 2017)、関係がないとされ (Wilson et al., 2004)、一貫した結果は得られていない。スポーツを「ささえる」活動において、消極的動機をもつ活動継続者の活動頻度に個人

差があること（中澤，2012）から，強制的コミットメントが活動頻度を弱く正に予測する，もしくは関係しないと推測される．これらを踏まえて，以下の仮説を設定した．

H2a：情熱的コミットメントは，活動頻度を正に予測する．

H2b：強制的コミットメントは，活動頻度を弱く正に予測する，もしくは関係しない．

3）楽しさと継続意志・行動の関係

一連のスポーツコミットメント研究（Weiss and Amorose, 2008；Wilson et al., 2004）から，スポーツ活動の楽しさや満足感が情熱的コミットメントを予測し，情熱的コミットメントが活動頻度を予測することが明らかになっている．また，Vanuytperen（1998）は，審判の楽しさが離脱意図を媒介して継続（残留／離脱）を予測することを明らかにしている．楽しさ，情熱的コミットメント，継続的な参加行動が媒介関係にある可能性が示唆されることから，以下の仮説を設定し，共分散構造分析を用いて間接効果を検証することとした．

H3：スポーツを「ささえる」活動の楽しさは，情熱的コミットメントを媒介し，間接的に活動頻度を予測する．

4）個人属性と活動形態による差異

（1）ライフステージによる差異

スポーツボランティア経験を有する大学生は，活動の肯定的な認識が最も参加意欲を予測する（清宮ほか，2020）．また，生徒・学生は，会社員に比べ，活動への積極的・

内発的な動機による参加者や、レクリエーションを兼ねた主体的な参加者の割合が高い（松本，1999）。このことから，大学生は他の属性に比べ，活動に対する肯定的な認識が情熱的コミットメントを促進することが仮定できる。

次に，大学生は，20 代成人に比べ，スポーツボランティア活動希望率と実施率の乖離が大きい（笹川スポーツ財団，2020a，2021）。このことから，情熱的コミットメントと活動頻度の関係にライフステージによる差異が仮定できる。そこで本博士論文では，分析対象者を大学・短期大学・専門学校・大学院に在籍する学生（以下，大学生とする）と同教育機関を卒業した 20 代の成人（以下，社会人とする）に分類し，多母集団の同時解析を用いて，以下の仮説を比較検証することとした。

H4a：大学生は社会人に比べ，楽しさが情熱的コミットメントを強く予測する。

H4b：大学生は社会人に比べ，情熱的コミットメントが活動頻度を弱く予測する。

（２）性別による差異

大学生の女性は，男性に比べスポーツボランティアに対してポジティブなイメージを持ち，意欲的である（清宮ほか，2021）。また，女性は活動への積極的・内発的な動機による参加者や，レクリエーションを兼ねた主体的な参加者の割合が高い（松本，1999）。一方で，男性は他律的・義務的な参加者や何らかの報酬を求めている者の割合が高い（松本，1999）。このことから，女性は男性に比べ活動に対する肯定的な認識が情熱的コミットメントを促進することが仮定できる。

次に，10・20 代の女性は，男性に比べ日常的なスポーツ指導や運営をおこなう者の

割合が低い（スポーツ庁，2023）。このことから，女性は男性よりもスポーツを「ささえる」活動頻度が低い可能性がある。よって，本博士論文では，性別によって若年層を分類し，多母集団の同時解析を用いて，性別による差異を検証することとした。

H5a：女性は男性に比べ，楽しさが情熱的コミットメントを強く予測する。

H5b：女性は男性に比べ，情熱的コミットメントが活動頻度を弱く予測する。

（３）活動形態による差異

スポーツボランティアは，活動へのポジティブな認識が活動意欲を予測し（清宮ほか，2020），一般的なボランティアにおいて，活動を楽しみと感ずるほど休止希望が低くなることが確認されている（米澤，2010）。また，就業者を対象とした調査から，職務満足感が，組織や職業に対する愛着や積極的な関与，組織や職業を継続する義務感や離職意思と関係することが示されている（Meyer et al., 2002；佐藤ほか，2015a）。次に，スポーツボランティアは，金銭的報酬が活動意欲を予測しないが（清宮ほか，2020），一般的な就業者は，給与や昇進に対する満足感が組織コミットメントと中程度に相関する（Meyer et al., 2002）。このことから，ボランティアや就業者は，活動や職業に対する肯定的な認識が情熱的・強制的コミットメントを予測すること，就業者はボランティアに比べ，外的要因が情熱的コミットメントを予測することが仮定できる。

次に，スポーツボランティアは，就業者に比べ，年間活動回数や平均実施頻度が低い（笹川スポーツ財団，2019；スポーツ庁，2021）。スポーツボランティアの阻害要因として，活動の時間がとれないこと，仕事・学業との両立・調整が難しいことが挙げられ

(笹川スポーツ財団, 2015), 継続意志・行動の關係に活動形態による差異が仮定できる。よって, 本博士論文では, 就業やアルバイト・パートとしてスポーツを「ささえる」活動を継続する者(以下, 就業者とする)と有償・無償のボランティアとして活動を継続する者(以下, ボランティアとする)に分類し, 多母集団の同時解析を用いて, 以下の仮説を比較検証することとした。

H6a: ボランティアは就業者に比べ, 楽しさが情熱的・強制的コミットメントを強く予測する。

H6b: ボランティアは就業者に比べ, 情熱的コミットメントが活動頻度を弱く予測する。

5. 論文構成

本研究の目的を達成するために, 本博士論文は以下のように構成される。また, 各章の位置づけを図 1-3 に示す。

第 1 章では, まず, 先行研究にて残された課題を確認する(第 1 節/緒言)。次に, スポーツを「ささえる」活動の継続的な参加行動を予測するモデルを検証するために, 既存尺度を和訳し(第 2 節/研究 1-1), スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度を作成する(第 3 節/研究 1-2)。最後に, 仮説モデルを検証し, 個人属性と活動形態による比較をおこなう(第 4 節/研究 1-3)。

第 2 章では, まず, 先行研究にて残された課題を確認する(第 1 節/緒言)。次に, スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を探索的に抽出し(第 2 節/研究 2-1),

個人属性と活動形態別に、楽しさと要素と継続意志・行動の関係を探索的に明らかにする（第3節／研究2-2）。

第3章では、本博士論文で得られた結果を整理し（第1節）、総合的に考察する（第2節）。また、本研究の学術的意義を整理し（第3節）、実践的意義として、日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続的な参加行動を促進するマネジメント方略を提案する（第4節）。最後に、本博士論文の課題と展望について示す（第5節）。

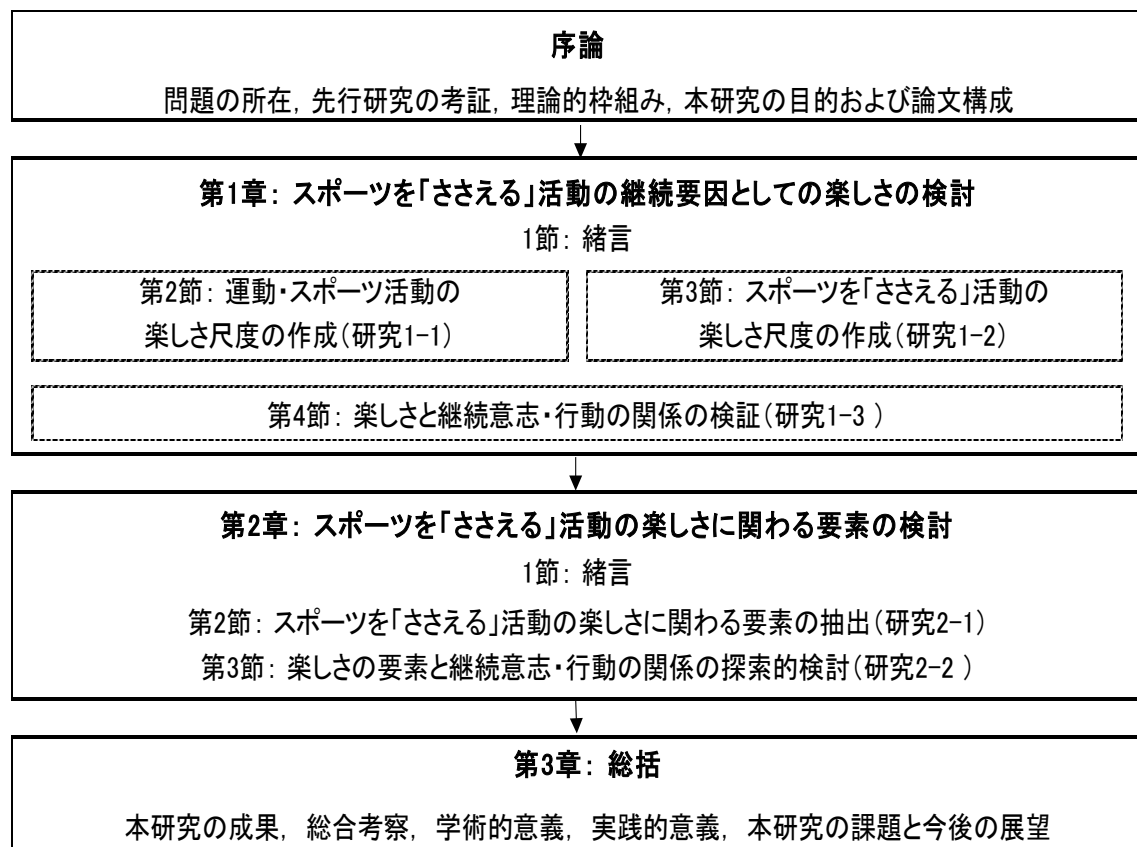


図 1-3 本博士論文の構成

第1章 スポーツを「ささえる」活動の 継続要因としての楽しさの検討

第 1 節 緒言

若年層のスポーツを「ささえる」活動の継続には、楽しさや継続意志が寄与する可能性が示唆されている。SCM は、楽しさとスポーツコミットメント、継続的な参加行動の行動指標を含むことから仮説の検証に有効であると考えられる。しかし、スポーツを「ささえる」活動そのものの楽しさを測定する尺度は作成されていない。

第 1 章では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志・行動の関係を、新たな SCM にもとづき検証する。まず、モデルの検証に使用するスポーツを「ささえる」活動の楽しさを測定する尺度がないことから、研究 1-1 および 1-2 を通して、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度を作成する。研究 1-1 では、運動・スポーツ活動の楽しさ尺度を作成する。研究 1-2 では、運動・スポーツ活動の楽しさ尺度を援用し、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の妥当性および信頼性を検証する。最後に、研究 1-3 では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ、スポーツコミットメント、活動頻度の関係を示す仮説モデルを検証する。また、個人属性と活動形態による関係や予測力の差異を確認する。

第 1 章を通して、「スポーツを『ささえる』活動の楽しさは、継続意志・行動を予測するか」、というリサーチクエスションを明らかにする。

第2節 運動・スポーツ活動の楽しさ尺度の作成（研究1-1）

1. 目的

第1章では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志・行動の関係を、新たなSCMにもとづき検証することを目的としている。研究1-1および1-2を通して、モデルの検証に使用する尺度を作成するために、研究1-1では、運動・スポーツ活動の楽しさ尺度を作成することを目的とする。この目的のために、SCQ-2の楽しさを測定する下位尺度を和訳し、大学生を対象に尺度の妥当性および信頼性を確認する。

なお、「スポーツの実施状況等に関する世論調査」（スポーツ庁、2023）や「スポーツライフに関する調査」（笹川スポーツ財団、2020a）を参照し、運動・スポーツ活動の継続経験者を対象に調査をおこなう。また、序論で述べた通り、運動・スポーツ活動の楽しさの定義に共通点がみられ、SCMが運動を対象に援用されていることから、対象を拡大した尺度を作成する。

2. 方法

1) 調査対象者と調査の手続き

九州・関東・中国地方の8大学に所属する、1年生から4年生を調査対象者とした。大学の講義や課外活動等を通して大学教員が大学生へオンライン調査の依頼をおこない、説明文書および回答用のURLもしくはQRコードを配布した。非接触式の無記名オンライン調査として、Google Formsを使用した。調査期間は、2020年6～7月であった。

2) 調査内容

(1) フェイスシート

大学、学籍番号、学年、性別、年齢、スポーツ実施状況、スポーツ活動経験（現在もしくは過去の継続種目、継続年数）への回答を求めた。

(2) 運動・スポーツ活動の楽しさ

SCQ-2のスポーツ活動の楽しさを測定する下位尺度は、1因子5項目で構成されている。回答は、「1. 全くそう思わない～5. かなりそう思う」の5件法である。日本語版を作成するにあたって、バックトランスレーションを実施した（Brislin, 1970）。まず、スポーツ健康科学を専門とする本研究の研究代表者、英語に精通したスポーツ健康科学の日本人研究者、英語教員として大学に所属する英語に精通する日本人研究者、日本語教員として大学に所属する日本語に精通する日本人研究者から協力を得て、日本語

翻訳を実施した。次に、英語を母国語とし、バイリンガルであるネイティブスピーカーによって再び英語に翻訳された。最後に、本研究の研究代表者とネイティブスピーカー、英語教員である研究者が、原文とバックトランスレーションされた英語版の質問項目を比較検討し、修正をおこなった。以上の手順により、英語版と日本語版の2つの調査項目が概念的に等しく、日本人に理解しやすいことを確認した。原文および日本語を対応させた調査項目を表2-1に示す。なお、翻訳使用にあたっては、尺度開発者であるカリフォルニア大学ロサンゼルス校のDr.Scanlan氏から翻訳使用の許可を得た。

第5項目の原文にある“Happy”は、一般的に日本語で「幸せ」と訳されることが多いが、「幸せ」の持つ意味に言語的差異がある可能性が示唆されている（大石・小宮，2018）。また、国内の運動・スポーツ活動の楽しさの要素を測定する尺度（徳永・橋本，1980；和田，1998）では、「楽しい」という用語が使用されている。そこで、「このスポーツをすることで幸せな気持ちになる」と直訳した場合と、スポーツの楽しさを簡潔かつ包括的に問うために「このスポーツをすることは楽しい」と意識した場合の日本語訳の妥当性を比較検討した。

表 2-1 SCQ-2 のスポーツの楽しさを測定する下位尺度の原文ならびに日本語訳

原版	日本語訳
1 Playing this sport is fun.	このスポーツをすることはおもしろい
2 I like playing this sport.	私はこのスポーツをすることを気に入っている
3 I love to play this sport.	私はこのスポーツをすることがとても好きだ
4 Playing this sport is very pleasurable.	このスポーツをすることでとても喜びを感じる
5 Playing this sport makes me happy.	①このスポーツをすることで幸せな気持ちになる ②このスポーツをすることは楽しい

（３）運動・スポーツ活動のコミットメント

運動・スポーツ活動の継続意志を問うために、日本語版 SCQ-2 の下位尺度である情熱的コミットメントを測定する 1 因子 6 項目（Hagiwara, 2017）を使用し、「1. 全くそう思わない～5. かなりそう思う」の 5 件法で回答を求めた。情熱的コミットメントは、「私はこのスポーツを続けていくつもりである」などの項目で構成されており、大学生アスリートを対象に妥当性および信頼性が確認されている（Hagiwara, 2017）。なお、調査時に質問文の「続けていくと」という表現を「続けると」と誤って表記したが、意味に大きな差異はないため支障はないと判断した。

（４）運動・スポーツ活動の楽しさの要素

スポーツの楽しさの要素を抽出した尺度（和田, 1988）の 15 因子 60 項目のうち、15 項目を援用し、「1. 全くそう思わない～5. かなりそう思う」の 5 件法で回答を求めた。この尺度はスポーツの楽しさの要素を因子分析によって抽出し、「スポーツは、努力すること自体が楽しい」や「スポーツをしていて、調子がいいと覚ることがあるから楽しい」などの項目から構成される（和田, 1998）。本研究では、調査対象者の回答負担を下げるために、各因子の最も寄与率が高い 1 項目を使用した。

（５）運動・スポーツ活動頻度

調査対象者の運動・スポーツ実施状況を確認する目的から、身体活動指標修正版（尼崎ほか, 2018）の活動頻度を問う 1 項目を使用した。「あなたは、普段、どのくらいの

頻度で、運動・スポーツをしていますか？」という問いに対して、継続しているもしくは過去継続していた運動・スポーツ活動の活動頻度を「1. 運動していない, 2. 月 1 回程度, 3. 月 2-3 回程度, 4. 週 1-2 回程度, 5. 週 3-4 回程度, 6. ほぼ毎日」の 6 件法で求めた。この尺度は、頻度、強度、時間を問う 3 項目で構成され、大学生を対象に妥当性および信頼性が確認されている（尼崎ほか, 2018）。なお、新型コロナウイルス感染症による運動・スポーツ活動の自粛を考慮し、今現在運動・スポーツ活動を継続している場合は、新型コロナウイルス感染症の拡大による活動自粛以前の状況を、今現在継続していない場合は、継続時のことを想起して回答するよう求めた。

3) 分析対象者の選定

調査対象者より、548 サンプルを回収した。大学名と学籍番号を用いて所属と重複データの確認をおこなった結果、所属不明の 4 データ、重複回答の 96 データを削除し、大学生 448 名を抽出した。また、研究参加の同意が得られなかった 10 名のデータを除いた。次に、運動・スポーツ活動の継続経験もしくは活動頻度に対して「運動していない」と回答した 7 名、現在および過去の運動種目および継続年数に欠損もしくは複数回答をしている 29 名、スポーツを「ささえる」活動に該当するマネージャーと回答した 1 名を除き、401 名を分析対象者とした。分析対象者の属性は、男性 254 名、女性 147 名、平均年齢は 19.47 歳（SD=1.31）であった。

4) 分析手順

運動・スポーツ活動の楽しさを測定する日本語版 SCQ-2 の正規分布を確認するために、Shapiro-Wilk の正規性の検定をおこなった。また、各項目の基礎統計量を算出した。次に、信頼性を確認するために I-R 相関分析をおこなった。さらに、構成概念妥当性を確認するために、検証的因子分析をおこなった。最後に、基準関連妥当性を確認するために、同時に測定した下位尺度や関連項目との Spearman の相関係数を算出した。相関係数は、0.2 以上が弱い相関、0.4 以上が比較的強い相関、0.7 以上を強い相関と判断した（小塩，2011）。

統計分析には、統計処理ソフト SPSS Statistics 25 および Amos 24 を使用した。有意水準は危険率 5%未満とした。モデルの適合度の評価は、GFI, AGFI, CFI, RMSEA, TLI, AIC の各指標から検討した。GFI と CFI は 0.9 以上、RMSEA は 0.1 以下が許容しうる基準値、AGFI と TLI は 1 に近いほどモデルがデータに適していると判断される（朝野ほか，2005；田部井，2001；豊田，2003a）。AIC はモデルの相対的な比較のために使用し、値が小さいほど良いモデルと判断される（朝野ほか，2005）。

5) 倫理的配慮

本研究をおこなうにあたり、長崎国際大学人間社会学部国際観光学科研究倫理委員会の承認を得た（2020 年度 F-1）。調査対象者に対して、研究目的や調査内容、個人情報保護の観点から教育並びに研究目的以外で使用しないこと、研究発表時に個人の氏名が明らかになることはないこと、同意撤回が可能であることを調査画面上にて説明した。

3. 結果

1) 分析対象者の属性

現在の運動・スポーツ実施状況について回答を求めた結果、大学の運動・スポーツ系部活動所属者 261 名、大学の運動・スポーツ系サークル・同好会所属者 17 名、学外の運動・スポーツ団体所属者 23 名、個人で活動している者 34 名、過去に運動・スポーツ活動の継続経験のある者 66 名であった。

現在運動・スポーツ活動を継続している分析対象者の、新型コロナウイルス感染症の拡大による活動自粛以前の継続期間は、平均 10.32 (SD=3.74) 年、今現在運動・スポーツ種目を継続していない分析対象者の過去の継続期間は、平均 8.42 (SD=3.20) 年であり、運動・スポーツ活動を継続していたことが示された。運動・スポーツ活動頻度は、月 1 回程度 4 名、月 2-3 回程度 16 名、週 1-2 回程度 50 名、週 3-4 回程度 97 名、ほぼ毎日 234 名であり、活動頻度が高いことが示された。継続種目から、スポーツ種目や身体活動が記載されており、生活活動を想起した分析対象者がいないことを確認した。

2) 正規分布の検討

SQC-2 を作成した先行研究 (Scanlan et al., 2016) において尺度の非正規性が確認されたことから、運動・スポーツ活動の楽しさ尺度に対して Shapiro-Wilk の正規性の検定をおこなった。その結果、正規分布が確認されなかった。尺度得点のヒストグラムを確認した結果、①「幸せ」と直訳した場合 (図 2-1) と、②「楽しい」と意識した場

合（図 2-2）のどちらも，すべて 5 点をつけた対象者の割合が高いことが明らかになった．先行研究（Scanlan et al., 2016）では，回答の偏りがみられたことから，複数の検定結果および基準を用いることで妥当性および信頼性を確認している．以上のことから，先行研究と同様に非正規分布を前提とした分析をおこない，複数の検定結果ならびに指標を用いて尺度の妥当性および信頼性を検証することとした．

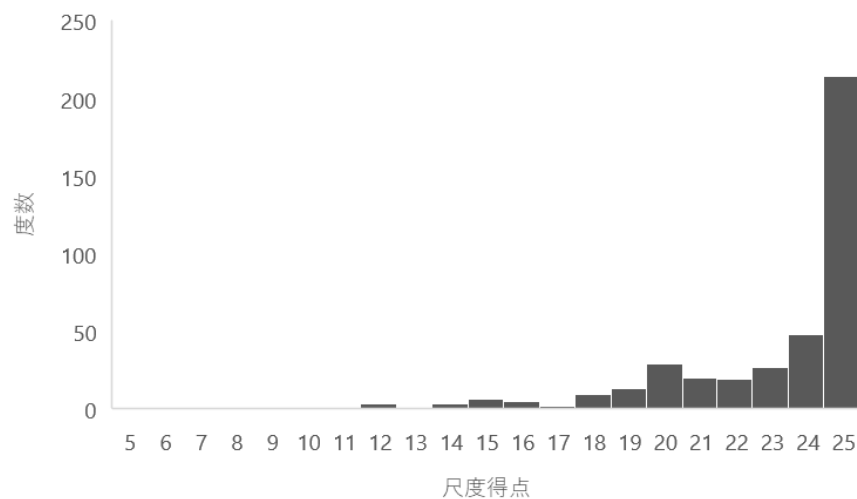


図 2-1 「幸せ」と訳した場合の尺度得点のヒストグラム

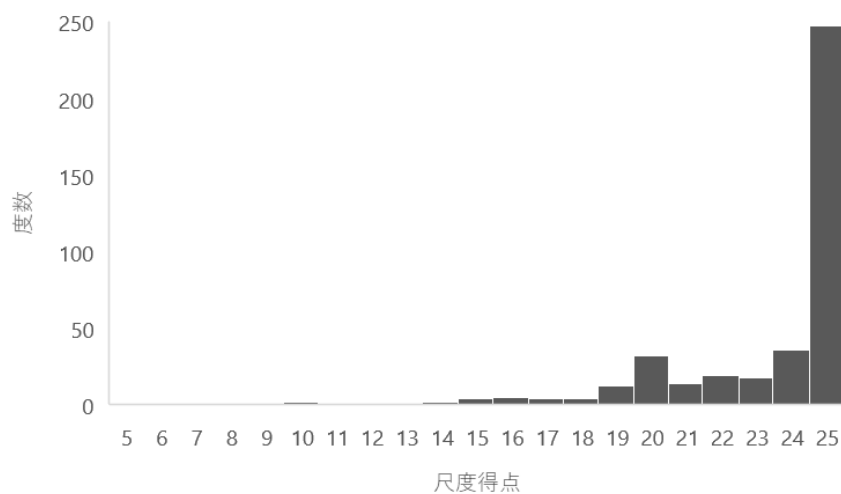


図 2-2 「幸せ」と訳した場合の尺度得点のヒストグラム

3) 基礎統計量の算出と信頼性の検討

まず、各項目の基礎統計量として、中央値および四分位範囲 (IBM Support, 2018) を算出した (表 2-2)。なお、ノンパラメトリック検定では、中央値と四分位範囲 (IQR) を記載することが一般的であるが、すべての項目の中央値に差異がないことから、要約統計量として平均値 (M) と標準偏差 (SD) を併記した。

次に、信頼性の検討として、正規分布を前提とした α 係数の算出などの内的一貫性の検討が不適切であることから (IBM, 2021)、非正規分布を前提とした項目反応理論にもとづき I-R 相関分析をおこなった (奥村ほか, 2015)。各項目の得点と当該項目を除いた尺度の合計得点に対して Spearman の相関係数を算出した結果、すべての項目間に強い有意な正の相関が確認された ($p < .001$)。

表 2-2 運動・スポーツ活動の楽しさ尺度の基礎統計と相関係数

項目	中央値	IQR	M	SD	I-R相関		
					幸せ	楽しい	
1 このスポーツをすることはおもしろい	5.00	(5.00-5.00)	4.70	0.58	.73	.78	***
2 私はこのスポーツをすることを気に入っている	5.00	(5.00-5.00)	4.69	0.64	.74	.79	***
3 私はこのスポーツをすることがとても好きだ	5.00	(5.00-5.00)	4.71	0.60	.71	.76	***
4 このスポーツをすることでとても喜びを感じる	5.00	(4.00-5.00)	4.58	0.70	.78	.74	***
5 このスポーツをすることで幸せな気持ちになる	5.00	(4.00-5.00)	4.40	0.87	.76	—	***
6 このスポーツをすることは楽しい	5.00	(5.00-5.00)	4.70	0.61	—	.79	***

*** $p < .001$

4) 構成概念妥当性の検討

構成概念妥当性を確認するため、検証的因子分析を実施した。正規分布が確認されなかったことから、最尤法との差異を検出し推定値の安定性を確認するブートストラップ

法（最尤法，標本数 1000，バイアス修正法）を用いた．ブートストラップ法は，正規分布が確認されないデータに対して共分散構造分析をおこなう際に適当な分析方法である（豊田，2003b；山本・小野寺，1999）．

分析の結果，①「幸せ」と直訳した場合（図 2-3），AGFI や RMSEA が基準を満たしておらず，構成概念妥当性が確認できなかった（GFI=.911，AGFI=.733，CFI=.944，RMSEA=.215，TLI=.888，AIC=117.46）．一方で，②「楽しい」と訳した場合（図 2-4），RMSEA の値がやや高いものの，その他の指標から許容しうる適合度が示され，構成概念妥当性が確認された（GFI=.979，AGFI=.936，CFI=.991，RMSEA=.090，TLI=.981，AIC=41.31）．また，AIC の値が小さかったことから，相対的に「楽しい」と訳した場合のモデルの適合度が高いことが確認された．最後に，各項目のバイアス値および標準誤差は，①「幸せ」と直訳した場合（バイアス：-.002 - .000，標準誤差：.03 - .04），②「楽しい」と意識した場合（バイアス：-.001 - .000，標準誤差：.02 - .04），ともに非常に低く，推定値の安定が確認された．

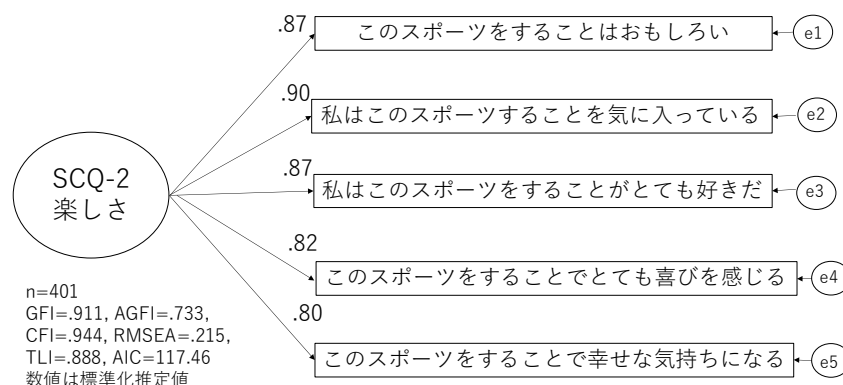


図 2-3 「幸せ」と訳した場合の検証的因子分析結果

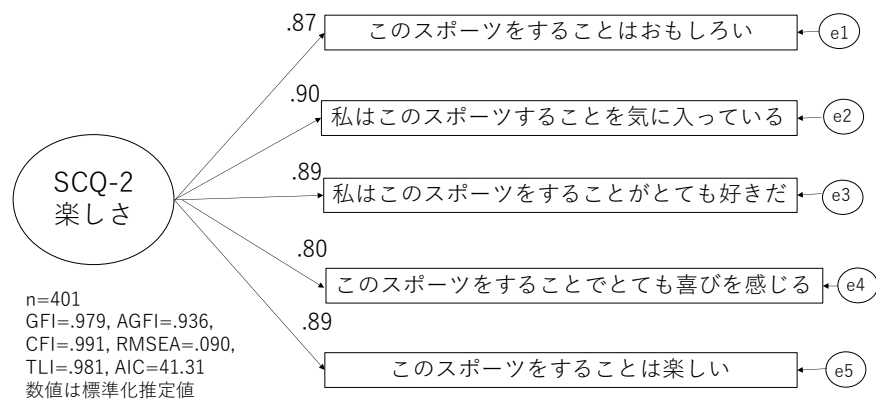


図 2-4 「楽しい」と訳した場合の検証的因子分析結果

5) 基準関連妥当性の検討

基準関連妥当性を確認するため、日本語版 SCQ-2 の情熱的コミットメントおよび運動・スポーツ活動の楽しさの要素に関する項目に対して、Spearman の相関係数を算出した。分析の結果（表 2-3）、情熱的コミットメントと比較的強い正の相関関係にあることが確認され、先行研究（Scanlan et al., 2016）を支持する結果が得られた。また、運動・スポーツ活動の楽しさの要素と正の相関関係が確認され、運動・スポーツ活動の楽しさの程度を適切に測定する妥当な尺度であることが示された。

表 2-3 運動・スポーツ活動の楽しさ尺度と関連項目との相関係数

因子・項目	幸せ		楽しい	
	ρ	p	ρ	p
日本語版SCQ-2の情熱的コミットメント	.64	***	.61	***
運動・スポーツ活動の楽しさ要素	.61	***	.58	***

*** $p<.001$

4. 考察

運動・スポーツ活動の楽しさ尺度の正規性が確認されなかった原因として、運動・スポーツの長期的な継続経験を有する大学生を対象にしたことが挙げられる。本研究で対象とした大学生は、約 84%が運動・スポーツ継続者であり、約 65%が大学の運動・スポーツ系部活動所属者であった。スポーツ活動の楽しさは、若年層の運動・スポーツ継続に最も重要な要因であること（Scanlan et al., 1993a, 1993b）から、本研究の対象者は運動・スポーツ活動を楽しんでいると認識していると推測される。運動・スポーツ継続者を対象とした先行研究においても、尺度の非正規分布が確認されており（Scanlan et al., 2016）、活動継続者が楽しさを強く認識していると推測される。

また、第 5 項目を「このスポーツをすることで幸せな気持ちになる」と直訳した場合の構成概念妥当性が確認できなかった原因として、SCQ が作成された欧米と日本人の「幸せ」という語彙の捉え方が異なること（大石・小宮，2012）が影響したと推測される。スポーツイベントが社会や他者と協調することを幸福と感じる「相互協調的幸福感」（児嶋・伊藤，2019）に肯定的影響を与えることが明らかとなっているが、先行研究はそれほど多くはない。時間や費用、エネルギーを費やして、身体的および心理的利益を獲得するスポーツ参加者の幸福感を解明しようとした研究は少なく（佐藤ほか，2015b）、日本においてスポーツ活動に対する直接的な幸福感を問うことが一般的でないことが原因であると考えられる。

5. 要約

研究 1-1 の目的は、運動・スポーツ活動そのものの楽しさを測定する尺度を作成することであった。尺度作成にあたり、SCQ-2 の楽しさを測定する下位尺度を和訳した。次に、運動・スポーツ活動の継続経験を有する大学生を対象に調査をおこない、尺度の妥当性および信頼性を確認した。研究 1-1 で示された結果は、以下のとおりである。

I-R 相関係数を算出した結果、強い正の相関が示され、信頼性が確認された。次に、検証的因子分析の結果、適合度の相対比較によって、第 5 項目を「楽しい」と訳した場合の構造概念妥当性が確認された。最後に、関連尺度および項目との相関係数を算出した結果、比較的強い相関が示され、基準関連妥当性が確認された。つまり、第 5 項目を「楽しい」と訳した場合、運動・スポーツ活動の楽しさ尺度が、運動・スポーツ活動そのものに対する楽しさを適切に測定する妥当な尺度であることが示された。

第3節 スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の作成（研究1-2）

1. 目的

第1章では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志・行動の関係を、新たなSCMにもとづき検証することを目的としている。研究1-1および1-2を通して、モデルの検証に使用する尺度を作成するために、研究1-1では、運動・スポーツ活動そのものの楽しさを測定する尺度を作成した。次に、研究1-2では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度を作成することを目的とする。この目的のために、スポーツを「ささえる」活動の継続経験を有する若年層を対象に、研究1-1にて作成した尺度を援用し、妥当性および信頼性を確認する。

2. 方法

1) 調査対象者および調査の手続き

本研究では、大学生と、大学生を除く10・20代の若年層を調査対象とし、2つの方法で調査をおこなった。まず、大学生のデータを得るために、九州・中部・関東・四国の7大学に所属する1年生から4年生を対象とし、大学の講義や課外活動等を通して大学教員や部活動顧問が大学生へオンライン調査の依頼をおこなった。オンライン調査として、Microsoft Formsを使用し、説明文書および回答用のURLもしくはQRコードを配布した。

次に、大学生を除く10・20代の若年層のデータを得るために、インターネット調査会社マクロミルの登録モニタのうち、18～29歳の若年層を対象とし、マクロミルに対してアンケート調査の実施およびデータの収集を依頼した。調査期間は、2022年6～7月であった。

オンライン調査において、教示文を読まないといった望ましくない回答行動が問題視され、連続同一回答数による不適切な回答者の選定が推奨されている（尾崎・鈴木，2019）。データの信頼性を確保するために、研究代表者が、継続経験と継続期間の不一致回答（1年以上活動した経験があると回答しているものの、継続期間に「1年未満」と回答）、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度とスポーツ指導者・コミットメント尺度に対する連続同一回答を確認し、分析対象者を選定した。

2) 調査内容

(1) 基礎統計：大学生に対して性別と学年，マクロミルの登録モニタに対して性別と年齢の回答を求めた。

(2) 継続経験：スポーツを「ささえる」活動の活動形態および活動内容を例示し，年に3回以上の活動を1年以上実施した経験について，①現在，継続している，②過去に継続経験がある，③継続した経験がない，から該当するものを選択するよう求めた。一過性の活動者と区別する目的から，イベントボランティアの平均実施回数（笹川スポーツ財団，2019）を参照し，活動頻度の基準として提示した。

(3) 継続期間：スポーツを「ささえる」活動の継続期間を問うために，笹川スポーツ財団（2019）の継続期間を参照し，「1. 1年未満，2. 1-2年程度，3. 2-3年程度，4. 3-4年程度，5. 4-5年程度，6. 5-10年程度，7. 10年以上」の7件法で求めた。

(4) 活動頻度：スポーツを「ささえる」活動の活動頻度を問うために，身体活動指標修正版（尼崎ほか，2018）を援用した。継続経験者を対象としていることから，「運動していない」を「年数回程度」と変更し，「1. 年数回程度，2. 月1回程度，3. 月2-3回程度，4. 週1-2回程度，5. 週3-4回程度，6. ほぼ毎日」の6件法で求めた。

(5) 活動内容：具体的なスポーツを「ささえる」活動の実施内容を問うために、「スポーツボランティアに関する調査 2019」（笹川スポーツ財団，2019）を参照した。各活動の具体例を提示し，日常的な活動として，①スポーツの指導，②スポーツの審判，③団体・クラブの運営や世話，④スポーツ施設の管理の手伝い，⑤団体・クラブの練習・大会参加・運営のための補助的活動の 5 項目を挙げた。また，地域のスポーツ大会・イベントにおける活動として，⑥スポーツの審判，⑦運営や世話，⑧補助的活動の 3 項目を挙げた。最後に，⑨全国・国際的スポーツ大会・イベントのスポーツの審判，運営や世話，補助的活動，⑩その他，わからない，を挙げ，該当するものを選択するよう求めた。

(6) 活動形態：スポーツを「ささえる」活動の実施形態について，NPO スタッフの実態調査（労働政策研究・研修機構，2006）を参照した。①企業や組織と雇用契約を結び，正職員として給与を受け取る労働（就業），②アルバイト，パートなどの非正規職員，③謝金・弁当などの謝礼のあるボランティア，④謝礼のないボランティア，⑤その他・わからない，から該当するものを選択するよう求めた。

(7) 活動の楽しさ：スポーツを「ささえる」活動の楽しさを問うために，研究 1-1 で作成した運動・スポーツ活動の楽しさ尺度の 1 因子 5 項目を援用した（表 2-4）。「このスポーツは」という表現を「このスポーツを『ささえる』活動は」と変更し，「1. 全くそう思わない～5. かなりそう思う」の 5 件法で回答を求めた。

表 2-4 スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の測定項目

項目
1 このスポーツを「ささえる」活動をすることはおもしろい
2 私はこのスポーツを「ささえる」活動をすることを気に入っている
3 私はこのスポーツを「ささえる」活動をすることがとても好きだ
4 このスポーツを「ささえる」活動をすることでとても喜びを感じる
5 このスポーツを「ささえる」活動をすることは楽しい

(8) 活動の継続意志：スポーツを「ささえる」活動の継続意志を問うために、スポーツ指導・コミットメント尺度の 2 因子 11 項目（八尋・萩原，2019）を援用した。

「このスポーツの指導を」という教示文を「このスポーツを『ささえる』活動を」と変更し、「1. 全くそう思わない～5. かなりそう思う」の 5 件法で回答を求めた。この尺度は、日本語版 SCQ-2（Hagiwara, 2017）を援用しており、情熱的・強制的コミットメントの 2 因子で構成され、運動部活動の顧問を対象に、妥当性および信頼性が確認されている（八尋・萩原，2019）。

3) 分析対象者の選定

大学生の回答者810名のうち、スポーツを「ささえる」活動の継続経験に対して「継続した経験がない」と回答した461名，研究参加の同意が得られなかった32名を除外した。また，不適切な回答者（回答の不一致：119名，連続同一回答：21名）を分析から除外した。

次に，大学生を除く10・20代の若年層を選定するために，マクロミルの登録モニタの回答者151名のうち，大学生25名を除外した（以降，10・20代成人と表記する）。

また、不適切な回答者（回答の不一致：40名，連続同一回答：5名）を分析から除外した。最終的に，分析対象者として258名（大学生177名，10・20代成人81名）が選定された。大学生とマクロミルの登録モニタにおける分析対象者の選定プロセスと除外対象者数を図2-5，2-6に示す。

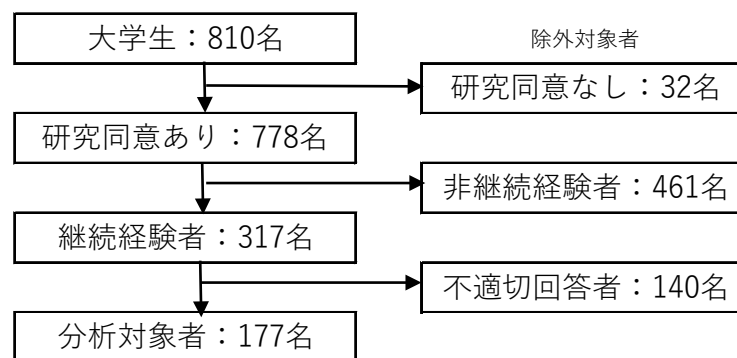


図 2-5 大学生における分析対象者の選定プロセスと除外対象者数

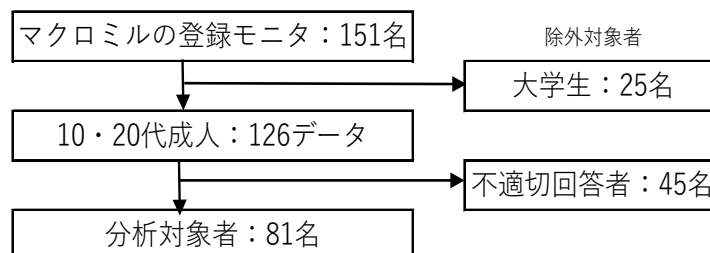


図 2-6 マクロミルの登録モニタにおける分析対象者の選定プロセスと除外対象者数

4) 分析手順

分析対象者の属性を確認するために，すべての分析対象者を単一母集団とした基礎統計量を算出した。また，集団別の属性を確認するために，大学生と10・20代成人の基

基礎統計量の算出をおこなった。活動内容は、スポーツの指導、スポーツの審判、団体・クラブの運営や世話、スポーツ施設の管理の手伝い、団体・クラブの練習・大会参加・運営のための補助的活動を「日常的な活動」として合算し、集計した。また、地域のスポーツ大会・イベントのスポーツの審判、運営や世話、補助的活動を「地域のイベント」として合算し、集計した。

次に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の正規分布を確認するために、Shapiro-Wilk の正規性の検定をおこなった。また、各項目の基礎統計量を算出した。次に、信頼性を確認するために、I-R 相関分析をおこなった。さらに、構成概念妥当性を確認するために、検証的因子分析をおこなった。その際、ブートストラップ法（最尤法、標本数 1000、バイアス修正法）を採用した。最後に、基準関連妥当性を確認するために、同時に測定した尺度との Spearman の相関係数を算出した。

モデルの適合度の評価は、GFI, AGFI, CFI, RMSEA, TLI の各指標から検討した。統計分析には、統計処理ソフト SPSS Statistics 29 および Amos24 を使用した。有意水準は危険率 5%未満とした。

5) 倫理的配慮

本研究をおこなうにあたり、九州産業大学倫理委員会の承認を得た（2022-0002 号）。調査対象者に対して、研究目的や調査内容、個人情報保護の観点から教育並びに研究目的以外で使用しないこと、研究発表時に個人情報が明らかになることはないことを調査画面上にて説明し、同意を得た。

3. 結果

1) 分析対象者の属性

大学生とマクロミルの登録モニタを対象に収集したデータのうち、最終的な分析対象者の属性を表 2-5 に示す。分析対象者のうち、「現在，継続している」と回答した者は 38.4%，「過去に継続経験がある」と回答した者は 61.6%であった。活動期間は，「1-2 年程度」と回答する者が 33.3%と最も多く，活動頻度は「年数回程度」と回答する者が 39.9%と最も多かった。活動内容について，日常的な活動が 64%，地域や全国・国際的なスポーツイベントが 26.8%であった。活動形態について，無償ボランティアが 36.8%と最も多く，ついで「その他，わからない」と回答した者が 21.3%であった。

表 2-5 分析対象者の属性

調査項目	全体		大学生		10・20代成人	
	n=258		n=177		n=81	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
【性別】						
男性	103	39.9	72	40.7	31	38.3
女性	155	60.1	105	59.3	50	61.7
【年代】						
10代	140	54.3	138	78.0	2	2.5
20代	118	45.7	39	22.0	79	97.5
【継続状況】						
現在、継続している	99	38.4	65	36.7	34	42.0
過去に継続経験がある	159	61.6	112	63.3	47	58.0
【継続期間】						
1-2年程度	86	33.3	55	31.1	31	38.3
2-3年程度	83	32.2	60	33.9	23	28.4
3-4年程度	29	11.2	16	9.0	13	16.0
4-5年程度	14	5.4	10	5.6	4	4.9
5-10年程度	26	10.1	19	10.7	7	8.6
10年以上	20	7.8	17	9.6	3	3.7
【活動頻度】						
年数回程度	103	39.9	81	45.8	22	27.2
月1回程度	47	18.2	21	11.9	26	32.1
月2-3回	40	15.5	25	14.1	15	18.5
週1-2回	23	8.9	16	9.0	7	8.6
週3-4回	14	5.4	10	5.6	4	4.9
ほぼ毎日	31	12.0	24	13.6	7	8.6
【活動内容】						
日常的な活動	165	64.0	125	70.6	40	49.4
地域のイベント	57	22.1	37	20.9	20	24.7
全国・国際的なイベント	12	4.7	7	4.0	5	6.2
その他、わからない	24	9.3	8	4.5	16	19.8
【活動形態】						
労働（就業）	19	7.4	6	3.4	13	16.0
アルバイト・パート	39	15.1	19	10.7	20	24.7
有償ボランティア	50	19.4	31	17.5	19	23.5
無償ボランティア	95	36.8	74	41.8	21	25.9
その他、わからない	55	21.3	47	26.6	8	9.9

2) 正規分布の検討

スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度に対して Shapiro-Wilk の正規性の検定をおこなった結果、正規分布が確認されなかった ($W=.94$, $p<.001$)。尺度得点のヒストグラムを確認した結果 (図 2-7)、すべて4もしくは5点をつけた対象者の割合が高いことが明らかになった。以後、非正規分布を前提とした分析をおこない、複数の検定結果ならびに指標を用いて尺度の妥当性および信頼性を検証することとした。

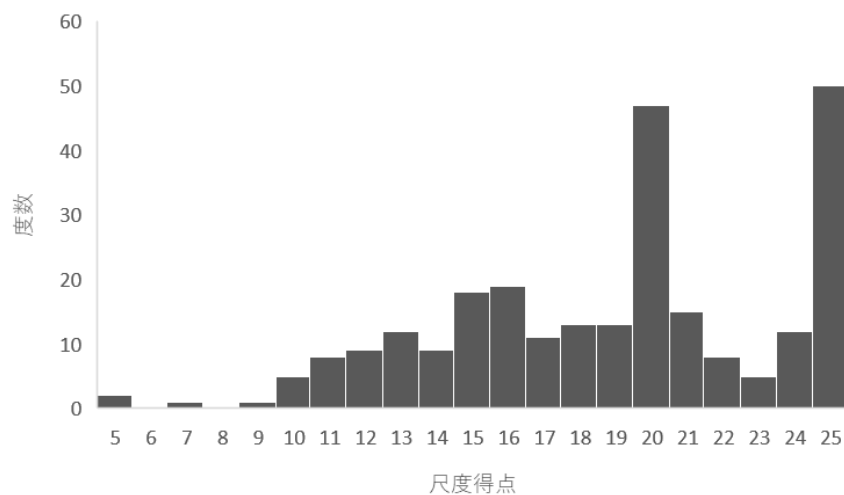


図 2-7 尺度得点のヒストグラム

3) 基礎統計量の算出と信頼性の検討

まず、各項目の基礎統計量として、中央値および四分位範囲 (IBM Support, 2018) を算出した (表 2-6)。また、要約統計量として平均値と標準偏差を併記した。次に、信頼性を検討するために、I-R 相関分析として Spearman の相関係数を算出した結果、すべての項目間に強い有意な正の相関が確認された ($\rho = .72-.85$, $p<.001$)。

表 2-6 測定項目の基礎統計と相関係数

項目	中央値	IQR	M	SD	I-R相関
1 このスポーツを「ささえる」活動することはおもしろい	4.00	(3.00-5.00)	3.81	1.10	.72 ***
2 私はこのスポーツを「ささえる」活動することを気に入っている	4.00	(3.00-5.00)	3.78	1.06	.84 ***
3 私はこのスポーツを「ささえる」活動することがとても好きだ	4.00	(3.00-5.00)	3.78	1.07	.85 ***
4 このスポーツを「ささえる」活動することでとても喜びを感じる	4.00	(3.00-5.00)	3.75	1.05	.84 ***
5 このスポーツを「ささえる」活動することは楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.80	1.03	.85 ***

*** $p<.001$

4) 構成概念妥当性の検討

構成概念妥当性を確認するため、検証的因子分析をおこなった。分析の結果（図 2-8），やや RMSEA の値が高いものの、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の適合度が確認された（GFI=.972, AGFI=.916, CFI=.988, RMSEA=.096, TLI=.976）。また、各項目の標準化係数におけるバイアス値（-.001 - .002）および標準誤差（.02 - .05）は低く、推定値の安定性が確認された。

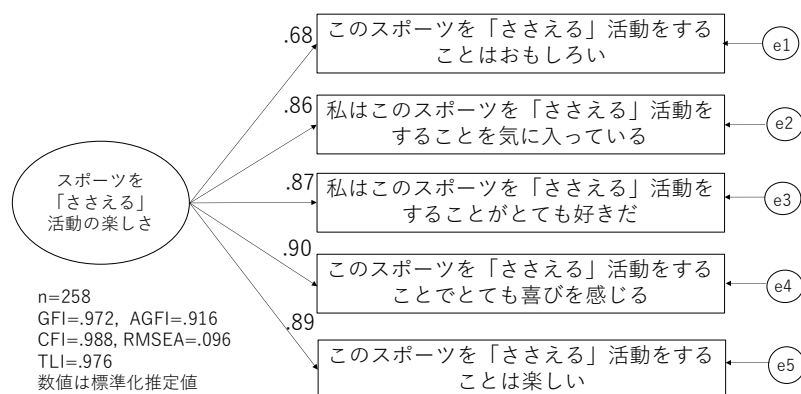


図 2-8 スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の検証的因子分析結果

5) 基準関連妥当性の検討

基準関連妥当性を確認するため、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度とスポーツ指導者・コミットメント尺度の下位尺度に対して、Spearman の相関係数を算出した。分析の結果、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度と情熱的コミットメント ($\rho = .61, p < .001$)、強制的コミットメント ($\rho = -.40, p < .001$) の間に比較的強い有意な相関がみられ、先行研究 (Scanlan et al., 2016) を支持する結果が得られた。

4. 考察

本研究で調査対象とした大学生のうち、活動継続者は約 8%であり、過去 1 年間にスポーツボランティアを実施した一般大学生の実施率 9%（笹川スポーツ財団，2021）と同程度の値を示した。運動部活動や健康・スポーツ関連の講義を通じて調査を依頼したため、活動継続者の割合が高かったと推測される。また、大学生の約 2 割が活動形態を認識していなかった。この原因として、部活動をはじめとした所属先や他者からの強い依頼を受けたり（清宮ほか，2020）、授業の一環として参加することがある（二宮，2020）ため、活動の位置づけが不明確であったと考えられる。

次に、スポーツを「ささえる」活動の継続経験を有する若年層を対象に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の妥当性および信頼性が確認された。活動の楽しさは、日常的・地域規模のスポーツを「ささえる」活動に共通しており（志賀・荒井，2013；山口ほか，2016）、活動によって得られる「喜び」や「楽しさ」などの肯定的な感情表現が継続経験者の認識と適合したと考えられる。一方で、RMSEA の値がやや高かった原因として、観測変数が少なく自由度が小さいこと（豊田，2003a）、継続者と離脱者、多様な活動形態の活動経験者の混在による回答のばらつきが挙げられる。

5. 要約

研究 1-2 の目的は、スポーツを「ささえる」活動そのものに対する楽しさを測定する尺度を作成することであった。尺度作成にあたり、研究 1-1 で作成した運動・スポーツ活動の楽しさ尺度を援用した。次に、スポーツを「ささえる」活動の継続経験を有する若年層を対象に調査をおこない、尺度の妥当性および信頼性を確認した。研究 1-2 で示された結果は、以下のとおりである。

I-R 相関係数を算出した結果、強い正の相関が示され、信頼性が確認された。次に、検証的因子分析の結果、モデルの適合度から、構造概念妥当性が確認された。最後に、関連尺度との相関係数を算出した結果、比較的強い相関が示され、基準関連妥当性が確認された。つまり、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度が、スポーツを「ささえる」活動そのものに対する楽しさを適切に測定する妥当な尺度であることが示された。

第 4 節 楽しさと継続意志・行動の関係の検証（研究 1-3）

1. 目的

第 1 章では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志・行動との関係を、新たな SCM にもとづき検証することを目的としている。この目的のために、研究 1-1 および 1-2 を通して、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを測定する尺度を作成した。

研究 1-3 では、日常的なスポーツを「ささえる」活動を継続する若年層を対象とし、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ、スポーツコミットメント、活動頻度の関係を検証することを目的とする。この目的のために、仮説モデルの検証をおこない、個人属性と活動形態別にモデルの適合と予測力の差異の検証をおこなう。本研究によって、「スポーツを『ささえる』活動の楽しさは、継続意志・行動を予測するか」、というリサーチクエスチョンを明らかにする。

2. 方法

1) 調査対象者および調査の手続き

スポーツ指導者を対象とした大規模調査（石黒，2019）を参照し，二段階のアンケート調査を実施した．インターネット調査会社フリージーの登録モニタのうち，職業として「学生」と登録している 18～24 歳の学生（以下，大学生とする）10,000 名，職業として「学生」もしくは「無職」以外と登録している 22～29 歳の成人（以下，社会人とする）10,000 名を対象とし，スクリーニング調査を依頼した．スクリーニング調査に際して，スポーツボランティアの実施率の性差に鑑み（笹川スポーツ財団，2019），男性 8,000 名と女性 12,000 名に割付けスクリーニング調査を依頼した．次に，スクリーニング調査の回答をもとに，日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続者を選定し，本調査を依頼した．

オンライン調査において，教示文を読まないといった望ましくない回答行動が問題視され，連続同一回答数と回答時間による不適切な回答者の選定が推奨されている（尾崎・鈴木，2019）．本調査に際して，データの信頼性を確保するために，インターネット調査会社に対して，回答傾向の偏りや，回答時間が平均に比べ極端に短い回答者を除外するデータクリーニングを依頼した．最後に，研究代表者が，予備調査と本調査における同一質問項目（活動内容）に対する不一致回答，スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度とスポーツ指導者・コミットメント尺度に対する連続同一回答，年齢と最終学歴の不一致（e.g., 20 歳であるにも関わらず，最終学歴として「大学卒業」を選択）を

確認し、分析対象者を選定した。スクリーニング調査および本調査は、2023年2～3月に実施した。

2) 調査内容

(1) スクリーニング調査

- ・ **基礎統計**：性別、年齢の回答を求めた。
- ・ **学歴**：大学生のうち、大学生・短大生・大学院生を選定するために、在籍状況を問う項目を設定した。①高等学校（高校）・高等専門学校（高専）、②短期大学（短大）・専修学校（専修・専門）、③大学、④大学院、⑤その他・わからない、から該当するものを選択するよう求めた。

同様に、社会人のうち、大学卒業者を選定するために、最終学歴を問う項目を設定した。①高等学校卒業（高校）・高等専門学校卒業（高専）、②短期大学卒業（短大）・専修学校卒業（専修・専門）、③大学卒業、④大学院修了、⑤その他・わからない、から該当するものを選択するよう求めた。ボランティア活動の参加に学歴が関係すること（猿渡，2017）から、在籍教育機関／最終学歴を統制した。

- ・ **継続経験**：日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続者を選定するために、活動経験を問う項目を設定した。活動形態および活動内容を例示し、6か月以上継続した経験について、大学生は、①現在、継続している、②過去に継続経験がある、

③継続した経験がない，から該当するものを選択するよう求めた．社会人は，①現在，継続している，②現在は継続していないが，社会人になってから継続経験がある，③現在は継続していないが，高校生や大学生の頃に継続経験がある，④継続した経験がない，から該当するものを選択するよう求めた．

- ・ **継続期間**：継続的な活動者を選定するために，スポーツを「ささえる」活動の継続期間を問う項目を設定した．笹川スポーツ財団（2019）および北村ほか（2005）の継続期間を参照し，「1．6 か月未満，2．6 か月以上1 年未満，3．1-2 年程度，4．2-3 年程度，5．3-4 年程度，6．4-5 年程度，7．5 年以上」の7 件法で求めた．
なお，行動変容ステージモデル（Prochaska et al., 1992）を参照し，「維持期」にあたる6 か月以上を継続的な活動者の基準とした．
- ・ **活動頻度**：定期的な活動者を選定するために，スポーツを「ささえる」活動の活動頻度を問う項目を設定した．身体活動指標修正版（尼崎ほか，2018）を援用した．また，笹川スポーツ財団（2019）の年間平均実施回数を参照し，選択肢として「運動していない」を「年に数回程度」に変更し，「2 か月に1 回程度」を加え，「1．年に数回程度，2．2 か月に1 回程度，3．月1 回程度，4．月2-3 回程度，5．週1-2 回程度，6．週3-4 回程度，7．ほぼ毎日」の7 件法で求めた．なお，日常的なスポーツボランティアの年間の平均実施回数は活動内容によって差異があるが（笹川スポーツ財団，2019），最も活動頻度が少ない活動内容（施設管理の手伝い）の年間平均実施回

数を最低基準として参照し、2 か月に 1 回程度を活動継続者の基準とした。

- ・ **活動内容**：日常的な活動者を選定するために、スポーツを「ささえる」活動の実施内容を問う項目を設定した。「スポーツボランティアに関する調査 2019」（笹川スポーツ財団，2019）を参照した。各活動の具体例を提示し，①日常的な活動，②地域のスポーツイベント，③全国・国際的スポーツイベント，④その他・わからない，から該当するものを選択するよう求めた。

（2）本調査

- ・ **活動内容**：具体的なスポーツを「ささえる」活動の実施内容を問うために、「スポーツボランティアに関する調査 2019」（笹川スポーツ財団，2019）を参照した。各活動の具体例を提示し，日常的な活動として，①団体・クラブでのスポーツの指導，②団体・クラブでのスポーツの審判，③団体・クラブの運営や世話，④スポーツ施設の管理の手伝い，⑤団体・クラブの練習・大会参加・運営のための送迎や準備・片付け・事務作業などの補助的活動，⑥その他・わからない，から該当するものを選択するよう求めた。

また，不適切な回答者を選定する目的から，地域・全国・国際的スポーツイベントにおける活動として，⑦大会・イベントでのスポーツの審判，大会・イベントの運営や世話，大会・イベントのための準備や撤収・受付や案内などの補助的活動，⑧その他・わからない，を選択肢として提示した。

- ・ **活動形態**：スポーツを「ささえる」活動の実施形態について、NPO スタッフの実態調査（労働政策研究・研修機構，2006）を参照した。①企業や組織と雇用契約を結び、正職員として給与を受け取る労働（就業）、②アルバイト、パートなどの非正規職員、③謝金・弁当などの謝礼のあるボランティア、④謝礼のないボランティア、⑤その他・わからない、から該当するものを選択するよう求めた。
- ・ **活動の楽しさ**：スポーツを「ささえる」活動の楽しさを問うために、研究 1-2 で作成したスポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の 1 因子 5 項目を使用した。「1. 全くそう思わない～5. かなりそう思う」の 5 件法で回答を求めた。
- ・ **活動の継続意志**：スポーツを「ささえる」活動の継続意志を問うために、スポーツ指導・コミットメント尺度の 2 因子 11 項目（八尋・萩原，2019）を援用した。「このスポーツの指導を」という教示文を「このスポーツを『ささえる』活動を」と変更し、「1. 全くそう思わない～5. かなりそう思う」の 5 件法で回答を求めた。

3) 分析対象者の選定

スクリーニング調査に対して、大学生 9,413 名、社会人 10,000 名から回答を得た。スクリーニングとして、継続経験、活動内容、継続期間、活動頻度、在籍する教育機関／最終学歴を確認した。調査結果から、①現在活動を継続していること、②活動内容が日常的なスポーツを「ささえる」活動であること、③活動頻度が 2 か月に 1 回以上であ

ること、④継続期間が6か月以上であること、⑤短期大学・専門学校・大学・大学院の在籍者／卒業者であることを確認し、482名（大学生252名、社会人230名）を本調査の分析対象者として選定した。

本調査の実施後、得られた回答をデータクリーニングした結果、338名（大学生160名、社会人178名）のデータを収集した。不適切な回答者（大学生21名、社会人45名）、活動形態として「その他、わからない」を選択した者（大学生13名、社会人9名）を分析から除外し、最終的に、分析対象者として250名（大学生126名、社会人124名）が選定された。分析対象者の選定プロセスと除外対象者数を図2-9に示す。

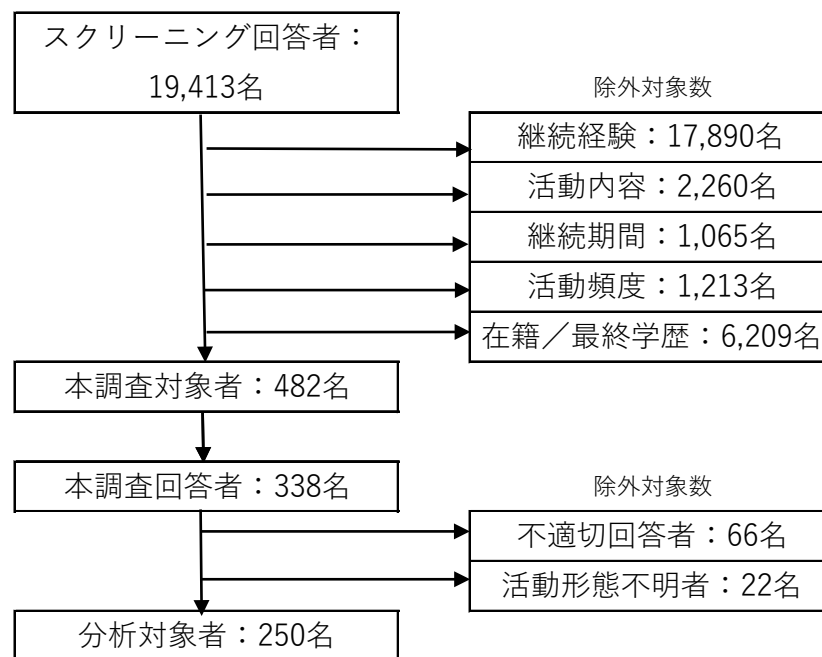


図2-9 分析対象者の選定プロセスと除外対象者数

4) 分析手順

分析対象者の属性を確認するために、すべての分析対象者を単一母集団とした基礎統計量の算出と、個人属性と活動形態ごとのカイ二乗検定をおこなった。また、ライフステージ別の分析対象者の属性を確認するために、大学生と社会人の基礎統計量の算出とカイ二乗検定をおこなった。次に、日常的なスポーツを「ささえる」活動を継続する若年層を対象とした場合の、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の妥当性および信頼性を確認するために、I-R 相関分析および検証的因子分析をおこなった。その際、ブートストラップ法（最尤法，標本数 1000，バイアス修正法）を採用した。

さらに、仮説モデルの検証，母集団別のモデルの検証，群間比較をおこなうために，すべての分析対象者を単一母集団とみなした仮説モデルの検証，母集団別の解析，配置不変性の検討，差の検定の順で多母集団の同時解析（豊田，2007）をおこなった。

まず，仮説モデルの検証として，分析対象者を単一母集団として共分散構造分析をおこなった。間接効果の算出のために，ブートストラップ法（最尤法，標本数 1000，バイアス修正法）を採用した（豊田，2007）。モデルの適合度の評価は，GFI，AGFI，CFI，RMSEA，TLI，AIC の各指標から検討した。モデルの識別のために各潜在変数の第 1 項目のパスを 1 に固定し，パス係数は標準化推定値にもとづき解釈をおこなった（小塩，2012；豊田，2007）。

また，個人属性と活動形態別の分析および差の検定は，水落・渡部（2019）を参照し，ライフステージ（大学生 126 名，社会人 124 名），性別（男性 133 名，女性 117 名），活動形態（就業者 140 名，ボランティア 110 名）ごとにおこなった。標準偏回帰

係数の差異は、1.96 以上で 5%水準、2.33 以上で 1%水準、2.58 以上で 0.1%水準の有意差があると判断した（小塩，2012）。統計分析には、SPSS Statistics 28 および Amos24 を使用し、有意水準は危険率 5%未満とした。

5) 倫理的配慮

本研究をおこなうにあたり、九州産業大学倫理委員会の承認を得た（2022-0018 号）。調査対象者に対して、研究目的や調査内容、個人情報保護の観点から教育並びに研究目的以外で使用しないこと、研究発表時に個人情報が明らかになることはないことを調査画面上にて説明し、同意を得た。

3. 結果

1) 分析対象者の属性

調査対象とした若年層のうち、予備調査における継続者の出現率は、大学生 9.1% (855 名)、社会人 6.7% (668 名)、非継続経験者の出現率は、大学生 77.7% (7,314 名)、社会人 79% (7,895 名) であった。収集したデータのうち、最終的な分析対象者の属性を表 2-7 に示す。継続期間・活動頻度・活動内容・活動形態に偏りがみられ、大学生は社会人に比べ、活動頻度が高い者の割合が高かった。加えて、大学生は無償ボランティアやアルバイト・パート、社会人は就業として活動する者の割合が高かった。

2) 信頼性と構成概念妥当性の検討

日常的なスポーツを「ささえる」活動を継続する若年層を対象とし、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の信頼性を確認するために、I-R 相関分析として Spearman の相関係数を算出した。その結果、すべての項目間に強い有意な正の相関が確認された ($\rho = .80-.86$, $p < .001$)。次に、構成概念妥当性を確認するため、検証的因子分析をおこなった。分析の結果、楽しさ因子の適合度が確認され (GFI=.973, AGFI=.919, CFI=.988, RMSEA=.096, TLI=.975, AIC=36.368), 各項目の標準化係数におけるバイアス値 ($-.003 - .001$) および標準誤差 (.02 - .03) は低く、推定値の安定性が確認された。

表 2-7 分析対象者の属性

調査項目	全体			大学生			社会人		
	n=250			n=126			n=124		
	人数	割合	χ^2	人数	割合	χ^2	人数	割合	χ^2
【性別】									
男性	133	53.2	1.02	56	44.4	1.56	77	62.1	7.26 **
女性	117	46.8		70	55.6		47	37.9	
【年代】									
10代	27	10.8	153.7 ***	27	21.4	41.1 ***	0	0	
20代	223	89.2		99	78.6		124	100.0	
【継続期間】									
6か月以上1年未満	51	20.4	48.94 ***	25	19.8	25.81 ***	26	21.0	25.32 ***
1-2年程度	67	26.8		37	29.4		30	24.2	
2-3年程度	51	20.4		24	19.0		27	21.8	
3-4年程度	27	10.8		13	10.3		14	11.3	
4-5年程度	10	4.0		7	5.6		3	2.4	
5年以上	44	17.6		20	15.9		24	19.4	
【活動頻度】									
2か月に1回程度	28	11.2	15.68 **	9	7.1	26.86 ***	19	15.3	17.87 **
月1回程度	53	21.2		26	20.6		27	21.8	
月2-3回	48	19.2		17	13.5		31	25.0	
週1-2回	54	21.6		38	30.2		16	12.9	
週3-4回	31	12.4		24	19.0		7	5.6	
ほぼ毎日	36	14.4		12	9.5		24	19.4	
【活動内容】									
スポーツの指導	96	38.4	102.42 ***	48	38.1	58.10 ***	48	38.7	47.29 ***
スポーツの審判	23	9.2		8	6.3		15	12.1	
運営や世話	43	17.2		24	19.0		19	15.3	
施設管理の手伝い	25	10.0		12	9.5		13	10.5	
補助的活動	47	18.8		27	21.4		20	16.1	
その他、不明	16	6.4		7	5.6		9	7.3	
【活動形態】									
労働（就業）	66	26.4	11.31 *	11	8.7	25.05 ***	55	44.4	29.10 ***
アルバイト・パート	74	29.6		44	34.9		30	24.2	
有償ボランティア	40	16.0		26	20.6		14	11.3	
無償ボランティア	70	28.0		45	35.7		25	20.2	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

3) 仮説モデルの検証

仮説モデルにもとづき、すべての分析対象者を単一母集団として共分散構造分析をおこなった結果、強制的コミットメントから活動頻度への標準化係数値が有意でなく、モデルの適合度が低かった（GFI=.866, AGFI=.823, CFI=.933, RMSEA=.083, TLI=.921, AIC=389.731）。

モデルの適合度が低かった原因として、因子間および因子内に誤差共分散がある可能性が考えられる（狩野, 2002）。修正指標から、情熱的・強制的コミットメント因子内に誤差共分散が推測されたため、各因子の観測変数を合算する尺度化（狩野, 2002）をおこなった。次に、情熱的・強制的コミットメントを予測する因子間に相関関係が予測されることから（Scanlan et al., 2016）、誤差変数であるe1とe2の間に共分散を設定した。

新たなモデルを検証した結果（図2-10）、すべての指標が十分な適合度を示し（GFI=.952, AGFI=.904, CFI=.974, RMSEA=.083, TLI=.960, AIC=85.166）、スポーツを「ささえる」活動の楽しさがコミットメントを媒介し、活動頻度を予測する間接効果が確認された（ $\beta = .14$, 95%CI : .05 - .25）。最後に、情熱的コミットメントを媒介した間接効果を確認するために、強制的コミットメントから活動頻度へのパスを削除した結果、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的コミットメントを媒介し、活動頻度を予測することが確認された（ $\beta = .13$, 95%CI : .03 - .23）。

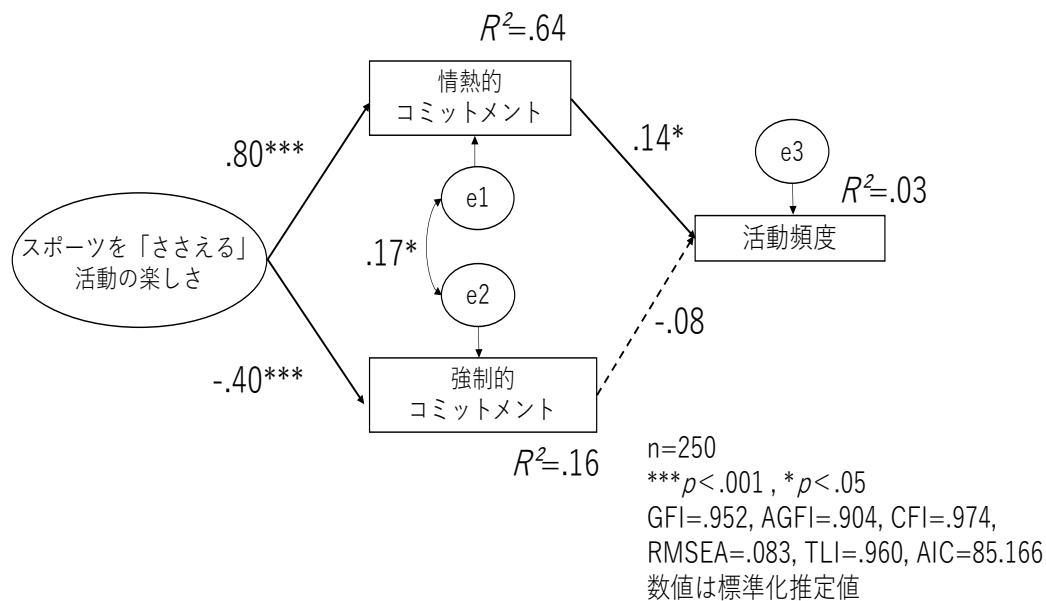


図2-10 日常的なスポーツを「ささえる」活動における仮説モデルの検証結果

4) 個人属性と活動形態による差異の検証

(1) ライフステージによる差異

仮説モデルにもとづき、ライフステージによる対象群別の共分散構造分析をおこなった結果、大学生 (GFI=.942, AGFI=.884, CFI=.980, RMSEA=.075, TLI=.969, AIC=66.742), 社会人 (GFI=.938, AGFI=.875, CFI=.975, RMSEA=.081, TLI=.961, AIC=68.376) とともに許容しうる適合度を示した。また、社会人のみ、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの間接効果が確認された (大学生: $\beta = .10$, 95%CI: $-.04 - .25$, 社会人: $\beta = .18$, 95%CI: $.04 - .34$)。異なるライフステージによる対象群にモデルが適用できることが確認されたことから、多母集団の同時解析にて配置不変性を確認した結果 (図2-11), 許容しうる適合度を示した (GFI=.940, AGFI=.880, CFI=.977, RMSEA=.055, TLI=.965, AIC=135.119)。

次に、異なるライフステージによる対象群間の差に対する検定統計量を確認した結果、スポーツを「ささえる」活動の楽しさから情熱的コミットメント ($z=2.10$, $p<.05$) および強制的コミットメント ($z=3.09$, $p<.001$) への標準化係数値に有意な差がみられた。この結果、社会人はスポーツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的コミットメントを強く正に予測すること、大学生はスポーツを「ささえる」活動の楽しさが強制的コミットメントを強く負に予測する点について、ライフステージによる差異があることが確認された。

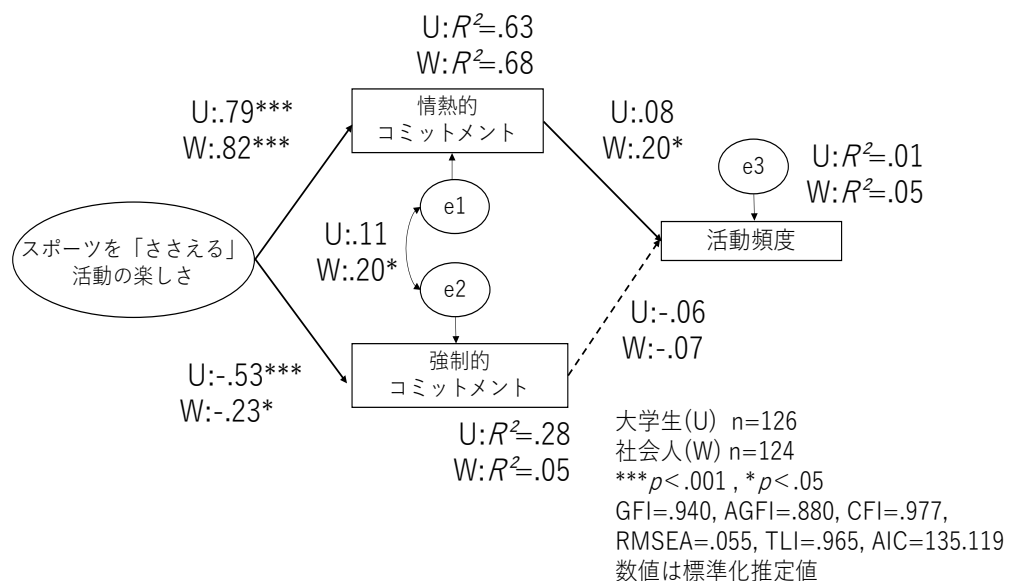


図 2-11 ライフステージによる多母集団の同時解析結果

(2) 性別による差異

仮説モデルにもとづき、性別による対象群別の共分散構造分析をおこなった結果、男性 (GFI=.957, AGFI=.913, CFI=.989, RMSEA=.052, TLI=.982,

AIC=60.427) は十分な適合度を示したが、女性 (GFI=.907, AGFI=.814, CFI=.955, RMSEA=.119, TLI=.930, AIC=83.556) はモデルの適合を示さなかった。また、いずれの母集団においても情熱的・強制的コミットメントから活動頻度への標準化推定値が有意でなく、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの間接効果が確認されなかった (男性: $\beta = .15$, 95%CI: $-.003 - .30$, 女性: $\beta = .13$, 95%CI: $-.002 - .26$)。

女性においてモデルの適合が確認されなかったものの、性別による対象群間の差に対する検定を目的として、多母集団の同時解析をおこなった結果 (図 2-12), 許さうる適合度を示した (GFI=.933, AGFI=.866, CFI=.971, RMSEA=.063, TLI=.954, AIC=143.997)。次に、性別による対象群間の差に対する検定統計量を確認した結果、すべてのパスの標準化係数値や分散に性別による差はみられなかった。

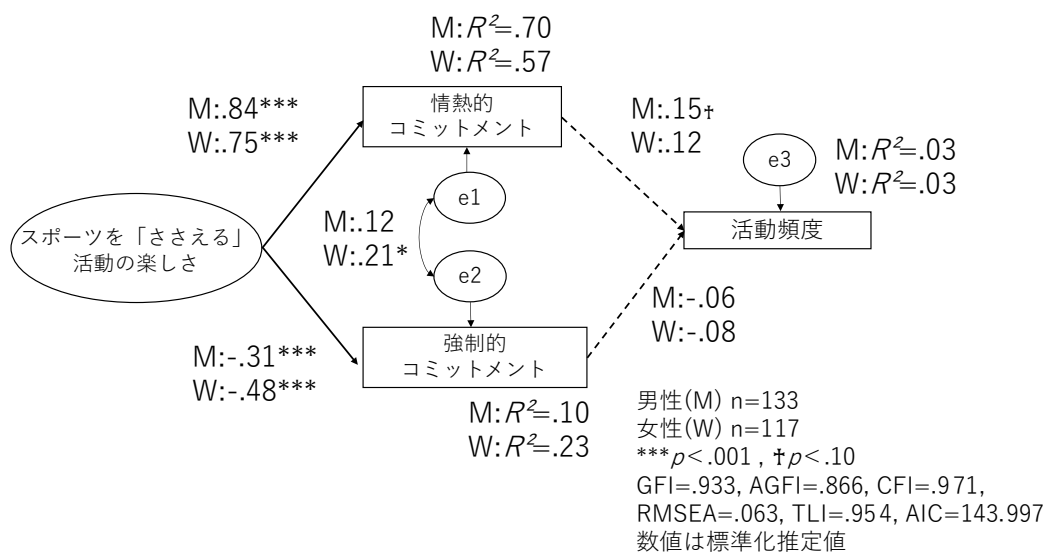


図 2-12 性別による多母集団の同時解析結果

(3) 活動形態による差異

仮説モデルにもとづき、活動形態による対象群別の共分散構造分析をおこなった結果、就業者のみ許容しうる適合度を示し（GFI=.944, AGFI=.887, CFI=.972, RMSEA=.085, TLI=.956, AIC=72.062）、かつ間接効果が確認された（ $\beta=.26$, 95%CI: .12 - .37）。一方で、ボランティアにおいては、RMSEA の値が基準を超え（GFI=.917, AGFI=.834, CFI=.966, RMSEA=.102, TLI=.948, AIC=74.279）、間接効果がみられなかった（ $\beta=.005$, 95%CI: -.15 - .17）。ボランティアにおいて、モデルの適合が確認されなかったものの、活動形態による対象群間の差に対する検定を目的として、多母集団の同時解析をおこなった。その結果、許容しうる適合度を示した（GFI=.932, AGFI=.863, CFI=.969, RMSEA=.066, TLI=.952, AIC=146.352）。また、就業者はすべての標準化推定値が有意であったが、ボランティアは情熱的・強制的コミットメントから活動頻度への標準化推定値が有意でなかった。

次に、異なる活動形態による対象群間の差に対する検定統計量を確認した結果（図 2-13）、スポーツを「ささえる」活動の楽しさから情熱的コミットメント（ $z=2.97$, $p<.001$ ）および強制的コミットメント（ $z=2.67$, $p<.001$ ）、情熱的コミットメントから活動頻度（ $z=2.35$, $p<.01$ ）の標準化係数値と誤差共分散（ $z=3.11$, $p<.001$ ）に有意な差がみられた。この結果、ボランティアは、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的コミットメントを強く正に、強制的コミットメントを強く負に予測すること、就業者は、情熱的コミットメントが活動頻度を強く正に予測する点について、活動形態による差異があることが確認された。

4. 考察

1) 分析対象者の属性

本研究で調査対象とした若年層のうち、大学生における活動継続者の出現率は、一般大学生の過去1年間のスポーツボランティア実施率9%（笹川スポーツ財団，2021）と同程度であった。公的調査に比べ対象者の選定基準が厳しいにも関わらず、出現率が同程度であったことから、スポーツを「ささえる」活動に関心が高い属性がアンケートに回答するサンプリングバイアス（吉村，2020）が生じた可能性がある。

次に、20代における活動継続者の出現率は、公的調査における過去1年間のスポーツボランティア実施率16.5%（スポーツ庁，2024b）を下回った。本研究では、6か月以上の継続者に限定したため、出現率が低かったと考えられる。一方で、非継続経験者の出現率は、公的調査（笹川スポーツ財団，2019）における未経験者の割合（20代男性73.6%，20代女性85.4%）に近い割合であり、偏りは小さいと推測される。

2) 仮説モデルの検証

仮説モデルの検証の結果、日常的なスポーツを「ささえる」活動において、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的コミットメントを正に、強制的コミットメントを負に予測することが確認され、仮説 H1a, H1b が支持された。運動・スポーツ活動と同様に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを感じることで情熱的コミットメントが高まることが示された。楽しさと内発的動機づけに関する先行研究では、活動から満足

感を感じ、その満足感が内発的報酬となり、活動に動機づけられること（チクセントミハイ、2000）が明らかとなっている。スポーツを「ささえる」活動の楽しさは、活動によって得られる心理的報酬であり、楽しさを感じる活動そのものに動機づけられるため、楽しさが情熱的コミットメントを予測したと考えられる。

次に、情熱的コミットメントが活動頻度を正に予測すること、強制的コミットメントが活動頻度を予測しないことが確認され、仮説 H2a と H2b が支持された。運動・スポーツ活動と同様に、日常的なスポーツを「ささえる」活動においても情熱的コミットメントが活動頻度を促進することが確認された。しかし、情熱的コミットメントの活動頻度に対する予測力や R^2 値は小さかった。計画的行動理論をはじめとした既存の理論モデルでは、 R^2 値が 0.30~0.40 を超えるレベルでスポーツ行動を予測できない（シンガー、2013）。スポーツを「ささえる」活動においても、活動時間や金銭などの構造的阻害要因が継続的な参加行動を妨げた可能性がある（山口ほか、2018）。

一方で、強制的コミットメントが活動頻度と関係しなかった原因として、強制的コミットメントによって活動頻度を高める、もしくは離脱を促進する活動者が混在した可能性がある。例えば、スポーツボランティアを義務的に認識する大学生は、活動意欲が低下する（清宮・依田、2021）ことから、活動者自身が活動頻度を選択できる場合、活動頻度が低くなる、活動から離脱することが推測される。しかし、20代のスポーツボランティアの約8割が学校、スポーツ団体や友人からの依頼による参加であり（笹川スポーツ財団、2019）、義務的・強制的に活動に参加せざるを得ない場合、本人の意志に関わらず外的要因から活動頻度が規定された可能性がある。また、消極的動機によっ

て運動部活動顧問を継続する教員の活動頻度に個人差があること（中澤，2012）からも，活動者自身が活動頻度を選択できるかどうかによって強制的コミットメントが活動頻度を一律に予測しなかったと考えられる．この結果は，運動の行動プロセス（Wilson et al., 2004）と類似した結果であったが，競技スポーツの行動プロセス（Hagiwara, 2017）と異なる結果であった．対象者による行動プロセスの違いについて，Hagiwara（2017）は，運動は自発性の高い活動であり，参加者が自分のスポーツ参加を決定できることに言及している．本研究の対象者は，競技スポーツのアスリートと比べると強制的に行動を規定されていないため，関係がみられなかったと推測される．

最後に，スポーツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的コミットメントを媒介して活動頻度を予測することが確認され，仮説 H3 が支持された．これは，運動・スポーツ活動で仮定される関係を支持する結果であった．また，楽しさの間接効果が小さかったことは，「みるスポーツ」の行動プロセス（吉田ほか，2013）と類似する結果であった．先行研究（吉田ほか，2013）では，継続意志と継続行動との間に調整変数を設定していることから，本研究においても，情熱的コミットメントと活動頻度の間に関連する要因があったと推測される．

3) 個人属性と活動形態による差異

(1) ライフステージによる差異

ライフステージによる対象群別の解析の結果，ライフステージによらず仮説モデルが適用できることが確認された．また，群間比較の結果，社会人は大学生に比べ，スポー

ツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的コミットメントを強く予測することが明らかとなり、仮説 H4a は支持されなかった。本研究で対象とした社会人は、ボランティアなどの余暇活動、もしくは就業として活動をおこなっている。余暇活動として活動する場合、社会人は大学生よりも余暇時間が少ないことから（総務省統計局，2022），より動機づけの高い活動を選択していると考えられる。本研究では、6 カ月以上活動を継続する社会人を対象としたことから、活動を好み、動機づけられた対象者であった可能性がある。その結果、大学生よりも楽しさが情熱的コミットメントを強く予測したと考えられる。なお、就業者としての活動については、活動形態による差異として後述する。

次に、群間比較の結果、大学生は社会人に比べ、楽しさが強制的コミットメントを強く予測することが示された。大学生を対象とした質的研究では、活動の負担感などのネガティブな経験に対して楽しさを感じることでそれらを受容し、継続意志を形成する可能性が示唆されている（大山ほか，2012）。本研究においても、大学生は活動の楽しさを感じることで、義務的コミットメントが緩和される可能性が示唆された。一方で、主に会社員のコーチを対象とした先行研究において、活動の喜びを感じる人ほど困難を感じることで、活動の喜びは負担感と弱い負の相関関係にあることが明らかとなっている（大橋ほか，2016）。社会人は大学生に比べ、活動に対して負担感や困難さを認識しているため、強制的コミットメントに対する楽しさの予測力が低かったと推測される。

最後に、大学生は社会人に比べ情熱的コミットメントから活動頻度への標準化推定値が小さく、情熱的コミットメントが活動頻度を予測しないことが明らかとなり、仮説 H4b は支持されなかった。スポーツボランティアの阻害要因として、時間的・経済的

な負担があり（笹川スポーツ財団，2015），大学生は時間や金銭的な阻害要因を強く認識していることが示唆されている（山口ほか，2018）．例えば，運動部活動に所属する大学生である場合，自身のスポーツ実施頻度が高く，スポーツを「ささえる」活動の活動頻度が高くなりにくいと推測される．また，大学生はボランティアよりもアルバイトを優先する傾向にあること（国立青少年教育振興機構，2020）から，情熱的コミットメントを有していても，活動頻度との間に関連が認められなかった可能性がある．

（２）性別による差異

性別による対象群別の同時解析の結果，男性においてモデルの適合が確認されたものの，女性において適合度が基準を満たさなかった．つまり，女性において，モデルが適合しないことが明らかとなった．この原因として，情熱的コミットメントから継続的な参加行動への標準化推定値が低かったことから，女性の継続的な参加行動が阻害されている可能性がある．スポーツイベントボランティアを対象とした調査から，女性は男性に比べ，「活動内容が長い」などの活動そのものの構造的な要因や，「ボランティアに必要な体力がない」といった活動者自身の個人的要因から継続的な参加を阻害される可能性が示されている（山口ほか，2018）．また，女性はライフイベントなどのきっかけでスポーツ現場から離脱する，もしくは離脱を懸念している（順天堂大学マルチサポート事業，2013；金谷，2015）．この結果，10・20代の女性は男性に比べ，運動・スポーツ活動の指導や運営，審判などの活動頻度の高い活動の実施率が低く（スポーツ庁，2024b），スポーツ指導者における女性の割合は男性の4分の1以下と低い（金谷，

2015；スポーツ庁，2021）と考えられる．このことを踏まえると，情熱的コミットメントが参加頻度を予測する仮説モデルは適さなかったと推測される．また，女性は他の属性に比べ，情熱的コミットメントの寄与率が相対的に小さかった．つまり，女性は他の属性に比べ，スポーツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的コミットメントを十分に説明できていない．例えば，地域スポーツに通う子どもをもつ母親は，「自身の子どもがチームに楽しく参加している」と認識することが，サポート活動の継続意志を予測することが明らかになっている（大橋ほか，2022）．このことから，子どもをもつ女性は，スポーツを「ささえる」活動によって家族が楽しむことがコミットメントに寄与する可能性がある．

次に，群間比較の結果，性別による差はみられず，仮説 H5a，H5b は支持されなかった．この原因として，性別よりもライフステージによる差異が大きい可能性が考えられる．例えば，大学生を対象とした調査では，女性は男性に比べスポーツボランティアに対する意欲が高いものの（清宮ほか，2021），20 代を対象とした調査では女性は男性よりも動機づけが低い（スポーツ庁，2024b）．また，女性の初婚年齢は 29.7 歳，第一子の出産平均年齢は 30.9 歳であり（厚生労働省，2023），女性にとって，大学在学時と卒業後の 20 代は，就業，結婚，妊娠などのライフイベントの有無によって，生活の個人差が大きいと推測される．

（3）活動形態による差異

活動形態による対象群別の解析の結果，就業者においてモデルの適合が確認されたも

の、ボランティアにおいて、モデルが適合しないことが明らかとなった。この原因として、スポーツボランティアは仕事・学業に比べ活動を優先することが難しいことから、情熱的・強制的コミットメントと実際の活動頻度の関係が弱かったと考えられる。また、20代のボランティアの約8割が、依頼によって動機づけられている（笹川スポーツ財団，2019）。このことから、情熱的・強制的コミットメントに関わらず、外的要因から活動頻度が規定される可能性がある。

次に、群間比較の結果、ボランティアは就業者に比べ、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的・強制的コミットメントを強く予測することが明らかとなり、仮説H6aは支持された。序論でも述べた通り、就業者は、給与や昇進に対する満足感が組織や職務の継続意志に関係すること（佐藤ほか，2015a；Meyer et al., 2002）から、ボランティアに比べ、スポーツを「ささえる」活動の楽しさからコミットメントへの予測力が弱かったと考えられる。また、就業者の場合、スポーツを「ささえる」活動が主たる業務かどうかによって、楽しさとコミットメントの関係が異なった可能性がある。例えば、中学校部活動の顧問の約6割が「部活動の顧問は楽しい」と肯定的に評価しているものの、約半数が次年度の継続を希望していない（内田ほか，2018）。つまり、運動部活動の顧問のようにスポーツを「ささえる」活動が主たる業務の付加的活動である場合、楽しさが情熱的・強制的コミットメントを強く予測しない可能性が推測される。一方で、職業としてのコーチの志望理由として、継続していた競技への愛着やスポーツ指導の楽しさの経験などが挙げられる（三倉・小笠原，2021）。スポーツを「ささえる」活動を専門的にこなう就業者に限定した場合、スポーツを「ささえる」活動の楽

しさが情熱的コミットメントを強く予測すると推測される。

最後に、情熱的コミットメントから活動頻度への予測力に群間で差異がみられ、ボランティアにおいて情熱的コミットメントが活動頻度を予測せず、仮説 H6b は支持されなかった。この原因として、先に述べた情熱的・強制的コミットメントに関わらず、外的要因から活動頻度が規定される可能性に加え、ボランティアの継続期間や活動経験が関係したことが推測される。主に 30 歳以上のスポーツボランティアを対象とした先行研究（Engelberg et al., 2011）では、約 4 割が 5 シーズン以上活動を継続し、約 4 割がリーダーやコーチ、タイムキーパーなどの役割を担っていた。この研究では、ボランティアの活動期間の長さや役割に対する愛着や同一化が、活動時間や活動への参加・関与を予測することが示唆されている。本研究の分析対象者は、先行研究に比べ活動期間が短く、就業者に比べ役割が明確でない可能性がある。つまり、ボランティアは、就業者に比べ補助的な役割・活動を担う可能性が高いことから、活動に対する愛着やコミットメントが低く、活動頻度との関係がみられなかった可能性が考えられる。

5. 要約

研究 1-3 の目的は、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ、スポーツコミットメント、活動頻度の関係を検証することであった。日常的なスポーツを「ささえる」活動を継続している若年層を対象に調査をおこない、仮説モデルの検証および群間比較をおこなった。研究 1-3 で示された結果は、以下のとおりである。

仮説モデルの検証をおこなった結果、強制的コミットメントが活動頻度を予測する標準化推定値が有意ではなく、一部のモデルの適合度指標が基準値を上回った。そこで、モデルの改良として、情熱的・強制的コミットメント因子の尺度化および誤差変数間の共分散の設定をおこなった。その結果、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的コミットメントを媒介して活動頻度を予測することが確認されたが、間接効果が小さいことが示された。つまり、若年層を対象とした場合、スポーツを「ささえる」活動の楽しさは情熱的コミットメントを媒介し、弱く活動頻度を予測することが明らかとなった。

次に、母集団別の分析の結果、大学生、社会人、男性、就業者を対象とした場合のモデルの適合が確認された。多母集団の同時解析の結果、社会人と就業者を対象とした場合にスポーツを「ささえる」活動の楽しさの間接効果が確認された。つまり、若年層を母集団別に分析した場合、仮説モデルが適合しない、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの間接効果がみられない属性があることが確認された。

第2章 スポーツを「ささえる」活動の楽しさに関わる 要素の検討

第 1 節 緒言

序論で述べた通り、運動・スポーツ活動の楽しさの要素を分析した先行研究（徳永・橋本，1980）において、運動・スポーツ活動の「挑戦」や「人間関係」などの楽しさの要素を強く認識する大学生は、活動頻度が高いことが示唆されている。しかし、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを感じる対象は明らかにされておらず、継続意志・行動との関係は明らかになっていない。個人属性と活動形態別に、スポーツを「ささえる」活動の継続に寄与する楽しさの要素が明らかになることで、スポーツを「ささえる」活動の継続性を高めるための具体的な取り組みを検討することができると考える。

以上を踏まえて、第 2 章では以下の 2 つの研究をおこなう。研究 2-1 では、大学が主催する地域スポーツ教室の指導・運営・補助的活動をおこなった大学生を事例とし、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を探索的に抽出する。次に、研究 2-2 では、抽出されたスポーツの「ささえる」活動の楽しさの要素について、妥当性を検証し、個人属性と活動形態別に、継続意志・行動との関係を探索的に明らかにする。

第 2 章を通して、「若年層は、スポーツを『ささえる』活動のどのような要素に楽しさを感じるのか」、「どのような楽しさの要素が、継続意志・行動と関係するか」、というリサーチクエスチョンを検証する。

第2節 スポーツを「ささえる」活動の楽しさに関わる要素の抽出（研究 2-1）

1. 目的

第2章では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素と継続意志・行動の関係を明らかにすることを目的とする。

研究 2-1 では、若年層がスポーツを「ささえる」活動の楽しさを感じる要素を明らかにすることを目的とする。この目的のために、大学が主催する地域スポーツ教室の指導・運営・補助的活動を担当した大学生の視点に着目し、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を探索的に調査する。研究 2-1 を通して、「若年層は、スポーツを『ささえる』活動のどのような要素に楽しさを感じるのか」というリサーチクエスチョンを明らかにする。

2. 方法

1) 調査対象者

2019 年度に N 大学にて実施された、近隣に住む児童およびその保護者を対象とした地域スポーツ教室の指導・運営・補助的活動をおこなった大学生を対象とした。調査対象者の主な活動として、1 教室のプログラム立案・作成、技術指導、指導補助、模範演技、タイムマネジメント、用具の準備・片付け、施設の準備・撤収作業などであった。

2) 調査対象とした地域スポーツ教室の特性

対象とした地域スポーツ教室は、性別や年代、運動経験を問わず多様な地域住民が参加し、複数のスポーツ種目を体験することを目的として開催された。大学が提供するスポーツ環境のうち、エンジョイ志向の地域スポーツ（作野，2011）であり、参加者が一過性ではなく継続的にこなうことを目的としたスポーツ活動であった。主な参加者は、小学生児童であり、未就学の幼児、中学生以上の生徒、児童の保護者の参加もみられた。毎回参加者や参加人数が異なり、一過性の参加者や継続者を含んでいた。体育館などの大学施設を使用して土曜日の 19 時から 21 時に 1 回 1～2 種目のレクリエーションスポーツを 2 時間程度おこない、計 10 回のスポーツ教室を実施した。

実施期間は、2019 年 6 月 1 日から 11 月 16 日であった。また、地域スポーツ教室は、2013 年より同一名称にて年間 10～21 回実施され、6 年目であった。

実施種目は、アーチェリー、親子体操、サッカー、ソフトボール、武道（空手道・剣

道), バレーボール, ラケットスポーツ (卓球・バドミントン), 運動会であった。

各プログラムの作成およびスポーツ指導は, 大学教員, 運動部活動に所属する大学生, 教職課程に所属する大学生, スポーツクラブの指導者などが担当した。大学生の関与は, 大学教員が大学生を指導し大学生が地域住民にプログラムを提供する, 教員が直接プログラムの提供をおこない大学生は主にその補助に関わる, 大学外のスポーツクラブが関与し大学生が指導補助および運営をおこなう (畠山, 2003) など, 実施内容によって大学生の指導内容や関与する程度は異なっていた。また, 大学生の人数, 個人属性と活動形態は毎回異なり, 部活動やサークル活動, 授業やゼミ活動の一環としておこなう有償・無償ボランティアやアルバイトなどの活動形態にて関与していた。また, 地域スポーツの予算管理や体育館予約, 参加者の募集といった運営は主に大学教員, 用具の準備や片付けなどの運営は大学生がおこなった。

3) 調査内容および調査の手続き

実施したスポーツ教室の楽しさについて広く回答を求めるため, 「今日の (教室名) の『楽しさ』はどんなことだと思いますか? 箇条書きでもよいので, 3 つ以上自由に記述してください。」という問いに対して自由記述で回答を求めた。また, 個人属性として, 性別, 部活動・サークル名, 教職志望の有無について回答を求めた。

教室終了後にアンケート調査を配布し, その場で回答を求めた。教室の内容や参加者, 大学生の活動内容が毎回異なること, また, より幅広い回答を得る目的から, 複数回活動した大学生に対しても毎回調査をおこなった。

4) 分析手順

地域スポーツ教室実施後に、指導・運営・補助的活動をおこなった大学生から得られた回答に対して、大量の記述から地域スポーツ教室における指導の楽しさという新たな知見を得るために、KJ 法を用いた記述の分析をおこなった。KJ 法にはいくつかのバージョンがあるが、1997 年版の KJ 法をもとに作成された手順を踏まえ（田中，2013），大量の質的データを分類した先行研究（平野ほか，2018）を参考にした。分析は、スポーツ心理学を専門とする研究代表者、地域スポーツにおける運営の継続経験を有する大学教員、地域スポーツに関する研究実績を有する大学教員の 3 名が協議し、カテゴリー分析をおこなった。

原則として自由記述の表現をそのまま使用し、可読性のために句読点や符号を一部省略した。記述のなかには二文以上にわたる文章がみられたため、3 名の合議をもとに切片化した（以下、ローデータとする）。類似したローデータを集めてまとまりをつくり、まとまりごとに名前を付けた（以下、コードとする）。次に、類似した複数のコードを統合し、複数のコードからなるまとまりを形成し、名前を付けた（以下、サブカテゴリーとする）。さらに、類似するサブカテゴリーを統合し、より大きなまとまりを形成し、名前を付けた（以下、カテゴリーとする）。より適切なコード、サブカテゴリーを統合する、既存のコードやカテゴリーを解体して別のサブカテゴリーに配置するといった作業を繰り返しおこなった。すべてのローデータが配置され、3 名が配置に異論がなくなった時点で分析を終了した。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〈〉、コードを『』、ローデータを「」で示し、ローデータに振り分けられた番号を文末に表記した。

5) 倫理的配慮

本研究をおこなうにあたり、長崎国際大学人間社会学部国際観光学科研究倫理委員会の承認を得た（2019 年度 F-5）。指導・運営をおこなった大学生に対して、調査実施前に調査内容およびデータの使用方法等を書面および口頭にて説明し、同意書への署名をもって同意を得た。

3. 結果

1) 調査対象者の属性

地域スポーツ教室の指導・運営・補助的活動をおこなった大学生 116 名から、のべ 146 サンプルを回収した。146 サンプルの属性の内訳は、男性 94 名、女性 52 名、学年は 1 年生 24 名、2 年生 67 名、3 年生 35 名、4 年生 18 名、その他・未記入 2 名であった。運動部活動・サークル名を回答した学生は 130 名 (89%)、教職を志望する学生は 57 名 (49.1%) であった。回収したサンプルから対象者の活動回数を確認した結果、22 名が 2 回以上活動しており (2 回 17 名、3 回 3 名、4 回 1 名、5 回 1 名)、94 名は 1 回のみであった。146 サンプルのうち、5 サンプルは個人属性のみを回答しており、自由記述の回答は得られなかった。

2) 分析対象の選定

指導・運営・補助的活動をおこなった大学生より得られた 411 の記述のうち、3 名の合議によって「新しいスポーツにチャレンジできる」や「スポーツを通して友達と交流すること」などの、参加者視点でスポーツをおこなう楽しさを回答したと推測される、どちらにも分類しがたい記述を分析対象から除き、116 のローデータを分類した。

3) 記述の分類プロセスおよび分類結果

【プログラム】カテゴリーは、指導・運営などのスポーツを「ささえる」活動そのも

のに対する肯定的認識を示したものであり、〈展開〉〈指導〉〈種目〉の 3 個のサブカテゴリーから生成されている。サブカテゴリーのうち、〈展開〉は『全体』『準備』『対象者に応じた』というコードから生成されている。『全体』は、「チャレンジスポーツという会を作る楽しさ」(No.410)、「スポーツをやれる環境」(No.318)というローデータから構成され、対象としたスポーツ教室をつくることに関する記述を整理したものである。『準備』は、「用具を事前に十分に準備し有効に使用できた」(No.145)、「準備がよくできて、スムーズに進行できた点」(No.480)というローデータから構成され、準備や運営に関する記述を整理したものである。『対象者に応じた』は、「子どもがやりたいことを取り入れる」(No.372-2)や「年齢に合わせた教材を使うこと」(No.202)などの 4 個のローデータから構成され、スポーツ教室の準備や運営の工夫に関する記述を整理したものである。

次に、サブカテゴリーのうち、〈指導〉は『経験』『コミュニケーション』『対象者に応じた』というコードから生成されている。『経験』は、「自分の指導力を向上させることができる」(No.84)や「幅広い世代の方々と携わるにより対応力が身についた」(No.218)などの 8 個のローデータから構成され、地域スポーツ教室での指導経験に関する記述を整理したものである。『コミュニケーション』は、「コミュニケーションをうまくとり話す楽しさ」(No.237)や「小さい子にどう伝えるかを工夫してやれたところ」(No.302)などの 9 個のローデータから構成され、意思疎通に関する記述を整理したものである。『対象者に応じた』は、「子供への指導の仕方」(No.178)や「小さい子に教えることができる」(No.16)などの 4 個のローデータから構成され、対象者に応

じた指導方法に関する記述を整理したものである。

最後に、サブカテゴリーのうち、〈種目〉は『専門外』と『専門』というコードから生成されている。『専門外』は、「専門外の分野で子供に対して指導法を身につけることが出来た」(No.219)や「専門種目外のスポーツを教えるのは勉強になった」(No.248)などの3個のローデータから構成され、専門外の種目の指導経験に関する記述を整理したものである。『専門』は、「自分の専門種目を教えることで新たな発見が出来た」(No.282)や「自分の専門種目を教えられたこと」(No.289)などの3個のローデータから構成され、専門種目の指導経験に関する記述を整理したものである。

その他のローデータについても上記のような過程で整理をおこなった結果、スポーツを「ささえる」活動の楽しさとして、『協働』『普及』などの19個のコードが抽出され、〈子ども〉〈参加者〉など7個のサブカテゴリーに分類された。類似したものをまとめてカテゴリーを形成したところ、【プログラム】【かかわり】【リアクション】の3個のカテゴリーへと集約された(表3-1)。【プログラム】カテゴリーは、〈展開〉〈指導〉〈種目〉の3つのサブカテゴリーから構成され、指導や運営といった活動や経験に対する肯定的感情を整理したものである。【かかわり】カテゴリーは〈子ども〉〈大人〉の2つのサブカテゴリーから構成され、参加者とのふれあいや交流に対する肯定的感情を整理したものである。【リアクション】カテゴリーは〈参加者〉〈指導者〉の2つのサブカテゴリーから構成され、活動後の参加者や自身の反応や成長、活動の成果に対する肯定的感情を整理したものである。

最後に、「指導補助の自分たちも楽しくできた」(No.80)、「自分も子どもに戻れた気

分やった」(No.383),「楽しめた」(No.166)などの9つのローデータは,指導・運営をおこなった大学生の視点から書かれた記述として分析対象としたが,楽しさを感じる対象が不明であることから,「感想・不明」として配置した。

表 3-1 地域スポーツ教室における指導・運営の楽しさの要素のローデータ例

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	ローデータ(例)
プログラム(35)	展開(8)	全体(2)	チャレンジスポーツという会を作る楽しさ, スポーツをやれる環境
		準備(2)	用具を事前に十分に準備し有効に使用できた, 準備がよくできて、スムーズに進行できた点
		対象者に応じた(4)	様々な年代が楽しめる内容, 子どもがやりたいことを取り入れる, 年齢に合わせた教材を使うこと
	指導(21)	経験(8)	自分の指導力を向上させることができる, 自分の指導力向上に繋がった, 幅広い世代の方々と携わるにより対応力が身についた
		コミュニケーション(9)	コミュニケーションをうまくとり話す楽しさ, 小さい子にどう伝えるかを工夫してやれたところ, 子供と同じ目線に立って話すことができる
		対象者に応じた(4)	小さい子に教えることができる, 子供への指導の仕方, できない子に挑戦する
	種目(6)	専門外(3)	自分の専門外の種目を指導することができた, 専門外の分野で子供に対して指導法を身につけることが出来た, 専門種目外のスポーツを教えるのは勉強になった
		専門(3)	自分の専門種目を教えることで新たな発見が出来た, 自分の専門種目を教えられたこと, アーチERYを教えること
	子ども(30)	共在(22)	子どもとふれあうたのし, 子どもと触れ合えて楽しかった, 普段触れ合えない世代の子と触れ合うことが出来た
		協働(8)	子どもと一緒にできたこと, 子ども達とスポーツで関わることができたこと, 子どもと一緒にあそぶたのし
かかわり(38)	大人(8)	保護者(5)	親子さんと最初はあんまりコミュニケーションがとれていなかったけどだんだんゲームをやっていくうちにうまくいくようになった, 大人の方とも話すこと
		指導者(3)	指導者の人とのコミュニケーションをとれること, 他の指導者と関わりを持てる, 他部活とふれあえる
		成長(5)	子どもたちの成長がみられたこと, 子どもが「出来る」ようになると自分もうれしい気持ちになった, 積極的に子どもから発言が出てきた
		楽しさ(4)	子どもが楽しそうにやっていること, 競技そのものを子どもたちが楽しんだこと, 楽しんでもらえた
	参加者(16)	雰囲気(1)	みんなの頑張っている姿、応援している姿が見れるところ
		感情(2)	子どもの様々な感情がみれた, 失敗した時くやしがつてくれること
		笑顔(4)	小学生や幼稚園生などの笑顔が見れるところ, 終始、笑顔がみられた, 子どもたちの笑顔を多く見ること
	指導者(18)	普及(12)	スポーツを通して子供たちにスポーツをやることの楽しさを知ってもらえること, アーチERYを広めて、楽しさを知ってもらえる, また参加したいと思ってもらうこと
		自己成長(6)	ほめられた時の喜び, スポーツを改めて楽しいと感じた, 子どものすばらしさを感じることができる
リアクション(34)	感想・不明(9)		指導補助の自分たちも楽しくできた, 自分も子どもに戻れた気分やった, 自分自身も楽しかった

4. 考察

1) 調査対象者の属性

本研究で調査対象とした大学生のうち、約9割が部活動・サークル名としてスポーツ種目を回答したこと、約5割が教職を志望していたことから、調査対象とした大学生が何らかの運動・スポーツ活動の継続経験を有すること、スポーツ指導や運営に関心が高いことが推測される。これは、本研究の調査対象者が、運動部活動や教職課程、大学のスポーツコース所属者を中心に募集・依頼されたためである。つまり、本研究で得られるスポーツを「ささえる」活動の楽しさは、スポーツを好み、他者を「ささえる」活動に関心が高い属性から得られた結果であると考えられる。

2) 分析対象の選定

分析対象となった記述が大幅に減少した原因として、スポーツを「ささえる」活動の楽しさのみならず、実施したスポーツ教室の楽しさについて広く回答を求める曖昧な質問項目であったことが挙げられる。このため、対象とした大学生が参加者である子どもやその保護者の視点に立ち、「親子で楽しむことができる」や「新しいスポーツにチャレンジできる」などの運動・スポーツ活動の楽しさを回答した可能性がある。

加えて、対象とした地域スポーツ教室の特性が回答に影響した可能性が考えられる。大学生のスポーツボランティアを対象とした先行研究において、「スポーツ活動／ボランティア活動」という境界線は、自身が競技に参加しているか／他者の競技に対して関

わるかによって区分されることが明らかとなっている（山崎・植田，2021）。本研究で対象とした地域スポーツ教室においても，参加者と大学生がともに活動する場面が多くみられ，指導者・運営者という役割だけでなく，自身がスポーツ活動に参加したことによって感じたスポーツをおこなう楽しさを回答したと考えられる。

3）記述の分類結果

【プログラム】カテゴリーについて，本研究で対象とした大学生が，多様な世代・スポーツ経験・志向性を有する参加者に合わせて，種目や指導方法を工夫することを楽しんでいることが明らかとなった。これらの要素が抽出された原因として，対象とした地域スポーツ教室が多様な参加者を対象としたこと，調査対象者である大学生が参加者へ直接的に指導する機会が多いこと，調査対象者に運動部活動や教職を志望する大学生が含まれたことが関係したと推測される。第3期スポーツ基本計画（文部科学省，2022）では，「スポーツを楽しみ，喜びを感じながら取り組めるようにするため，既存の手法・態様のみに固執するのではなく，環境や状況に応じて柔軟に見直し，改善しながら取り組むことを促す趣旨のもの」として，スポーツを「つくる／はぐくむ」という視点が加えられた。また，自分たちが参加できるスポーツを作り，そのスポーツを楽しむ「創るスポーツ」が提唱されている（藤田ほか，2013）。本研究においても，スポーツの指導や運営によって地域スポーツ教室をつくることや，指導・運営の経験に対して楽しさを見出す可能性が示唆された。

次に，【かかわり】カテゴリーについて，主に子どもと触れ合うことや，一緒に活動

することに楽しさを感じていることが明らかになった。これらの要素が抽出された原因として、一方的なスポーツの技術指導ではなく、大学生が参加者と同じ目線でスポーツに関与するという、対象とした地域スポーツ教室の特性が関係したと考えられる。また、調査対象者である大学生の立場や関わり方が関係すると推測される。本研究では、スポーツを「ささえる」人材である大学生と、「ささえる」対象である参加者がともにスポーツ活動を楽しむ機会が多かった。このように、「プレイする」と「ささえる」というふたつの行為が分離しないスポーツボランティアの形態は、「競技参加型ボランティア」と表現される（山崎・植田，2021）。また、従来のスポーツボランティアに関する先行研究において、「するスポーツ」と「ささえるスポーツ」を分離させて考えていることを指摘し、車椅子ソフトボールに関与する大学生はチームにメンバーとして参加しており、結果として車椅子使用者のスポーツ活動を支えていると述べている（山崎・植田，2021）。また、「指導・支援活動を通して自分がスポーツを楽しみたい」というスポーツボランティアの参加動機がある（高橋，2001）ことから、スポーツ活動をおこなうことに楽しさを見出していると考えられる。本研究においても、大学生が、参加者を指導・支援するとともに、活動のなかで参加者と交流する、コミュニケーションをとる、ともにスポーツをおこなうことに楽しさを見出す可能性が示唆された。

最後に、【リアクション】カテゴリーについて、対象とした大学生が、参加者の成長を実感したり、笑顔を見ることに楽しさを感じていることが明らかになった。これらの要素は、スポーツを「ささえる」活動の促進要因（志賀・荒井，2013；元嶋ほか，2023）と類似する内容である。また、スポーツボランティアとしての参加動機として、

「スポーツの楽しさを教えたい」、成果として「選手あるいはチームのレベルが向上している」などが挙げられる（高橋，2001）。本研究においても，参加者がスポーツの楽しさを感じていると表情から受け取ったり，技能が伸びるなどの成長を見ることに楽しさを感じていることが明らかとなった。また，「ほめられた時の喜び」（No.304）や，「スポーツを改めて楽しいと感じた」（No.119）という回答から，活動を通して他者から評価を受けること，スポーツに対する認識が変化することに楽しさを見出す可能性が示唆された。

5. 要約

研究 2-1 の目的は、若年層がスポーツを「ささえる」活動の楽しさを感じる要素を探索的に明らかにすることであった。大学が主催する地域スポーツ教室の指導・運営・補助的活動をおこなった大学生を対象とし、教室の楽しさを問う調査をおこなった。次に、KJ 法の手法を用いて、得られた記述を分類した。研究 2-1 で示された結果は、以下のとおりである。

まず、記述内容を確認し、大学生より得られた 411 の記述のうち、116 の記述を分析対象とした。次に、得られた記述を分類した結果、19 個のコードが抽出され、7 個のサブカテゴリーに分類された。類似したものをまとめてカテゴリーを形成し、【プログラム】【かかわり】【リアクション】の 3 個のカテゴリーへと集約された。

記述内容から、地域スポーツ教室の指導・運営をおこなった大学生は、指導・運営といったスポーツを「ささえる」活動そのものや活動経験、関わりのなかで対象者と交流したり、ともにスポーツをおこなうことに楽しさを見出すことが示された。また、活動を通して参加者が楽しんでいると認識したり、参加者の成長を感じることに楽しさを見出すことが示された。つまり、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素として、活動内容や参加者との交流、活動による成果があることが明らかとなった。

第3節 楽しさの要素と継続意志・行動の関係の探索的検討（研究2-2）

1. 目的

第2章では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志・行動との関係を明らかにすることを目的とし、まず、研究2-1では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を探索的に明らかにした。しかし、研究2-1で抽出された楽しさの要素は、調査対象者が、大学が主催する地域スポーツ教室の指導・運営・補助的活動をおこなった大学生に限定されていること、質問項目が曖昧であったことから、調査結果の妥当性に問題がある。

そこで、研究2-2では、日常的なスポーツを「ささえる」活動を継続する若年層を対象とし、抽出された楽しさの要素の妥当性を確認する。次いで、個人属性と活動形態別に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素と、スポーツコミットメント、活動頻度との関係を探索的に分析する。研究2-2を通して、個人属性と活動形態別に、「どのような楽しさの要素が、継続意志・行動と関係するか」、というリサーチクエスチョンを明らかにする。

2. 方法

1) 調査対象者および分析対象の選定

研究 1-3 で選定された 250 名から，スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素 15 項目の連続同一回答者 25 名を除き，225 名を分析対象とした．分析対象者の選定プロセスと除外対象者数を図 3-1 に示す．

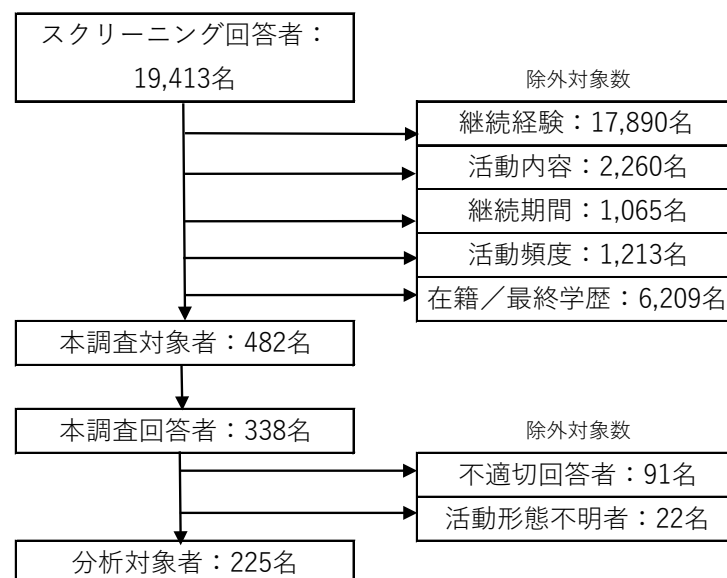


図 3-1 分析対象者の選定プロセスと除外対象者数

2) 調査内容

- (1) 活動の楽しさ，活動の継続意志：スポーツを「ささえる」活動の楽しさを問うために，研究 1-2 にて作成したスポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度の 1 因子 5 項目を使用した．また，スポーツを「ささえる」活動の継続意志を問うために，

スポーツ指導・コミットメント尺度の2因子11項目（八尋・萩原，2019）を援用

した。「1. 全くそう思わない～5. かなりそう思う」の5件法で回答を求めた。

（2）活動の楽しさの要素：研究2-1にて抽出した結果を参照し、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素に対する認識を問う項目を作成した（表3-2）。その際、多様なスポーツを「ささえる」活動に従事する調査対象者が回答することを想定し、「指導」や「運営」は「活動そのもの」、「子どもたちの成長」を「参加者の成長」のように、特定の活動や参加者を一般化した表現に変更した。また、「子どもとふれあう」や「子どもと一緒にできる」は、「子どもたちと交流できる」のように類似した内容を統一した。作成した15項目に対して「1. 全くそう思わない～5. かなりそう思う」の5件法で回答を求めた。

表3-2 スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を問う項目

項目	
1 活動そのものが楽しい	9 参加者の成長が見られるから楽しい
2 コミュニケーションがとれるから楽しい	10 参加者が楽しんでいる姿が見られるから楽しい
3 内容が工夫できるから楽しい	11 活動中の雰囲気が良いから楽しい
4 専門的な活動ができるから楽しい	12 参加者の様々な感情が見られるから楽しい
5 専門以外の活動ができるから楽しい	13 参加者の笑顔が見られるから楽しい
6 子どもたちと交流できるから楽しい	14 スポーツの楽しさを普及できるから楽しい
7 大人と交流できるから楽しい	15 自己成長を感じられるから楽しい
8 他の指導者やスタッフと活動できるから楽しい	

(3) 活動頻度：活動頻度を問うために、身体活動指標修正版（尼崎ほか，2018）を援用した。笹川スポーツ財団（2019）の年間平均実施回数を参照し、選択肢として「運動していない」を「年に数回程度」に変更し、7 件法で求めた。

3) 分析手順

スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素 15 項目の①正規性の検定，②基礎統計量の算出をおこなった。また，楽しさの要素としての妥当性を検証するために，③同時に測定した尺度との Spearman の相関係数の算出をおこなった。次に，④個人属性と活動形態別に Spearman の相関係数の算出をおこなった。分析対象者は，ライフステージ（大学生 114 名，社会人 111 名），性別（男性 119 名，女性 106 名），活動形態（就業者 130 名，ボランティア 95 名）によって群分けした。統計分析には，統計処理ソフト SPSS Statistics 28 を使用した。有意水準は危険率 5%未満とした。

4) 倫理的配慮

研究 1-3 と同様の手続きをおこなった。

3. 結果

1) 正規分布の検討

スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素 15 項目について、Shapiro-Wilk の正規性の検定をおこなった結果、すべての項目で正規分布が確認されなかった ($W=.84 - .90$, $p<.001$). 項目得点のヒストグラムを確認した結果 (図 3-2), 4 もしくは 5 点をつけた対象者の割合が高いことが明らかになった. 以後, 非正規分布を前提とした分析をおこなうこととした.

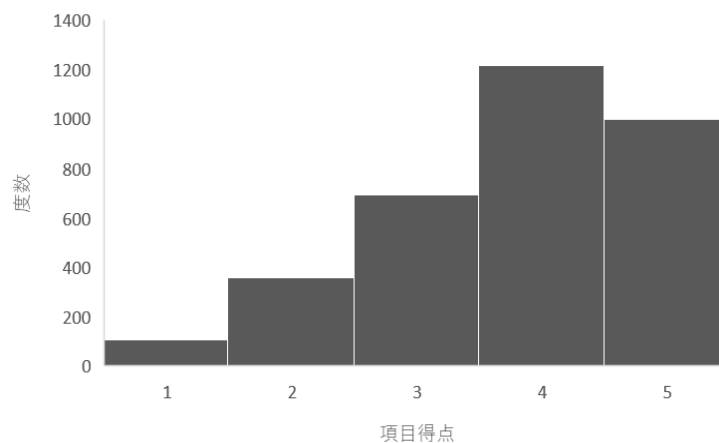


図 3-2 項目得点のヒストグラム

2) 基礎統計量の算出と基準関連妥当性の検証

スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素 15 項目について、中央値および四分位範囲 (IBM Support, 2018) を算出した (表 3-3). また, 要約統計量として平均値と標準偏差を併記した. 次に, 抽出された項目がスポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素として妥当な項目であることを検証するために, スポーツを「ささえる」活動の楽

しさ尺度との相関係数を算出した。その結果、項目5の「専門以外の活動ができる」楽しさを除き、比較的強い有意な正の相関関係が確認され、基準関連妥当性が確認された。

表 3-3 相関分析結果

楽しさの要因		中央値	IQR	M	SD	スポーツを「ささえる」活動の楽しさ	
						ρ	p
1	活動そのものが楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.75	1.11	.73	***
2	コミュニケーションがとれるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.80	1.07	.67	***
3	内容が工夫できるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.70	1.10	.69	***
4	専門的な活動ができるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.88	1.00	.58	***
5	専門以外の活動ができるから楽しい	4.00	(3.00-4.00)	3.43	1.12	.39	***
6	子どもたちと交流できるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.74	1.17	.55	***
7	大人と交流できるから楽しい	4.00	(3.00-4.00)	3.61	1.13	.48	***
8	他の指導者やスタッフと活動できるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.76	1.03	.51	***
9	参加者の成長が見られるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.91	1.03	.62	***
10	参加者が楽しんでいる姿が見られるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.90	1.05	.64	***
11	活動中の雰囲気が良いから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.86	1.03	.58	***
12	参加者の様々な感情が見られるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.83	1.06	.60	***
13	参加者の笑顔が見られるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.96	1.02	.61	***
14	スポーツの楽しさを普及できるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.75	1.12	.59	***
15	自己成長を感じられるから楽しい	4.00	(3.00-5.00)	3.84	1.05	.51	***

*** $p < .001$

3) 楽しさの要素と継続意志・行動の関係の検討

(1) ライフステージ別の関係の検討

ライフステージ（大学生／社会人）による群分けをおこない、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素とスポーツ指導者・コミットメント尺度の相関係数を算出した（表 3-4）。分析の結果、両群ともに情熱的コミットメントのすべての項目で、比較的強い有意な正の相関関係が確認された。大学生は項目12の「参加者の様々な感情が見られる」楽しさ（ $\rho = .63$ ）、社会人は項目1の「活動そのもの」の楽しさ（ $\rho = .67$ ）と

情熱的コミットメントの間の相関係数が最も高かった。次に、大学生は項目5の「専門以外の活動ができる」楽しさを除くすべての項目が、強制的コミットメントと弱い、もしくは比較的強い有意な負の相関関係にあることが確認されたが、社会人は有意な関係はみられなかった。大学生は、項目3の「内容が工夫できる」楽しさ ($\rho = -.51$) と強制的コミットメントの間の相関係数が最も高かった。

最後に、活動頻度との相関係数を算出した結果、大学生は項目2の「コミュニケーションがとれる」楽しさと、項目11の「活動中の雰囲気が良い」ことによる楽しさ ($\rho = .30$)、社会人は項目10の「参加者が楽しんでいる姿が見られる」楽しさ ($\rho = .34$) の間の相関係数が最も高かった。

表 3-4 ライフステージ別の相関分析結果

楽しさの要因	大学生 (n=114)						社会人 (n=111)					
	情熱的 コミットメント		強制的 コミットメント		活動頻度		情熱的 コミットメント		強制的 コミットメント		活動頻度	
	ρ	p	ρ	p	ρ	p	ρ	p	ρ	p	ρ	p
1 活動そのものが楽しい	.59	***	-.49	***	.24	*	.67	***	.03		.30	**
2 コミュニケーションがとれるから楽しい	.59	***	-.40	***	.30	**	.53	***	-.02		.24	*
3 内容が工夫できるから楽しい	.54	***	-.51	***	.06		.61	***	.11		.23	*
4 専門的な活動ができるから楽しい	.42	***	-.26	**	.05		.55	***	.03		.10	
5 専門以外の活動ができるから楽しい	.41	***	-.07		-.02		.47	***	.18		.07	
6 子どもたちと交流できるから楽しい	.41	***	-.24	**	.03		.51	***	.08		.26	**
7 大人と交流できるから楽しい	.54	***	-.22	*	.00		.50	***	.06		.11	
8 他の指導者やスタッフと活動できるから楽しい	.48	***	-.25	**	.12		.53	***	.15		.20	*
9 参加者の成長が見られるから楽しい	.49	***	-.37	***	.20	*	.58	***	.10		.27	**
10 参加者が楽しんでいる姿が見られるから楽しい	.49	***	-.34	***	.22	*	.55	***	.01		.34	***
11 活動中の雰囲気が良いから楽しい	.51	***	-.31	***	.30	**	.51	***	.03		.23	*
12 参加者の様々な感情が見られるから楽しい	.63	***	-.29	**	.13		.54	***	.06		.18	
13 参加者の笑顔が見られるから楽しい	.55	***	-.29	**	.17		.63	***	.08		.24	*
14 スポーツの楽しさを普及できるから楽しい	.61	***	-.19	*	.09		.51	***	.11		.18	
15 自己成長を感じられるから楽しい	.50	***	-.28	**	.22	*	.49	***	-.05		.00	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(2) 性別の関係の検討

性別による群分けをおこない、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素とスポーツ指導者・コミットメント尺度の相関係数を算出した（表 3-5）。分析の結果、両群ともに情熱的コミットメントのすべての項目で、弱い、もしくは比較的強い有意な正の相関関係が確認された。男性は項目 14 の「スポーツの楽しさを普及できる」楽しさ（ $\rho = .63$ ）、女性は項目 1 の「活動そのもの」の楽しさ（ $\rho = .64$ ）と情熱的コミットメントの間の相関係数が最も高かった。次に、女性は複数の項目で強制的コミットメントと弱い、もしくは比較的強い有意な負の相関関係にあることが確認されたが、男性は有意な関係はみられなかった。女性は、項目 1 の「活動そのもの」の楽しさ（ $\rho = -.45$ ）と強制的コミットメントの間の相関係数が最も高かった。

最後に、活動頻度との相関係数を算出した結果、男性は項目 1 の「活動そのもの」と項目 6 の「子どもたちと交流」する楽しさ（ $\rho = .30$ ）、女性は項目 10 の「参加者が楽しんでいる姿が見られる」楽しさ（ $\rho = .32$ ）の間の相関係数が最も高かった。

表 3-5 性別の相関分析結果

楽しさの要因		男性 (n=119)						女性 (n=106)					
		情熱的 コミットメント		強制的 コミットメント		活動頻度		情熱的 コミットメント		強制的 コミットメント		活動頻度	
		ρ	p	ρ	p	ρ	p	ρ	p	ρ	p	ρ	p
1	活動そのものが楽しい	.61	***	-.06		.30	***	.64	***	-.45	***	.27	**
2	コミュニケーションがとれるから楽しい	.51	***	-.01		.26	**	.61	***	-.39	***	.27	**
3	内容が工夫できるから楽しい	.58	***	-.09		.11		.58	***	-.34	***	.21	*
4	専門的な活動ができるから楽しい	.61	***	-.02		.18	*	.33	***	-.27	**	-.03	
5	専門以外の活動ができるから楽しい	.52	***	.11		.15		.37	***	-.05		-.11	
6	子どもたちと交流できるから楽しい	.60	***	.04		.30	**	.28	**	-.19		.02	
7	大人と交流できるから楽しい	.52	***	-.07		.09		.53	***	-.14		.03	
8	他の指導者やスタッフと活動できるから楽しい	.48	***	.13		.16		.53	***	-.27	**	.14	
9	参加者の成長が見られるから楽しい	.54	***	.12		.24	**	.51	***	-.38	***	.22	*
10	参加者が楽しんでいる姿が見られるから楽しい	.49	***	-.05		.27	**	.55	***	-.31	**	.32	***
11	活動中の雰囲気が良いから楽しい	.54	***	-.02		.25	**	.46	***	-.27	**	.29	**
12	参加者の様々な感情が見られるから楽しい	.60	***	.03		.15		.57	***	-.26	**	.16	
13	参加者の笑顔が見られるから楽しい	.61	***	.07		.18	*	.54	***	-.26	**	.24	*
14	スポーツの楽しさを普及できるから楽しい	.63	***	.03		.10		.50	***	-.13		.17	
15	自己成長を感じられるから楽しい	.55	***	-.01		.10		.38	***	-.28	**	.10	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(3) 活動形態別の関係の検討

活動形態（就業者／ボランティア）による群分けをおこない、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素とスポーツ指導者・コミットメント尺度の相関係数を算出した（表 3-6）。分析の結果、両群ともに情熱的コミットメントのすべての項目で、比較的強い有意な正の相関関係が確認された。就業者は項目 1 の「活動そのもの」の楽しさ（ $\rho = .65$ ）、ボランティアは項目 2 の「コミュニケーションがとれる」楽しさおよび項目 7 の「大人と交流できる」楽しさ（ $\rho = .64$ ）と情熱的コミットメントの間の相関係数が最も高かった。次に、ボランティアは、複数の項目で強制的コミットメントと弱い有

意な負の相関関係にあることが確認されたが、就業者は有意な関係はみられなかった。

ボランティアは、項目 1 の「活動そのもの」の楽しさ ($\rho = -.49$) と強制的コミットメントの間の相関係数が最も高かった。

最後に、活動頻度との相関係数を算出した結果、就業者は項目 1 の「活動そのもの」の楽しさ ($\rho = .34$)、ボランティアは項目 10 の「参加者が楽しんでいる姿が見られる」楽しさ ($\rho = .28$) の間の相関係数が最も高かった。

表 3-6 活動形態別の相関分析結果

楽しさの要因		就業者 (n=130)						ボランティア (n=95)					
		情熱的 コミットメント		強制的 コミットメント		活動頻度		情熱的 コミットメント		強制的 コミットメント		活動頻度	
		ρ	p	ρ	p	ρ	p	ρ	p	ρ	p	ρ	p
1	活動そのものが楽しい	.65	***	-.10		.34	***	.63	***	-.49	***	.20	
2	コミュニケーションがとれるから楽しい	.52	***	-.08		.30	***	.64	***	-.40	***	.22	*
3	内容が工夫できるから楽しい	.54	***	-.11		.17		.63	***	-.39	***	.14	
4	専門的な活動ができるから楽しい	.52	***	-.15		.09		.46	***	-.16		.10	
5	専門以外の活動ができるから楽しい	.41	***	.16		.08		.48	***	-.16		-.04	
6	子どもたちと交流できるから楽しい	.42	***	-.02		.27	**	.50	***	-.20		.05	
7	大人と交流できるから楽しい	.44	***	.11		.10		.64	***	-.34	***	-.03	
8	他の指導者やスタッフと活動できるから楽しい	.52	***	.07		.19	*	.49	***	-.24	*	.10	
9	参加者の成長が見られるから楽しい	.52	***	.01		.25	**	.55	***	-.35	***	.21	*
10	参加者が楽しんでいる姿が見られるから楽しい	.51	***	-.07		.30	***	.53	***	-.33	**	.28	**
11	活動中の雰囲気が良いから楽しい	.56	***	-.03		.29	***	.48	***	-.28	**	.24	*
12	参加者の様々な感情が見られるから楽しい	.63	***	.03		.13		.55	***	-.30	**	.20	*
13	参加者の笑顔が見られるから楽しい	.61	***	-.04		.29	***	.57	***	-.19		.10	
14	スポーツの楽しさを普及できるから楽しい	.55	***	.07		.19	*	.60	***	-.15		.07	
15	自己成長を感じられるから楽しい	.41	***	-.03		.07		.61	***	-.33	**	.16	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

4. 考察

1) 楽しさの要素の基準関連妥当性

研究 2-1 にて抽出された楽しさの要素に対して、項目 5 の「専門以外の活動ができる」楽しさを除き、活動そのものに対する楽しさの評価と関連する要素であることが確認された。項目 5 の相関係数が低かった原因として、参加動機と活動内容の差異が考えられる。スポーツボランティアの参加動機として、知識や経験を活かすことが挙げられることから（松本ほか，2004；田引，2008），専門性が低い活動に従事することで、活動に対する期待が満たされず、楽しさを感じる程度が低くなると推測される。

2) 楽しさの要素と継続意志・行動の関係

(1) ライフステージ別による関係

・大学生

大学生は、項目 12 の「参加者の様々な感情がみられる」楽しさと情熱的コミットメントの間に、比較的強い正の相関関係が確認された。押見・原田（2010）は、「みるスポーツ」として位置づけられるスポーツ観戦の感動場面として、「選手やチームが試合終了まで必死に頑張ること」や「選手が人間としての豊かな情緒を感じさせること」を挙げ、感動場面を見ることが再観戦意図を予測することを明らかにしている。同様に、大学生はスポーツを「ささえる」活動を通して、「ささえる」対象である参加者の感情の表出を見ることが、情熱的コミットメントと関係する可能性が示唆された。

また、項目3の「内容が工夫できる」楽しさと強制的コミットメントの間に、比較的強い負の相関関係が確認された。梅本・田中（2015）は、大学生が学習行動を「退屈／面白くない」と認識する場合、自身の興味と関連づけたり達成感を考えるなどの自律的な動機づけ調整方略によって積極的な学習行動と関連することを示している。これを踏まえれば、大学生は「内容が工夫できる」ことで、退屈や面白くないというネガティブな感情を調整し、結果として「継続しなければならない」という強制的コミットメントを緩和させる可能性がある。

最後に、項目2の「コミュニケーションがとれる」、項目11の「活動中の雰囲気が良い」ことによる楽しさと活動頻度の間に弱い相関関係が確認された。大学生は、アルバイトの継続において雰囲気や仲間と楽しく活動ができることを重視し（株式会社マイナビ，2024）、サークルにおいて仲間と楽しく活動することに最も動機づけられる（蔵本・菊池，2006）。これを踏まえれば、スポーツを「ささえる」活動においても、活動の雰囲気が良いことや、他者とコミュニケーションをとる機会が多いといった、大学生自身が活動を楽しみと感じられる環境や内容を重視し、楽しさを感じることで、活動頻度と関係する可能性が示唆された。

・ 社会人

社会人は、項目1の「活動そのもの」の楽しさと情熱的コミットメントの相関係数が最も高かった。主に20～40代の社会人を対象とした先行研究では、運動部活動の外部指導者の促進要因について、謝金や制度などの外的要因よりも、活動の楽しさを認識

していることが示されている（青柳ほか，2013）。研究 1-3 で述べた通り，余暇活動として活動する場合，より動機づけの高い活動を選択すること，就業者として活動する場合，愛着が強い活動を選択していることが推測される。この結果，活動そのものを楽しみと認識することが，情熱的コミットメントと強い相関関係にあったと考えられる。

次に，強制的コミットメントとの有意な相関関係がみられなかった原因として，スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素が，大学生から抽出された項目であったことが挙げられる。この結果，社会人の強制的コミットメントと関連する楽しさの要素として適さなかった可能性が推測される。また，楽しさの要素にかかわらず，強制的コミットメントと関連しない可能性が考えられる。主に会社員の地域スポーツのコーチを対象とした研究（大橋ほか，2016）では，コーチをおこなう中での喜びが負担感と有意な負の相関関係を示したが，相関係数は -0.14 と弱い関係であった。これを踏まえれば，社会人は楽しさの要素に関わらず，強制的コミットメントとの関係が弱い可能性がある。

最後に，項目 10 の「参加者が楽しんでいる姿が見られる」ことによる楽しさと活動頻度の間に弱い相関関係が確認された。先行研究（松本，1999）において，スポーツイベントにボランティアとして参加した会社員は，参加者との交流や支援といった動機づけが低い傾向が示唆されている。先行研究と異なる傾向が見られた原因として，本研究では，日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続者を分析対象者としたことが挙げられる。その結果，先行研究に比べ参加者との交流機会が多く，参加者が楽しむ姿を見ることが心理的報酬となり，活動頻度と関係する可能性がある。

（２）性別の関係

・男性

男性は、項目 14 の「スポーツの楽しさを普及できる」楽しさと情熱的コミットメントの相関係数が最も高かった。男性は女性に比べ、スポーツ実施率が高く（スポーツ庁，2023），スポーツを好意的に捉えている（笹川スポーツ財団，2021）。男性の継続意志は、活動者やスポーツ活動への関心や支援したいという意欲によって予測される（松本ほか，2004）。また、20 代男性は 20 代女性に比べ、スポーツを「ささえる」活動の動機づけとして、「好きなスポーツの普及・支援」と回答する割合が高い（スポーツ庁，2024b）。これらを踏まえれば、男性はスポーツに楽しさを感じ、スポーツの楽しさを普及することで参加動機が満たされ、情熱的コミットメントと関係すると考えられる。

一方で、男性は、すべての項目と強制的コミットメントの関係がみられなかった。この原因として、義務感・強制感が強い可能性が挙げられる。例えば、男性は女性に比べ、スポーツボランティアに対する義務感が強いこと（松本，1999）、他者から参加を要請された他律的な参加動機が男性の継続意欲を低下させる（松本ほか，2004）。このことから、男性は楽しさの要素に関わらず、強制的コミットメントが高い可能性がある。

最後に、項目 1 の「活動そのもの」の楽しさや、項目 6 の「子どもたちと交流できる」楽しさと活動頻度の間に弱い相関関係が確認された。男性は、女性に比べ、日常的なスポーツ指導を希望する割合が高い（笹川スポーツ財団，2022）。また、日本スポーツ協会に登録している指導者の約 8 割は男性である（スポーツ庁，2021）。子どものス

スポーツは定期的・日常的におこなわれることが多く、例えば、中学校や高校の運動部活動の活動頻度は週 4～5 回である（日本スポーツ協会，2021）。このことから、子どもを対象とした活動に楽しさを感じる男性は、活動頻度の高い活動を継続する可能性がある。また、スポーツボランティアの恩恵として、「指導活動を通して自分自身がスポーツを楽しめている」ことが挙げられるが（笹川スポーツ財団，2015）、男性は、スポーツを「ささえる」活動を通して子どもと交流し、自身が楽しむことが、活動頻度と関係する可能性が示唆された。

・女性

女性は、項目 1 の「活動そのもの」の楽しさと情熱的・強制的コミットメントの相関係数が最も高かった。障害者スポーツイベントのボランティアを対象とした調査では、女性は男性に比べ、レクリエーションを兼ねた主体的な参加動機を持つ割合が高い（松本，1999）。活動が主体的な場合、女性は活動そのものに気晴らしや楽しさを期待しており、活動を通して参加動機が満たされることで情熱的コミットメントを高める可能性がある。また、地域スポーツに参加する子どもの母親を対象とした調査では、子どもが活躍するなどの見返りによってサポート活動に満足すること（大橋ほか，2020）が示唆されている。また、子どもがチームに所属することで得られる、子どもや母親自身の満足感がチームサポート活動の継続意志を高めること、活動の負担感を抑制すること（大橋ほか，2022）が示されている。つまり、義務的な活動の場合、間接的もしくは付随的に得られる見返りによって、活動を楽しみと認識し、情熱的コミットメントを高

める，強制的コミットメントを抑制する可能性が推測される。

最後に，項目 10 の「参加者が楽しんでいる姿が見られる」ことによる楽しさと活動頻度の間に弱い相関関係が確認された。女性は男性に比べ，スポーツボランティア活動を利他的・利己的に捉えており（清宮ほか，2021），他者の役に立つことや参加者との交流を参加動機とする割合が高い（松本，1999）。女性は，参加者が楽しんでいる姿を見ることで，利他的・利己的な動機が満たされ，楽しさを感じることが，活動頻度と関係する可能性が示唆された。

（３）活動形態別の関係

・就業者

就業者は，項目 1 の「活動そのもの」の楽しさと情熱的コミットメントの相関係数が最も高かった。コーチの志望理由として，継続していた競技への愛着やスポーツ指導の楽しさの経験（三倉・小笠原，2021），運動部活動の外部指導者の継続要因として，「その競技が好き」「楽しい」という回答が得られている（青柳ほか，2013）。就業者は，スポーツ活動に愛着があり，活動内容を重視して就業を選択しているため，情熱的コミットメントとの相関関係が確認されたと推測される。

一方で，就業者において，すべての項目と強制的コミットメントの関係がみられなかった原因として，就業者はボランティアに比べ活動に対する責任が大きく，楽しさと強制的なコミットメントの関係が薄いことが推測される。例えば，運動部を含む中学校部活動の顧問の約 6 割が，「部活動の顧問は楽しい」と肯定的に評価しているものの，約

半数が次年度の継続を希望していない（内田ほか，2018）。このことから，一部の顧問は，楽しさを感じつつも義務的に継続している可能性が推測される。有償性に伴う責任感の向上は有償ボランティアにもみられるが（井出，2019），有償ボランティアよりも有給職員やアルバイト・パートの労働性が強い（労働政策研究・研修機構，2006）。つまり，就業者は，活動を労働と捉え，義務感を感じていると考えられる。

最後に，項目1の「活動そのもの」の楽しさと活動頻度の間に弱い相関関係が確認された。就業者は活動そのものに愛着があり，スポーツボランティアに比べ活動頻度が高い就業形態（笹川スポーツ財団，2019；スポーツ庁，2021）を選択していると推測される。

・ボランティア

ボランティアは，項目2の「コミュニケーションがとれる」や，項目7の「大人と交流できる」楽しさと情熱的コミットメントの相関係数が最も高かった。若年層のボランティアは，「出会い・交流」に動機づけられることから（スポーツ庁，2023），活動内で成人とコミュニケーションをとることで参加動機が満たされ，楽しさを感じることで，情熱的コミットメントと関係する可能性がある。

また，項目1の「活動そのもの」の楽しさと強制的コミットメントの相関係数が最も高かった。二宮（2020）は，スポーツボランティア活動について，スポーツに興味関心がある人の参加が多く，活動そのものを楽しむ傾向にあると述べている。また，ボランティアを仲間と一緒にこなえる「楽しみ」と認識するボランティア継続者は休止

希望を抑制することが示唆されている（米澤，2010）。スポーツを「ささえる」活動においても，ボランティアは活動に対して楽しさを認識することで強制的コミットメントを抑制する可能性が示唆された。

最後に，ボランティアは項目 10 の「参加者が楽しんでいる姿が見られる」ことによる楽しさと活動頻度の間に弱い相関関係が確認された。ボランティアを対象とした調査から，継続動機として「人に喜んでもらえる」などの他者志向的動機があること（妹尾・高木，2003）が示されている。また，「活動を通して行動が役立ったと実感できること」で活動に満足し，活動継続の動機づけが高まることが示唆されている（妹尾，2008）。スポーツを「ささえる」活動を継続するボランティアにおいても，参加者が楽しんでいる姿を見ることで自身の活動が役立ったと感じ，楽しさを感じることで，活動頻度と関係する可能性が示唆された。

（４）個人属性と活動形態による関係の差異

個人属性と活動形態別の分析の結果，すべての属性において楽しさの要素と情熱的コミットメントが，比較的強い正の相関関係にあることが確認された。本研究で測定した楽しさの要素が，活動の楽しさを感じる対象を具体化したものであったことから，研究 1-3 の結果と同様に，情熱的コミットメントと強い相関関係にあったと考えられる。

次に，大学生，女性，ボランティアにおいて強制的コミットメントとの相関関係が確認されたが，社会人，男性，就業者では関係が確認されなかった。これは，社会人，男性が，活動を義務的に認識する傾向にあること（松本，1999；大橋ほか，2016），社会

人や就業者が、活動に楽しさと負担感やストレスを感じている（大橋ほか，2016；内田ほか，2018）という先行研究を支持している．また，本研究で測定した楽しさの要素が，主にボランティアとして活動した大学生から抽出したものであったため，社会人や就業者が評価する楽しさの要素として適当でなかった可能性がある．

最後に，すべての群において，活動頻度と弱い正の相関関係にあることが確認された．これは，運動・スポーツ活動における活動の楽しさの要素と活動頻度の関係（徳永・橋本，1980）と類似する結果である．また，大学生，男性，就業者は，活動そのものや，自身が活動を楽しめる環境や対象に関する要素が活動頻度と最も関係した．一方で，社会人，女性，ボランティアは，「ささえる」対象である参加者が楽しんでいる姿を見ることが活動頻度と最も関係した．女性やボランティアは，ボランティア活動に対して他者志向的な参加動機を有する（松本，1999；妹尾・高木，2003）ことから，スポーツを「ささえる」活動を通して，他者志向的な参加動機が満たされることで，活動頻度と関係する可能性が示唆された．

5. 要約

研究 2-2 の目的は、若年層のスポーツを「ささえる」活動の継続意志・行動に関する楽しさの要素を明らかにすることであった。まず、研究 2-1 の結果をもとに、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素として 15 項目を作成し、項目内容の妥当性を確認した。次に、日常的なスポーツを「ささえる」活動を継続する若年層を対象に調査をおこない、個人属性と活動形態別に、楽しさの要素とスポーツコミットメント、活動頻度の相関分析をおこなった。研究 2-2 で示された結果は、以下のとおりである。

まず、研究 2-1 にて抽出された楽しさの要素 15 項目と、研究 1-2 で作成したスポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度との相関関係が確認され、1 項目を除き楽しさの要素として妥当であることが確認された。次に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素は、すべての群で、情熱的コミットメントと中程度に正の相関関係にあること、大学生、女性、ボランティアは、強制的コミットメントと弱い負の相関関係にあることが確認された。また、すべての群で、楽しさの要素が活動頻度と弱く正の相関関係にあることが示された。最後に、情熱的・強制的コミットメントや活動頻度と最も強く相関関係にある楽しさの要素は、個人属性と活動形態によって異なることが示された。

第 3 章 総括

第 1 節 本研究の成果

本博士論文の目的は、スポーツを「ささえる」活動の継続要因として楽しさに着目し、楽しさと継続意志・行動の関係を明らかにすることであった。関係の検証にあたり、継続意志としてスポーツコミットメント、継続的な参加行動の指標として活動頻度を設定した。また、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを、活動そのものに対する楽しさと、楽しさを感じる要素に分けた。関係を検証するために、理論モデルを用いたスポーツを「ささえる」活動の楽しさ、スポーツコミットメント、活動頻度の関係の検証（第 1 章）と、楽しさの要素とスポーツコミットメント、活動頻度の関係の探索的検討（第 2 章）をおこなった。また、個人属性と活動形態による関係の違いを明らかにした。各章の研究成果について、以下に要約する。

1. スポーツを「ささえる」活動の継続要因としての楽しさの検討

第 1 章では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさと継続意志・行動の関係を明らかにするために、理論モデルにもとづき仮説モデルを設定し、検証をおこなった。モデルの検証に際して、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを測定する尺度が作成されていないことから、スポーツ活動の楽しさを測定する尺度を援用した。まず、研究 1-1 では、スポーツの楽しさを測定する SCQ-2 の下位尺度を翻訳し、運動・スポーツ活動の楽しさを測定した際の尺度の妥当性および信頼性を確認した。次に、研究 1-2 では、研究 1-

1 にて作成した尺度を援用し、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを測定する際の妥当性および信頼性を確認した。研究 1-1 と 1-2 を通して、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを測定する 1 因子 5 項目の尺度を作成した。

研究 1-3 では、日常的なスポーツを「ささえる」活動を継続している若年層を対象に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ、スポーツコミットメント、活動頻度の関係を示す仮説モデルを検証した。その結果、すべての分析対象者を単一母集団とした場合、楽しさが情熱的コミットメントを媒介して、活動頻度を予測することが確認された。また、個人属性（性別・ライフステージ）と活動形態によって対象者を群分けし、母集団別のモデルの適合や予測力の差異を検証した結果、大学生、社会人、男性、就業者を対象とした場合にモデルが適合すること、社会人と就業者を対象とした場合に楽しさの間接効果が確認された。これらの結果から、若年層のうち、社会人と就業者において、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが、情熱的コミットメントを媒介して参加行動を促進することが明らかになった。一方で、女性とボランティアにおいて、仮説モデルが適合しないことが明らかになった。

2. スポーツを「ささえる」活動の楽しさに関わる要素の検討

第 2 章では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を質的研究から抽出し、楽しさの要素と継続意志・行動の関係を明らかにした。まず、研究 2-1 では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを感じる要素を明らかにするために、地域スポーツ教室の指

導・運営・補助的活動に参加した大学生を対象とし、自由記述のアンケートから得られた楽しさの要素を KJ 法の手法を用いて分類した。その結果、対象とした大学生が、指導・運営など活動そのものや活動経験、参加者と交流したり、ともにスポーツ活動をおこなうこと、参加者が楽しんでいる姿を見たり成長を実感することに楽しさを感じていることが明らかとなった。

次に、研究 2-2 では、日常的なスポーツを「ささえる」活動を継続する若年層を対象とし、個人属性と活動形態別に、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素とスポーツコミットメント、活動頻度の関係を探索的に検討した。その結果、すべての群で情熱的コミットメントとの相関関係が確認された。また、大学生、女性、ボランティアにおいて、強制的コミットメントとの相関関係が確認された。次に、活動頻度との関係を確認した結果、大学生、男性、就業者は、活動そのものや、自身が活動を楽しめる環境や内容に関する要素が、活動頻度と最も関係することが明らかとなった。一方で、社会人、女性、ボランティアは、「ささえる」対象である参加者が楽しんでいる姿を見ることが、活動頻度と最も関係することが明らかとなった。

第2節 総合考察

本博士論文の結果から、スポーツを「ささえる」活動の楽しさ、および楽しさの要素は、若年層の継続意志・行動を促進する可能性があるが、楽しさの予測力が小さいこと、個人属性と活動形態による差異があることが示された。

個人属性と活動形態による差異に関して、第1章では、女性やボランティアにおいてSCMが適合しなかった。この原因として、運動・スポーツ活動で用いられるSCMにもとづき、スポーツを「ささえる」活動そのものの楽しさを測定したためであると考えられる。第2章において、大学生、男性、就業者は、活動そのものや、自身が活動を楽しめる環境や内容に関する要素と活動頻度の相関係数が最も高かった。これらの個人属性と活動形態は、第1章にてSCMの適合が確認されている。一方で、社会人、女性、ボランティアは、活動そのものの楽しさに比べ、活動を通して「ささえる」対象者が楽しんでいる姿を見ることが、活動頻度と強く関係することが明らかとなった。つまり、第1章にてSCMが適合しなかった個人属性と活動形態は、自身の活動の楽しさよりも、「ささえる」対象者が楽しむ姿を見ることが、活動頻度と関係する可能性がある。

これは、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素が、活動を通して「ささえる」対象者から得られる心理的報酬を含むためであると考えられる。ボランティア活動などを指す援助行動に関する先行研究において、援助行動後に被援助者への効果である「援助効果」と、援助者自身の効果である「援助成果」が評価され、援助に対して肯定的な態度を抱くこと（高木，1997）が明らかとなっている。また、「援助成果」が大きいほど、

「援助成果」をもたらしたボランティア行動の継続を強く動機づけられること（妹尾・高木，2003）が明らかとなっている。「援助効果」は，援助によって被援助者の問題が改善したり，被援助者が援助者に感謝することによって，被援助者にとって援助が有効であったかを援助者自身が評価する観点である（高木，1997）。また，「援助成果」は，「向社会的行動において，他者との相互作用を通じて，援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬」と定義される（妹尾，2001）。これを踏まえると，女性やボランティアは，スポーツを「ささえる」活動によって，「ささえる」対象者が楽しむ姿を見ることで，自身の活動が有効であったと認識し，活動を楽しんでいる可能性がある。

つまり，SCM にもとづいた関係検証では，「ささえる」対象者から得られる楽しさの要素が不足していたため，女性やボランティアにおいて，モデルが適合しなかったと考えられる。運動・スポーツ活動の楽しさの要素は，「レクリエーション」や「挑戦」など（徳永・橋本，1980；和田，1988）の活動者自身の楽しさである。一方で，スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素は，「ささえる」対象者との関係から得られる楽しさを含むこと，個人属性や活動形態によって楽しさを感じる要素が異なることで，継続意志や継続的な参加行動との関係に差異がみられたと考える。

第3節 本研究の学術的意義

序論で述べたように、先行研究では、スポーツを「ささえる」活動が定義されておらず、継続要因による継続意志の予測にとどまっていた。本博士論文では、スポーツを「ささえる」活動を定義し、継続要因として楽しさ、継続意志としてスポーツコミットメント、行動指標として活動頻度を含む理論モデルにもとづき、関係の検証をおこなった。この結果、スポーツを「ささえる」活動の楽しさがスポーツコミットメントを媒介して活動頻度を促進するメカニズムを明らかにした。一方で、楽しさがスポーツコミットメントを強く予測したにもかかわらず、スポーツコミットメントから活動頻度に対する予測力が弱かったことは、行動指標を加えた研究を推進する必要性を示唆した。

また、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を抽出し、楽しさの要素が継続意志・行動に関係すること、個人属性と活動形態による特徴を確認した。

本博士論文において、スポーツを「ささえる」活動の継続に至る行動指標を含めたメカニズムを明らかにしたこと、若年層の継続意志・行動と関係する具体的な楽しさの要素を明らかにしたことで、スポーツを「ささえる」活動を対象とした研究の発展に寄与することができたと考える。

第4節 本研究の実践的意義

本研究では、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが情熱的コミットメントを媒介して活動頻度を予測すること、楽しさの要素が情熱的コミットメントや活動頻度と関係することが確認された。この結果から、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを認識する若年層は情熱的コミットメントを高め、継続的に参加することが示唆される。本研究で得られた結果にもとづいて、若年層の日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続性の促進につながるマネジメント方略について、提言をおこなう。

1. スポーツを「ささえる」活動の楽しさの測定

本研究の結果、スポーツを「ささえる」活動の楽しさが、情熱的コミットメントを媒介して活動頻度に関係することが確認された。また、個人属性と活動形態別のモデルの検証から、社会人や就業者は、楽しさが間接的に活動頻度を予測することが確認された。この結果を踏まえ、活動の依頼者やマネジメント組織が、スポーツを「ささえる」人材の楽しさの充足／欠如を把握することが有用であると考ええる。

例えば、本研究で作成したスポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度を使用し、楽しさを測定することで、社会人や就業者のスポーツコミットメントや活動頻度を予測することができる。また、マネジメント組織は、若年層の活動頻度の低下や離脱を防ぐために、スポーツを「ささえる」若年層が楽しさを感じられるよう外的要因を改善し、改善

案の効果検証や評価をおこなうことができる。原田（2022）は、PDCA サイクルに代わる OODA ループにおけるマネジメントの具体例として、「観察対象の絞り込み，観察の仕組み化」を挙げている。例えば，OODA ループの「観察」段階において楽しさを測定し，若年層の楽しさの変化に関係する要因を「状況判断」し，楽しさを強化する改善案の計画・立案を「意思決定」する。その後，活動内容の変更や活動の裁量を与えるなどの改善案を「行動」し，楽しさの改善が見られたかを再度「観察」することで，改善案が有効であったかを評価することができる考える。

2. スポーツを「ささえる」活動の楽しさを提示したマッチング

本研究の結果，スポーツを「ささえる」活動には独自の楽しさの要素があること，個人属性と活動形態によって継続意志・行動と関係する要素が異なることが示された。この結果を踏まえ，スポーツを「ささえる」若年層の募集やマッチング（稲葉・山口，2009）に楽しさの要素を活用することができる。

現在，日本スポーツ協会がおこなっている「公認スポーツ指導者マッチング」では，指導者の募集に際して，指導団体や必要な指導者資格，指導対象者の属性やレベル，謝金の有無の記載を求めている（日本スポーツ協会，online）。これらに加え，「どのような楽しさを感じられる活動か」を提示することで，スポーツを「ささえる」人材は自分の希望に合わせて活動を選択することができる。イベントボランティアにおいて，希望役割と当日役割のミスマッチによって活動評価が低下すること（稲葉・山口，2009）

が明らかになっていることから、ニーズと希望をすり合わせることで、スポーツを「ささえる」活動の継続性を高めることができると考える。また、活動の楽しさの要素を提示することで、「スポーツの専門的資格を有していないものの、子どもの支援をしたい」といった動機づけが高まる可能性がある。この結果、スポーツを「ささえる」活動継続者の拡大につながると考える。

3. スポーツを「ささえる」活動の楽しさの強化

本研究の結果、大学生はコミュニケーションが取れることや活動中の雰囲気が良いこと、男性や就業者は、活動そのものや子どもたちと交流できることに楽しさを感じ、活動頻度と関係することが示された。また、社会人、女性、ボランティアは、「ささえる」対象者が楽しんでいる姿を見ることに楽しさを感じ、活動頻度と関係することが示された。この結果を踏まえ、スポーツを「ささえる」活動の楽しさを強化するような配置やフィードバックシステムを構築することができる。

例えば、大学生や男性は、スポーツ指導や審判など、子どもをはじめとした参加者と直接接する機会が多い活動に配置することが有効であると考え。特に、男性は、スポーツが普及できることに楽しさを感じ、情熱的コミットメントを高める可能性があることから、よりスポーツ性の高い活動への配置によって継続性が高まると考える。また、社会人、女性、ボランティアは、活動中に「ささえる」対象者の様子を見る、活動後に「ささえる」対象者からのフィードバックを受ける機会を設けることが有効であると考

える。スポーツイベントで活躍するイベントボランティアは、大会終了後に選手や主催者からの感謝の言葉や感謝状を受けることがある（笹川スポーツ財団，2015）。しかし，施設管理や事務作業，準備や片づけなどの日常的なスポーツを「ささえる」活動は，自身の活動がどのように受け取られているかを知る機会は少ない。定期的にフィードバックの場を設け，自身の活動が「ささえる」対象者の支援になり，楽しんでいることを認識できる機会をシステム化することで，継続性が高まると考える。

第5節 本研究の課題と今後の展望

本研究において、スポーツを「ささえる」活動の楽しさがスポーツコミットメントを予測すること、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素があることが示唆され、若年層の継続的な参加行動を推進するうえで有用な知見が提示されたと考えられる。以下では、本博士論文に残された課題と今後の展望について述べる。

1. スポーツを「ささえる」活動の分類

本研究では、スポーツを「ささえる」活動を継続する若年層を対象に調査をおこなった。しかし、スポーツを「ささえる」活動と、「する・みる」スポーツとの明確な区別ができない可能性がある。例えば、「指導活動を通して自分自身がスポーツを楽しめている」と認識するスポーツボランティア（笹川スポーツ財団，2015）や、「プレイする」と「ささえる」という行為が分離しない「競技参加型ボランティア」（山崎・植田，2021）は、「するスポーツ」とスポーツを「ささえる」活動の境界が曖昧である。また、Jリーグクラブが設置したボランティア団体が、試合終了後に清掃活動をおこなうこともあり（笹川スポーツ財団，2020b）、「みるスポーツ」に動機づけられたスポーツ観戦者が、観戦後に「ささえる」活動をおこなっているケースも考えられる。

また、研究1-3では、活動形態別の比較をおこなう目的から、活動形態について「その他、わからない」と回答した調査対象者のデータを分析から除いている。この結果、

依頼を受けボランティアと認識せずに活動している無自覚ボランティア（笹川スポーツ財団，2019）が除外されている可能性がある。今後，スポーツを「する・みる・ささえる」活動を複数おこなっている活動者や，自身の活動を認識していない活動者を調査対象に含めるために，活動継続に至った経緯や，具体的な活動内容を調査し，関与の程度や動機づけによって対象者を分類するといった工夫が求められる。

2. 追調査による回答の信頼性の検証

研究 1-1 における課題として，2020 年以降の新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う運動・スポーツ活動の自粛や制限を受け，分析対象者に離脱者を含んでいることが挙げられる。この結果，過去の経験を想起する際に経験を肯定的に評価するポジティブ・バイアスが，活動の認識に影響した可能性がある（関口，2016）。今後，調査対象者を活動継続者に限定した追調査をおこない，結果の信頼性を高める必要がある。

同様に，研究 1-2 における課題として，出現率の低いスポーツを「ささえる」活動を継続する若年層のデータを収集する目的から，活動頻度や活動期間をもとにした有意抽出法を採用したこと，サンプル数が少ないことによる一般化の限界が挙げられる（桜井，2002）。また，従来の対面式の調査では回答を得にくかった若年層の回答が期待できること，大規模調査が容易であることからオンライン調査をおこなったが，積極的で調査に慣れた回答者や報酬目当ての回答者による回答の質が問題視されている（安藤ほか，2017）。今後，対面調査を含めた追調査によって結果の信頼性を高める必要がある。

3. モデルの改良と拡張

研究 1-3 における課題として、仮説モデルの改良方法とモデルの適合度がやや低かったことが挙げられる。本研究では、先行研究（Berki et al., 2020 ; Scanlan et al., 2016）において因子間の誤差共分散が仮定されていないこと、モデルの適合度を高めるために項目を削除することによる一般化可能性の問題（南風原, 2002）から、モデルの改善方法として古典的な尺度の合計得点を用いた分析をおこなった。しかし、因子間の誤差共分散があった場合に過大推定の可能性があること（狩野, 2002）から、誤差共分散の導入や因子複数に分割して合計得点を使用する下位尺度化（狩野, 2002）や、パスの追加・削除によるモデルの検証が必要である。また、異なるサンプルを対象とした研究をおこない、モデルの信頼性を高める必要がある。加えて、運動・スポーツ活動の楽しさと継続的な参加行動の直接的な関係を示す先行研究（原田ほか, 2019）にもとづき、スポーツを「ささえる」活動の楽しさから活動頻度へのパスを想定し、間接効果と直接効果を算出する媒介分析をおこなうことで、モデルの発展に寄与する可能性がある。

次に、継続要因が楽しさに限定されており、女性やボランティアにおいてモデルが適合しない、楽しさの間接効果が小さいという課題が残された。複数の継続要因や活動頻度を阻害する外的要因を加えたモデルの拡張をおこない、モデルの適合度や各要因の予測力を相対的に検証する必要がある。最後に、本研究では、運動・スポーツ活動の行動プロセスを示す SCM を援用した。今後、「ささえる」対象をどのように認識するか、

活動を通して「ささえる」対象がどのように反応したか、といった観点を含む、向社会的行動（e.g., 菊池, 2014）や援助行動（e.g., 高木, 1997）のモデルを援用し、独自のモデルを作成することも、スポーツを「ささえる」活動の行動プロセスの解明のために必要である。

4. 質問項目の明確化と調査対象者の拡大

研究 2-1 における課題として、質問項目が曖昧であったことから、大学生がスポーツをおこなう楽しさの要素を回答した可能性がある。今後、質問項目を明確化し、他の調査対象者に再調査をおこなうことで、結果の妥当性を高めることができる。また、得られた結果をもとに、楽しさの要素を測定する調査尺度を作成し、関連尺度との関係を確認する必要がある。

また、研究 2-1 では、単一の地域スポーツ教室の指導・運営・補助的活動に、スポーツボランティアやアルバイトとして従事した大学生を対象としている。この結果、本研究で抽出された楽しさの要素は、限定的な内容であった。今後、運動部活動の顧問やスポーツクラブの指導者や運営者など、異なるスポーツ環境における楽しさの要素を調査する必要がある。加えて、対象とした地域スポーツ教室は、その都度、指導・運営を担当する大学生が招集されることから、地域規模のイベントボランティアに該当する（笹川スポーツ財団, 2015）。今後、日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続者から楽しさの要素を抽出し、本研究結果と比較することで、活動内容による楽しさの要素の特

性を明確にできると考える。

さらに、研究 2-1 では、スポーツを「ささえる」活動をおこなう大学生から多数の回答を得ることを目的とし、調査対象者を選定していない。その結果、金銭的報酬を得る、ゼミや授業の一環で指導や運営に関与した大学生が混在しており、運動部活動やスポーツクラブにおける専門的指導者やスポーツボランティアと楽しさの要素が異なる可能性が推測される。今後、異なる活動形態や活動内容で活動する若年層を対象に楽しさの要素を抽出することで、日常的なスポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を網羅的に明らかにすることができると考える。

5. 尺度化と予測力の検討

研究 2-2 における課題として、ライフステージ、性別、活動形態別にスポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素と継続意志・行動の相関関係を確認したが、楽しさの要素の予測力が確認できていない。また、個人属性と活動形態別に分析をおこなったため、これらの要因が継続意志・行動に与える影響が明らかになっていない。今後、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を測定する尺度を作成し、スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素や、性別、ライフステージ、活動形態を独立変数、継続意志を目的変数とした重回帰分析をおこなう必要がある。

また、社会人、男性、就業者が強制的コミットメントを低下させる要素が含まれていなかった可能性がある。これらの属性や就業形態で活動を継続する若年層を対象に、義

務感・強制感と関係するスポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素を調査し、個人属性と活動形態によるニーズを明らかにすることで、継続につながる支援策を検討する際に有益な知見が得られると考える。

6. 生涯スポーツの視点を踏まえた縦断的調査

研究 1-3 では、一過性の横断的調査をおこなった。今後は、継続と離脱、再開といった、時系列に沿った楽しさや継続意志・行動の変化を検証するために、複数年にわたる縦断的な調査をおこなう必要がある。例えば、運動部活動に所属する大学生は、運動・スポーツ活動の活動頻度が高く、情熱的コミットメントが高いにも関わらず、スポーツを「ささえる」活動の活動頻度が低い可能性がある。この場合、競技スポーツの引退後にスポーツを「ささえる」活動の実施頻度が高まる可能性がある。今後、大学在学中・卒業後の動向を追跡することで、スポーツを「ささえる」活動を含めたスポーツキャリアの移行を明らかにできると考える。

また、研究 2-1 では、一過性の参加者と継続参加者、過去に複数年にわたって当該スポーツ教室への参加経験がある者などを含んでいた。今後、継続経験による楽しさの要素を比較することで、長期的な活動継続によって認識される楽しさの要素を明らかにすることができる。さらに、複数年にわたる縦断的な調査をおこなうことで、ライフステージの移行に伴う楽しさの要素の変化や推移を明らかにすることができる。

生涯スポーツは、「生涯にわたる各ライフステージにおいて、生活の質（QOL）が向

上するために自分自身のライフスタイルに適した運動・スポーツを継続して楽しむこと」と定義される（野川，2018；山口，1989）。これまで，生涯スポーツの研究対象は，「するスポーツ」を促進するための科学的根拠や政策提言が中心であった（岡安ほか，2021）。生涯スポーツという観点から縦断的調査をおこない，スポーツを「ささえる」活動を楽しんで継続できる環境であるか，楽しさを感じるために何が必要かを検証し続けることは，スポーツを「ささえる」人々を支援することにつながると考える。

引用文献

Ajzen, I. (1991) The Theory of Planned Behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50(2): 179-211.

尼崎光洋・煙山千尋・上野雄己・雨宮怜 (2018) 日本人における Kasari の身体活動指標
修正版の信頼性と妥当性—多世代の調査から—. *地域政策学ジャーナル*, 7(2): 97-108.

安藤清志・村田光二・沼崎誠 (2017) 社会心理学研究入門 [補訂新版] . 東京大学出版
会 : 東京, pp.194-195.

青柳健隆・石井香織・柴田愛・荒井弘和・日比千里・岡浩一郎 (2013) 外部指導者の部
活動への関与を推進する効果的な方策の検討. *SSF スポーツ政策研究*, 2(1): 252-259.

朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢 (2005) 入門 共分散構造分析の実際. 講談社 : 東京,
pp.120-122.

Berki, T., Pikó, B. F. and Page, R. M. (2020) Hungarian Adaptation of the Sport
Commitment Questionnaire-2 and Test of an Expanded Model with Psychological
Variables. *Physical Culture and Sport. Studies and Research*, 86: 15-26.

Brickman, P. (1987) *Commitment, Conflict, and Caring*. Prentice-Hall.

Brislin, R. W. (1970) Back-Translation for Cross-Cultural Research, *Journal of Cross-
Cultural Psychology*, 1(3): 185-216.

Carpenter, P. J., Scanlan, T. K., Simons, J. P., and Lobel M. (1993) A Test of the Sport
Commitment Model Using Structural Equation Modeling. *Journal of Sport & Exercise*

Psychology, 15: 119-133.

Casper, J. M., Gray, C. D., and Stellino, M. B. (2007) A Sport Commitment Model Perspective on Adult Tennis Players' Participation Frequency and Purchase Intention. Sport Management Review, 10(3): 253-278.

チクセントミハイ・M 著：今村浩明訳 (2000) 楽しみの社会学. 新思索社：東京, pp.35-39.

Cuskelly, G., and Hoye, R. (2013) Sports officials' intention to continue. Sport Management Review, 16 (4), 451-464.

長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2)：ボランティアの継続意欲の視点から. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 6: 69-75.

Engelberg, T., Skinner, J., Zakus, D. H. (2011) Exploring the relationship between commitment, experience, and self-assessed performance in youth sport organizations. Sport Management Review, 14(2): 117-125.

藤田紀昭・齊藤まゆみ・清水諭・友添秀則 (2013) 障がい者のスポーツ：その課題と可能性. 現代スポーツ評論, 29: 18-37.

南風原朝和 (2002) モデル適合度の目標適合度—観測変数の数を減らすことの是非を中心に—. 行動計量学, 29(2): 160-166.

萩原悟一・磯貝浩久 (2014) 競技スポーツにおけるコミットメントの検討—日本語版スポーツコミットメント尺度の作成—. スポーツ心理学研究, 41(2): 131-142.

Hagiwara, G. (2017) Relationship between Sport Participation Behavior and the Two Types of Sport Commitment of Japanese Student Athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 17(4): 2412-2416.

原田和弘 (2013) 身体活動の促進に関する心理学研究の動向：行動変容のメカニズム，
動機づけによる差異，環境要因の役割. *運動疫学研究*, 15(1): 8-16.

原田和弘・村上晴香・宮地元彦・近藤徳彦 (2019) 運動に関する感情経験，態度，および行動意図尺度の作成と運動行動との関連性の検討. *体力科学*, 68(2): 105-116.

原田勉 (2022) PDCA から OODA ループへ：マネジメントの進化を図る. *商工金融*, 72(2), 4-18.

平野真理・綾城初穂・能登眸・今泉加奈江 (2018) 投影法から見るレジリエンスの多様性：回復への志向性という観点. *質的心理学研究*, 17: 43-64.

久崎孝浩・石山貴章 (2012) スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響：その研究動向と今後の方向性. *応用障害心理学研究*, 11: 45-67.

檜皮貴子・三浦慎平・古川綾乃 (2019) 「支える」立場からスポーツ参画人口の拡大を考える：新潟市スポーツ推進委員へのアンケート調査をもとに. *新潟大学教育学部研究紀要人文・社会科学編*, 12(1): 77-83.

本多敏明 (2021) 身近な障害者の存在とパラスポーツ接触(する，みる，支える)の関連：インターネット調査報告. *淑徳大学研究紀要*, 55: 101-120.

堀田亮・藤原大樹・谷本英彰 (2012) 高齢者のスポーツボランティア行動の予測と心理的恩恵に関する研究—「健康的な」まちづくりを目指して—. *笹川スポーツ研究助成研*

究成果報告書, 168-177.

IBM Support (2018) ノンパラメトリック検定で中央値と 4 分位の出力方法.

<https://www.ibm.com/support/pages/statistics%E3%80%80%E3%83%8E%E3%83%B3%E3%83%91%E3%83%A9%E3%83%A1%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%83%E3%82%AF%E6%A4%9C%E5%AE%9A%E3%81%A7%E4%B8%AD%E5%A4%AE%E5%80%A4%E3%81%A8%E5%88%86%E4%BD%8D%E3%81%AE%E5%87%BA%E5%8A%9B%E6%96%B9%E6%B3%95> (参照日 2023 年 5 月 25 日)

IBM (2021) IBM SPSS Statistics 28 Documentation, p.119.

井出 (田村) 志穂 (2019) 子育て支援における有償ボランティアの意識—ファミリー・サポート・センター事業を事例として—. 日本学習社会学会年報, 16: 99-107.

稲葉慎太郎・山口泰雄 (2009) 2002FIFA ワールドカップのボランティアにおけるマッチングと活動評価に関する研究. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2): 93-102.

石黒えみ (2019) 国内スポーツ指導者の実態—インターネット調査結果から—. ホスピタリティ・マネジメント, 9(1): 1-12.

Jeon, J. H. and Ridinger, L. L. (2009) An examination of sport commitment of windsurfers. Journal of sport behavior, 32(3): 325-338.

順天堂大学マルチサポート事業 (2013) 女性アスリート戦略的強化支援方策レポート～本編～. https://research-center.juntendo.ac.jp/jcrws/research-products/coaching/strengthening_support_report/ (参照日 2024 年 5 月 8 日).

株式会社マイナビ (2023) 大学生のアルバイト調査 (2023 年) .

https://career-research.mynavi.jp/wp-content/uploads/2023/04/2023_daigaku-baito-1.pdf (参照日 2024 年 5 月 30 日)

梶将徳・小野雄大 (2020) 小学校の体育授業における楽しさ尺度の開発：小学校高学年児童を対象として. スポーツ教育学研究, 40(2): 1-16.

金谷麻理子 (2015) 女性競技者の抱える問題, 女性指導者増加のための具体的方策. 体育学研究, 60(Report) : 1-11.

金崎良三 (1992) スポーツ・コミットメントの形成とスポーツ参与に関する研究 (1) —スポーツにおける友人関係によるコミットメント尺度作成の試み—. 健康科学, 14: 35-42.

金崎良三 (2000) 生涯スポーツの理論. 不昧堂出版：東京, p.63.

狩野裕 (2002) 再討論：誤差共分散の利用と特殊因子の役割. 行動計量学, 29(2): 182-197.

菊池章夫 (2014) さらに／思いやりを科学する：向社会的行動と社会的スキル. 川島書店：東京, pp.7-8.

北村尚浩・松本耕二・國本明德・仲野隆士 (2005) スポーツ・ボランティアの組織コミットメント. 体育学研究, 50(1): 7-57.

金ウンビ・伊東明宏・中塚健太郎・坂入洋右 (2014) 音楽と身体接触を活用した運動が心理状態と対人関係に及ぼす効果. スポーツ心理学研究, 41(1): 19-34.

清宮孝文・門屋貴久・依田充代・阿部征大 (2020) スポーツボランティアに対する認識

と参加意欲の関係性：体育系大学生に着目して. 運動とスポーツの科学, 26(1): 1-14.

清宮孝文・依田充代 (2021) 大学生のスポーツボランティアに対するイメージが参加意欲に与える影響. スポーツ産業学研究, 31(4): 381-397.

清宮孝文・依田充代・門屋貴久・阿部征大 (2021) 体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの類型化：スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴に着目して. 日本体育大学紀要, 50: 1019-1029.

児嶋恵伍・伊藤央二 (2019) レジャー参加パターン間におけるマスターズ大会参加者の大会参加へののめり込み度と相互協調的幸福感の関連性について：オンライン調査を用いた事例研究. 生涯スポーツ学研究, 16(1): 11-20.

国立青少年教育振興機構 (2020) 大学生のボランティア活動等に関する調査.

<https://koueki.net/user/niye/110361383-1.pdf> (参照日 2024 年 2 月 26 日)

厚生労働省 (2023) 健康日本 21 (第三次) .

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kenkounippou21_00006.html (参照日 2024 年 2 月 16 日)

蔵本健太・菊池秀夫 (2006) 大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究—体育系運動部とスポーツサークル活動参加者の比較—. 中央大学体育学論叢, 47(1): 37-48.

松本耕二 (1999) スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究—障害者スポーツイベントのボランティアに着目して—. 山口県立大学社会福祉学部紀要, 5: 11-19.

松本耕二・北村尚浩・國本明德・仲野隆士 (2004) スポーツ・ボランティアの参加動機, 組織コミットメントと継続意欲—地域の障害者スポーツ団体を支えるボランティア—.

山口県体育学研究, 47: 13-22.

松本耕二・田引俊和 (2009) 障がい者スポーツをささえるボランティアからみた知的障がい者のイメージと日常生活における意識・態度. 山口県立大学学術情報, 2: 27-38.

Meyer, J. P., Stanley, D. J., Herscovitch, L. and Topolnytsky, L. (2002) Affective, Continuance, and Normative Commitment to the Organization: A Meta-analysis of Antecedents, Correlates, and Consequences. *Journal of Vocational Behavior*, 61(1): 20-52.

三倉茜・小笠原悦子 (2021) 女性バスケットボール選手におけるコーチ興味を高める学習経験：トップレベルの女性アスリートを対象として. 体育学研究, 66: 293-309.

水落文夫・渡部悟 (2019) 運動・スポーツ活動の継続を規定する心理的要因の性と年齢による違い(その2)SEMによる心理的モデルの検証. 総合文化研究, 24(1-3): 111-136.

湊道子 (2011) ボランティア精神と宗教思想—ボランティア教育への提言—. 実践女子短期大学紀要, 32: 25-47.

文部科学省 (2007) 諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究報告書.

https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/07101511.htm (参照日 2022 年 2 月 22 日)

文部科学省 (2022) 第 3 期スポーツ基本計画. https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf (参照日 2023 年 9 月 13 日)

元嶋菜美香・相羽枝莉子・宮良俊行 (2023) 若年層における日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続要因の探索的検討. 健康科学, 45: 35-44.

中原雄一・砂原里南・高橋楓（2020）ラグビーワールドカップ 2019 日本大会を通した

「ささえる」スポーツの事例. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 28(2): 111-122.

中澤篤史（2011）なぜ教師は運動部活動へ積極的にかかわり続けるのか：指導上の困難

に対する意味づけ方に関する社会学的研究. 体育学研究, 56: 373-390.

中澤篤史（2012）学校運動部活動への教師のかかわりに関する記述的研究—消極的な顧問

教師が離脱しない／できない理由と文脈の考察—. 一橋大学スポーツ研究, 31: 29-38.

日本スポーツ協会・笹川スポーツ財団（2019）競技大会を支える人材とその活用状況に

関する調査 報告書. <https://www.japansports.or.jp/Portals/0/data/somu/>

news/201910_Survey_report_on_human_resources_and_activities_supporting_the_c

ompetition.pdf（参照日 2024 年 2 月 5 日）

日本スポーツ協会（2021）学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書.

https://www.japansports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/R3_houkokusho

.pdf（参照日 2024 年 2 月 22 日）

日本スポーツ協会（2023）女性スポーツ委員会アクションプラン 2023-2027.

<https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/kokunai/women/ActionPlan2023->

2027.pdf（参照日 2024 年 6 月 29 日）

日本スポーツ協会（online）公認スポーツ指導者マッチング 利用マニュアル ver.1.3.

<https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/>

doc/matching_manual.pdf（参照日 2024 年 7 月 5 日）

日本レクリエーション協会（2013）スポーツによる元気な若者社会を創るために：平成

24 年度ライフステージに応じたスポーツ活動の推進のための調査研究報告書.

[https://recreation.or.jp/WP_ORJP/wpcontent/uploads/2021/11/lifestage_2013_1.p](https://recreation.or.jp/WP_ORJP/wpcontent/uploads/2021/11/lifestage_2013_1.pdf)

df (参照日 2024 年 2 月 13 日)

二宮雅也 (2020) スポーツボランティアと大学教育. 国立青少年教育振興機構編, 大学生のボランティア活動等に関する調査.

<https://koueki.net/user/niye/110361383-12.pdf> (参照日 2022 年 11 月 27 日)

西村貴之・池田幸應 (2020) 「支えるスポーツ」からみる持続可能なスポーツイベント: 金沢マラソン 2019 の応援スポット運営関係者への調査から. 金沢星稜大学人間科学研究, 14(1): 35-42.

野川春夫 (2018) 生涯スポーツの歴史と定義. 川西正志・野川春夫編著, 生涯スポーツ実践論—生涯スポーツを学ぶ人たちに—. 市村出版: 東京, p.4.

大橋恵・井梅由美子・藤後悦子・川田裕次郎 (2016) 地域スポーツのコーチのやりがいと困難の内容—尺度の作成を目指して—. 東京未来大学保育・教職センター紀要, 3: 19-28.

大橋恵・井梅由美子・藤後悦子 (2020) 地域スポーツにおいてボランティアを行う保護者の負担感—負担感とチーム内仕事量の間を調整する要因に関する探索的検討—. 東京未来大学研究紀要, 14: 19-28.

大橋恵・ターン有加里ジェシカ・藤後悦子・井梅由美子 (2022) 地域スポーツでの母親のボランティア継続意図—ハラスメントと公正感受性の影響—. 心理学研究, 93(1): 10-20.

岡安功・松本耕二・渡辺泰弘（2021）生涯スポーツ論の研究動向：日本生涯スポーツ学会の学術論文と学会大会から. 生涯スポーツ学会研究, 18(1): 45-53.

小塩真司（2011）SPSS と Amos による心理・調査データ解析〔第 2 版〕—因子分析・共分散構造分析まで. 東京図書出版：東京, p.34.

小塩真司（2012）事例研究で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析. 東京図書出版：東京, p.180, 212-218.

大石繁宏・小宮あすか（2012）幸せの文化比較は可能か?. 心理学評論, 55(1): 6-21.

奥村太一・森慶輔・宮下敏恵・西村昭徳・北島正人（2015）日本版 MBI-ES の作成と信頼性・妥当性の検証. 心理学実験, 86(4): 323-332.

大山祐太・増田貴人・安藤房治（2011）知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアに対する保護者の意識. 弘前大学教育学部紀要, 106: 23-30.

大山祐太・増田貴人・安藤房治（2012）知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアの継続参加プロセス—スペシャルオリンピックス日本・青森の事例から—. 障害者スポーツ科学, 10(1): 35-44.

押見大地・原田宗彦（2010）スポーツ観戦における感動場面尺度. スポーツマネジメント研究, 2: 163-178.

尾崎幸謙・鈴木貴士（2019）機械学習による不適切回答者の予測. 行動計量学, 46(2): 39-52.

Prochaska, J. O., Diclemente, C. C. and Norcross, J. C. (1992) In search of how people change. Applications to addictive behaviors. American Psychologist, 47: 1102-1114.

労働政策研究・研修機構（2006）労働政策研究報告書 No.60 NPO の有給職員とボランティア－その働き方と意識－.

<https://www.jil.go.jp/institute/reports/2006/060.html>（参照日 2022 年 9 月 5 日）

作野誠一（2011）学校運動部のジレンマスポーツクラブとの共存は可能か－. 現代スポーツ評論, 24: 63-75.

桜井政成（2002）複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析－京都市域のボランティアを対象とした調査より－. ノンプロフィット・レビュー, 2(2): 111-122.

桜井政成（2005）ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異. ノンプロフィット・レビュー, 5(2): 103-113.

猿渡壮（2017）ボランティア参加の階層的基盤. ソシオロジ, 62(1): 41-59.

笹川スポーツ財団（2015）スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究（スポーツにおけるボランティア活動を実施する個人に関する調査研究）報告書.

https://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/2014_report_22.pdf

（参照日 2022 年 11 月 28 日）

笹川スポーツ財団（2019）スポーツボランティアに関する調査 2019.

https://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/report_volunteer2019_all.pdf（参照日 2022 年 11 月 28 日）

笹川スポーツ財団（2020a）スポーツライフ・データ 2020. 笹川スポーツ財団：東京, pp.12, 76-79.

笹川スポーツ財団 (2020b) J リーグクラブのボランティアに関する調査.

https://www.ssf.or.jp/files/Jleague_volunteer2020.pdf(参照日 2024 年 7 月 6 日)

笹川スポーツ財団 (2021) 子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2021—4~21 歳のスポーツライフに関する調査報告書一. 笹川スポーツ財団：東京, pp.135-141.

笹川スポーツ財団 (2022) スポーツライフ・データ 2022. 笹川スポーツ財団：東京, pp.12, 112- 115, 197-198.

佐藤みほ・朝倉京子・渡邊生恵・下條祐也 (2015a) 日本語版職業コミットメント尺度の信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌, 35: 63-71.

佐藤晋太郎・押見大地・原田宗彦・佐藤幹寛・朝倉雅史・高鏞在 (2015b) スポーツ消費者の観戦目的特性と最終目的達成が満足度と幸せに与える影響. スポーツ科学研究, 12: 101-120.

Scanlan, T. K., and Simons, J. P. (1992) The construct of sport enjoyment. In G.C. Roberts (Ed.), Motivation in sport and exercise. Champaign, IL: Human Kinetics. pp. 199-215.

Scanlan, T. K., Carpenter, P. J., Schmidt, G. W., Simons, J. P. and Keeler, B. (1993a) An Introduction to the Sports Commitment Model. Journal of Sport & Exercise Psychology, 15(1): 1-15.

Scanlan, T. K., Carpenter, P. J., Simons, J. P., Schmidt, G. W. and Keeler, B. (1993b) The sport commitment model: measurement development for the youth-sport domain. Journal of Sport and Exercise Psychology, 15(1): 16-38.

Scanlan, T. K., Chow, G. M., Sousa, C., Scanlan, L. A., & Knifsend, C. A. (2016) The development of the Sport Commitment Questionnaire-2 (English version).

Psychology of Sport and Exercise, 22: 233-246.

関口理久子 (2016) 情動的な自伝的記憶の想起と再構成についての検討. 関西大学心理学研究, 7: 7-16.

妹尾香織 (2001) 援助行動における援助者の心理的效果—研究の社会的背景と理論的枠組み—. 関西大学大学院人間科学, 55: 181-194.

妹尾香織 (2008) 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学社会福祉学部紀要, 16: 35-42.

妹尾香織・高木修 (2003) 援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果. 社会心理学研究, 18(2): 106-118.

志賀真珠美・荒井弘和 (2013) スペシャルオリンピックスのボランティアコーチの活動に関連する要因. スポーツ産業学研究, 23(2): 241-247.

シンガー, R. N., ハウゼンブラス, H. A., ジャネル, K. M. 編：山崎勝男監訳 (2013) スポーツ心理学大事典, 西村書店：東京, pp.535-554.

総務省統計局 (2022) 令和 3 年社会生活基本調査の結果 生活時間及び生活行動に関する結果. <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?tclass=000001146157&cycle=0>

(参照日 2024 年 7 月 9 日)

スポーツ庁 (2018a) 平成 29 年度運動部活動等に関する実態調査報告書.

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/__icsFiles/afi

eldfile/2018/06/12/1403173_2.pdf（参照日 2022 年 11 月 28 日）

スポーツ庁（2018b）女性スポーツの促進方策.

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop11/list/__icsFiles/afieldfile/2018/11/07/1410705_1_1.pdf（参照日 2024 年 7 月 7 日）

スポーツ庁（2021）スポーツキャリアサポート支援事業におけるスポーツ人材の効果的な活用のための基礎的調査研究 報告書. [https://www.mext.go.jp/sports/](https://www.mext.go.jp/sports/content/20240522-spt_sposeisy-000013625_1.pdf)

[content/20240522-spt_sposeisy-000013625_1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/20240522-spt_sposeisy-000013625_1.pdf)（参照日 2023 年 7 月 10 日）

スポーツ庁（2022a）運動部活動の地域移行に関する検討会議提言―少子化の中、将来にわたり我が国の子供たちがスポーツに継続して親しむことができる機会の確保に向けて―. https://www.mext.go.jp/sports/content/20220722-spt_oripara-000023182_2.pdf（参照日 2022 年 9 月 5 日）

スポーツ庁（2022b）令和 3 年度総合型地域スポーツクラブ育成状況調査.

https://www.mext.go.jp/sports/content/20220524-spt_stiiki-300000800_3.pdf（参照日 2022 年 9 月 2 日）

スポーツ庁（2022c）運動部活動の地域移行について. [https://www.mext.go.jp/](https://www.mext.go.jp/content/20220727-mxt_kyoiku02-000023590_2-1.pdf)

[content/20220727-mxt_kyoiku02-000023590_2-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220727-mxt_kyoiku02-000023590_2-1.pdf)（参照日 2024 年 4 月 5 日）

スポーツ庁（2023）令和 4 年度スポーツの実施状況等に関する世論調査.

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/sports/1415963_00008.htm（参照日 2023 年 7 月 25 日）

スポーツ庁（2024a）部活動の地域連携・地域クラブ活動への移行と地域スポーツ環境

の整備に関する最近の動向. https://www.mext.go.jp/sports/content/20240207-spt_ori para-000028263_001.pdf (参照日 2024 年 7 月 7 日)

スポーツ庁 (2024b) 令和 5 年度スポーツの実施状況等に関する世論調査.

https://www.mext.go.jp/sports/content/20240327-kensport01-000034690_5-5.pdf

(参照日 2024 年 5 月 30 日)

スポーツ庁・文化庁 (2023) 学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン. https://www.mext.go.jp/sports/content/20221227-spt_ori para-000026750_2.pdf (参照日 2024 年 2 月 12 日)

spt_ori para-000026750_2.pdf (参照日 2024 年 2 月 12 日)

田部井明美 (2001) SPSS 完全活用法 共分散構造分析 (Amos) によるアンケート処理. 東京図書株式会社: 東京, pp.141-147.

田引俊和 (2008) 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究. 医療福祉研究, 4: 98-107.

高橋伸次 (2001) スポーツにおけるボランティア指導者の実態とその課題—これからのスポーツ振興の政策課題として—. 地域政策研究, 3(3): 23-45.

高木修 (1997) 援助行動の生起過程に関するモデルの提案. 関西大学社会学部紀要, 29: 1-21.

田中博晃 (2013) KJ 法クイックマニュアル. 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会 2012 年度報告論集, 102-106.

谷藤千香 (2018) 生涯スポーツ社会の実現に向けたスポーツ参画人口の拡大—「ささえ」活動に着目して—. 千葉大学国際教養学研究, 2: 1-93.

徳永幹雄・橋本公雄（1980）体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究. 健康科学, 2: 75-90.

富山浩三（2003）スポーツを通じた大学の地域貢献プログラムの開発：「教員」「学生」「地域住民」のネットワークシステムの構築. 体育・スポーツ教育研究, 4: 5-11.

豊田秀樹（2003a）共分散構造分析〔疑問編〕－構造方程式モデリング－. 東京図書株式会社：東京, pp.74-75, 122-125, 161-162.

豊田秀樹（2003b）共分散構造分析〔技術編〕－構造方程式モデリング－. 朝倉書店：東京, pp.54,-55 110-115.

豊田秀樹（2007）共分散構造分析〔Amos 編〕－構造方程式モデリング－. 東京図書株式会社：東京, pp.67, 74-83, 120-125.

内田良・上地香杜・加藤一晃・野村駿・太田知彩（2018）調査報告 学校の部活動と働き方改革－教師の意識と実態から考える－. 岩波書店：東京, pp.17-21, 60-62.

梅本貴豊・田中健史朗（2015）動機づけ調整方略と学習行動の関連：学習意欲の低下理由を考慮した検討. 日本教育工学会論文誌, 38(4): 385-932.

Vanyperen, N. W. (1998) Predicting Stay/Leave Behavior Among Volleyball Referees. Sport Psychologist, 12(4): 427-439.

和田尚（1988）スポーツの楽しさに関する考へる立場からの分析－. 京都体育学研究, 3: 1-10.

Wankel, L. M. (1993) The importance of enjoyment to adherence and psychological benefits from physical activity. International Journal of Sport Psychology, 24(2): 151-

169.

Weiss, M. R., Kimmel, L. A., and Smith, A. L. (2001) Determinants of sport commitment among junior tennis players: Enjoyment as a mediating variable. *Pediatric Exercise Science*, 13(2): 131-144.

Weiss, W. M. and Weiss, M. R. (2007) Sports commitment among competitive female gymnasts : A developmental perspective. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 78(1): 90-102.

Weiss, M. R. and Amorose, A. J. (2008) Motivational orientations and sport behavior. In T.S. Horn (Ed.) *Advances in sport psychology* (3rd ed), Champaign, IL: Human Kinetics. pp.115-155.

Weiss, W. M. and Aloe, A. M. (2019) Revisiting mediational models of sport commitment with female gymnasts. *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, 17(6): 600-616.

Wilson, P. M., Rodgers, W. M., Carpenter, P. J., Hall, C., Hardy, J., and Fraser, S. N. (2004) The relationship between commitment and exercise behavior. *Psychology of Sport and Exercise*, 5(4): 405-421.

八尋風太・萩原悟一 (2019) スポーツ指導者のアイデンティティーに関する研究：尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *運動とスポーツの科学*, 25(1): 35-41.

山口泰雄 (1989) 生涯スポーツの理論とプログラム. 鹿屋体育大学：鹿児島, pp.1-14.

山口志郎・Sheranne Fairley・伊藤 央二 (2016) 日本におけるスポーツボランティアの

概念化に関する質的研究—スポーツボランティア文化の構築に向けて—, 笹川スポーツ
研究助成研究成果報告書, 40-48.

山口志郎・松村浩貴・土肥隆・伊藤克広・船越達也 (2018) スポーツイベントボランテ
ィアの阻害要因：神戸マラソンにおける年齢，性別，および参加回数別による比較. 生
涯スポーツ学研究, 15(1): 25-38.

山本嘉一郎・小野寺孝義 (1999) Amos による共分散構造分析と解析事例. ナカニシヤ出
版：京都, pp.43-45, 207.

山崎貴史・植田俊 (2021) 障害者スポーツ・ボランティアに関する社会学的研究：スポ
ーツ実践者とボランティアの関わりに着目して. 北海道大学大学院教育学研究院紀要,
138: 427-440.

米澤美保子 (2010) ボランティア活動の継続要因. 関西福祉科学大学紀要, 14: 31-41.

吉田政幸・仲澤眞・井上尊寛・片上千恵・岩村聡 (2013) スポーツイベントにおける再
観戦行動：再観戦意図の先へ. スポーツマネジメント研究, 5 (1): 3-18.

吉村治正 (2020) ウェブ調査の結果はなぜ偏るのか—2つの実験的ウェブ調査から—. 社
会学評論, 71(1): 65-83.

資料

資料1 フェイスシートおよび運動・スポーツ活動の楽しさ尺度（研究1-1 調査用紙）

・フェイスシート

1. 大学名（ ） 1-2. 学籍番号（ ）

2. 年齢（ ）歳

3. 性別 ・男性 ・女性 ・その他（ ）

4. 学年 ・1年生 ・2年生 ・3年生 ・4年生 ・その他（ ）

5. 現在の運動・スポーツ活動・所属状況

・大学の運動・スポーツ系部活動に所属している（プレーをしていないマネージャー等は除く）

・大学の運動・スポーツ系サークル・同好会に所属している（プレーをしていないマネージャー等は除く）

・学外の運動・スポーツ団体（社会人クラブチーム）などに所属している（プレーをしていないマネージャー等は除く）

・大学内外のチームに所属していないが個人で運動・スポーツをしている

・現在は全く運動をしていないが、過去に運動・スポーツ活動を行っていた

・これまで全く運動を継続していない

6. 今現在、所属している部活動・サークル・同好会・社会人チーム、個人などで継続している運動・スポーツ種目（今現在、継続していない方は不要）（ ）

6-2. その運動・スポーツの継続期間（年）（今現在、継続していない方は不要）（ ）

7. 今現在、運動・スポーツ種目を継続していない場合、過去最も長く継続していた運動・スポーツ種目（6に回答した方は不要）（ ）

7-2. その運動・スポーツの継続期間（年）（6に回答した方は不要）（ ）

・運動・スポーツ状況

6-2 に書いた、今現在行っている運動・スポーツについて、新型コロナウイルスによる活動自粛以前の実施状況をお聞きます。

今現在運動・スポーツを継続していない人は、7-2 に書いた、過去に最も長く継続したスポーツに対して、継続時のことを想起して回答してください。

Q：どのくらいの頻度で、その運動・スポーツ活動をしていましたか？

今現在運動・スポーツを継続している方は、新型コロナウイルスによる活動自粛以前の状況を、今現在継続していない方は、継続時のことを想起してください。

- ・運動していない ・月1回程度 ・月2～3回 ・週1～2回 ・週3～4回
- ・ほぼ毎日

Q：どのくらいの強度で、その運動・スポーツ活動をしていましたか？

今現在運動・スポーツを継続している方は、新型コロナウイルスによる活動自粛以前の状況を、今現在継続していない方は、継続時のことを想起してください。

- ・運動していない ・きつくない運動 ・適度なきつさの運動
- ・かなりきつい運動 ・非常にきつい運動

Q：1回あたりどのくらいの運動時間で、その運動・スポーツ活動をしていましたか？

今現在運動・スポーツを継続している方は、新型コロナウイルスによる活動自粛以前の状況を、今現在継続していない方は、継続時のことを想起してください。

- ・運動していない ・20分未満 ・20～30分 ・30～60分
- ・60分～90分 ・90分以上

・運動・スポーツへの意識調査

6 に書いた、今現在行っている運動・スポーツについてお聞きます。

今現在運動・スポーツを継続していない人は、7 に書いた、過去に最も長く継続したスポーツに対して、継続時のことを想起して回答してください。

「全くそう思わない」から「かなりそう思う」の5つの選択肢から、あてはまる数字を一つ選択してください。

	全くそう 思わない	ややそう 思わない	どちらとも いえない	ややそう 思う	かなりそう 思う
1 このスポーツをすることはおもしろい	1	2	3	4	5
2 私はこのスポーツをすることを気に入っている	1	2	3	4	5
3 私はこのスポーツをすることがとても好きだ	1	2	3	4	5
4 このスポーツをすることでとても喜びを感じる	1	2	3	4	5
5 このスポーツをすることで幸せな気持ちになる	1	2	3	4	5
6 このスポーツをすることは楽しい	1	2	3	4	5
7 私はこのスポーツを続けていくつもりである	1	2	3	4	5
8 私はこのスポーツを続けるためにどんなことでも乗り越えるつもりだ	1	2	3	4	5
9 私はこのスポーツを続けると決心している	1	2	3	4	5
10 私はこのスポーツをできる限り長く続けたい	1	2	3	4	5
11 私はこのスポーツを続けるためにどんなことでもするつもりだ	1	2	3	4	5
12 私はこのスポーツにとっても愛着がある	1	2	3	4	5

・運動・スポーツへの意識調査

6 に書いた、今現在行っている運動・スポーツの「楽しさ」についてお聞きします。

今現在運動・スポーツを継続していない人は、7 に書いた、過去に最も長く継続したスポーツに対して、継続時のことを想起して回答してください。

「全くそう思わない」から「かなりそう思う」の 5 つの選択肢から、あてはまる数字を一つ選択してください。

	全くそう 思わない	ややそう 思わない	どちらとも いえない	ややそう 思う	かなりそう 思う
1 このスポーツは、努力すること自体が楽しい	1	2	3	4	5
2 このスポーツは、施設や器具がそろっている時楽しい	1	2	3	4	5
3 このスポーツは、自分の能力に合わせてできるので楽しい	1	2	3	4	5
4 このスポーツは、挑戦できるから楽しい	1	2	3	4	5
5 このスポーツは、協力し合い連帯感を持てるから楽しい	1	2	3	4	5
6 このスポーツは、自己表現ができるので楽しい	1	2	3	4	5
7 このスポーツは、ファッションがあるので楽しい	1	2	3	4	5
8 このスポーツは、ルールがあるから楽しい	1	2	3	4	5
9 このスポーツをすることで、日常から離れることができるから楽しい	1	2	3	4	5
10 このスポーツで、健康を増進できるから楽しい	1	2	3	4	5
11 このスポーツは、遊戯性があるから楽しい	1	2	3	4	5
12 このスポーツをしていて、調子がいいと感ずることがあるから楽しい	1	2	3	4	5
13 このスポーツは、勝負があるから楽しい	1	2	3	4	5
14 このスポーツは、身体を動かすこと自体が楽しい	1	2	3	4	5
15 このスポーツは、作戦をたてられるから楽しい	1	2	3	4	5

資料2 フェイスシートおよびスポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度
(研究1-2 調査用紙)

・(大学生対象者のみ) あなたの属性について、当てはまるものを選んでください。

Q：学年 ・1年生 ・2年生 ・3年生 ・4年生 ・その他

Q：年代 ・10代 ・20代 ・30代 ・40代以上

Q：性別 ・男性 ・女性 ・その他

・スポーツを「ささえる」活動(指導・運営・補助的活動などのスポーツ支援活動)の継続状況についてお聞きします。スポーツを「ささえる」活動は、就業・アルバイト・有償ボランティア・無償ボランティアなどがあります。

活動例)

- ・日常的なスポーツの指導、審判、団体・クラブの運営や世話、スポーツ施設の管理の手伝い、行事の準備や片付け、事務作業、練習や大会等で送迎、補助的活動など・スポーツ大会やスポーツイベントの審判、運営や世話、会場の準備や撤収、補助的活動など
- ・ご自身やご自身の子ども(家族)のためだけの活動は含みません

Q：上記のようなスポーツを「ささえる」活動を継続した経験がありますか？

ここでの継続とは、年に3回以上の活動を1年以上実施することとします。

- ・現在、継続している。
- ・過去に継続経験がある。
- ・継続した経験がない

Q：以下の質問に対して、1年以上継続されたスポーツを「ささえる」活動のうち、最も活動頻度が高い活動を想起して回答してください。

現在その活動を継続していない場合は、過去の継続状況を想起して回答してください。

そのスポーツを「ささえる」活動は、具体的にどのような内容ですか？

- ・【日常的な活動】スポーツの指導
- ・【日常的な活動】スポーツの審判
- ・【日常的な活動】団体・クラブの運営や世話
- ・【日常的な活動】スポーツ施設の管理の手伝い
- ・【日常的な活動】団体・クラブの練習・大会参加・運営のための補助的活動

- ・【地域のスポーツイベント】 スポーツの審判
- ・【地域のスポーツイベント】 大会・イベントの運営や世話
- ・【地域のスポーツイベント】 大会・イベントのための補助的活動
- ・【全国・国際的スポーツイベント】 スポーツの審判、大会・イベントの運営や世話、補助的活動
- ・その他、わからない

Q：どのような形態で、そのスポーツを「ささえる」活動をされていますか？

- ・企業や組織と雇用契約を結び、正職員として給与を受け取る労働（就業）
- ・アルバイト、パートなどの非正規職員
- ・謝金・弁当などの謝礼のあるボランティア
- ・謝礼のないボランティア
- ・その他、わからない

Q：どのくらいの期間、そのスポーツを「ささえる」活動を継続していますか？

- ・1年未満
- ・1-2年程度
- ・2-3年程度
- ・3-4年程度
- ・4-5年程度
- ・5-10年程度
- ・10年以上

Q：どのくらいの頻度で、そのスポーツを「ささえる」活動をしていますか？

- ・年数回程度
- ・月1回程度
- ・月2-3回
- ・週1-2回
- ・週3-4回
- ・ほぼ毎日

Q：スポーツを「ささえる」活動について、あなたの考えをお聞きます。現在その活動を継続していない場合は、継続時を想起して回答してください。

「全くそう思わない」から「かなりそう思う」の5つの選択肢から、あてはまる数字を一つ選択してください。

	全くそう 思わない	ややそう 思わない	どちらとも いえない	ややそう 思う	かなりそう 思う
1 このスポーツを「ささえる」活動することはおもしろい	1	2	3	4	5
2 私はこのスポーツを「ささえる」活動することを気に入っている	1	2	3	4	5
3 私はこのスポーツを「ささえる」活動することがとても好きだ	1	2	3	4	5
4 このスポーツを「ささえる」活動することですべて喜びを感じる	1	2	3	4	5
5 このスポーツを「ささえる」活動することは楽しい	1	2	3	4	5
6 私はこのスポーツを「ささえる」活動をしていくつもりである	1	2	3	4	5
7 私はこのスポーツを「ささえる」活動続けるためにどんなことでも乗り越えるつもりだ	1	2	3	4	5
8 私はこのスポーツを「ささえる」活動をしていくと決心している	1	2	3	4	5
9 私はこのスポーツを「ささえる」活動をできる限り長く続けたい	1	2	3	4	5
10 私はこのスポーツを「ささえる」活動続けるためにどんなことでもするつもりだ	1	2	3	4	5
11 私はこのスポーツを「ささえる」活動にとっても愛着がある	1	2	3	4	5
12 私がこのスポーツを「ささえる」活動をしているのは、自らが望んでいるというよりはむしろ、やむを得ずという感じである	1	2	3	4	5
13 私はこのスポーツを「ささえる」活動をやらざるを得ない感じである	1	2	3	4	5
14 私はこのスポーツを「ささえる」活動を辞めることを考えているにもかかわらず、続けていかなければならない	1	2	3	4	5
15 私はこのスポーツを「ささえる」活動を強制的に続けなければならない	1	2	3	4	5
16 私はこのスポーツを「ささえる」活動をやりたくないが、続けなければならない	1	2	3	4	5

資料3 フェイスシートおよびスポーツを「ささえる」活動の楽しさ尺度

(研究 1-3 調査用紙)

スクリーニング設問

スポーツを「ささえる」活動（指導・運営・補助的活動などのスポーツ支援活動）についてお聞きます。

・スポーツを「ささえる」活動は、スポーツの指導、審判、団体・クラブの運営や世話、スポーツ施設の管理の手伝い、団体・クラブの練習・大会参加・運営のための補助的活動、大会・イベントの運営や世話、大会・イベントのための補助的活動などです。

・スポーツを「ささえる」活動の形態は、就業・アルバイト・有償ボランティア・無償ボランティアなどがあります。

・ご自身やご自身の子ども（家族）のためだけの活動は含みません。

Q：あなたは、上記の活動を6か月以上継続した経験がありますか？

(大学生対象の選択肢)

・現在、継続している ・過去に継続経験がある ・継続した経験がない

(社会人対象の選択肢)

・現在、継続している ・現在は継続していないが、社会人になってから継続経験がある
・現在は継続していないが、高校生や大学生の頃に継続経験がある
・継続した経験がない

Q：そのスポーツを「ささえる」活動は、具体的にどのような内容ですか？

・現在、継続している方は、現在継続している活動のうち、最も頻度が高い活動を1つ思い浮かべて回答してください。

・過去に継続経験がある方は、継続時に最も活動頻度が高かった活動を1つ思い浮かべて回答してください。

・【日常的な活動】団体・クラブでのスポーツの指導、団体・クラブでのスポーツの審判、団体・クラブの運営や世話、スポーツ施設の管理の手伝い、団体・クラブの練習・大会参加・運営のための送迎や準備・片付け、事務作業などの補助的活動

・【地域のスポーツイベント】大会・イベントでのスポーツの審判、大会・イベントの運営や世話、大会・イベントのための準備や撤収、受付や案内などの補助的活動

・【全国・国際的スポーツイベント】大会・イベントでのスポーツの審判、大会・イベントの運営や世話、大会・イベントのための準備や撤収、受付や案内などの補助的活動

Q：どのくらいの期間、そのスポーツを「ささえる」活動を継続していますか？

・現在、継続している方は、現在継続している活動のうち、最も頻度が高い活動を 1 つ思い浮かべて回答してください。

・過去に継続経験がある方は、継続時に最も活動頻度が高かった活動を 1 つ思い浮かべて回答してください。

- ・ 6 か月未満 ・ 6 か月以上 1 年未満 ・ 1-2 年程度 ・ 2-3 年程度
- ・ 3-4 年程度 ・ 4-5 年程度 ・ 5 年以上

Q：どのくらいの頻度で、そのスポーツを「ささえる」活動を継続していますか？

・現在、継続している方は、現在継続している活動のうち、最も頻度が高い活動を 1 つ思い浮かべて回答してください。

・過去に継続経験がある方は、継続時に最も活動頻度が高かった活動を 1 つ思い浮かべて回答してください。

- ・ 年に数回程度 ・ 2 か月に 1 回程度 ・ 月 1 回程度 ・ 月 2-3 回程度
- ・ 週 1-2 回程度 ・ 週 3-4 回程度 ・ ほぼ毎日

Q：現在、どのような教育機関に所属していますか？

(大学生対象の選択肢)

- ・ 高等学校、高等専門学校 ・ 短期大学、専門学校 ・ 大学
- ・ 大学院 ・ その他、わからない

(社会人対象の選択肢)

- ・ 高等学校卒業（高校）、高等専門学校卒業（高専）
- ・ 短期大学卒業（短大）、専修学校卒業（専修・専門）
- ・ 大学卒業 ・ 大学院修了 ・ その他、わからない

本調査

・スクリーニング調査にて、日常的なスポーツを「ささえる」活動（指導・運営・補助的活動などのスポーツ支援活動）について、「現在、継続している」と回答された方を対象としています。

日常的なスポーツを「ささえる」活動（指導・運営・補助的活動などのスポーツ支援活動）についてお聞きます。

・日常的なスポーツを「ささえる」活動は、スポーツの指導、審判、団体・クラブの運営や世話、スポーツ施設の管理の手伝い、団体・クラブの練習・大会参加・運営のための補助的活動などです。

・スポーツを「ささえる」活動の形態は、就業・アルバイト・有償ボランティア・無償ボランティアなどがあります。

・ご自身やご自身の子ども（家族）のためだけの活動は含みません。

Q：あなたが継続しているスポーツを「ささえる」活動は、具体的にどのような内容ですか？

現在継続している活動のうち、最も頻度が高い活動を 1 つ思い浮かべて回答してください。

・【日常的な活動】団体・クラブでのスポーツの指導

・【日常的な活動】団体・クラブでの スポーツの審判

・【日常的な活動】団体・クラブの運営や世話

・【日常的な活動】スポーツ施設の管理の手伝い

・【日常的な活動】団体・クラブの練習・大会参加・運営のための送迎や準備・片付け、事務作業などの 補助的活動

・【日常的な活動】その他、わからない

・【地域・全国・国際的スポーツイベント】大会・イベントでのスポーツの審判、大会・イベントの運営や世話、大会・イベントのための準備や撤収、受付や案内など の補助的活動

・【地域・全国・国際的スポーツイベント】その他、わからない

Q：どのような形態で、そのスポーツを「ささえる」活動を継続していますか？

現在継続している活動のうち、最も頻度が高い活動を 1 つ思い浮かべて回答してください。

- ・企業や組織と雇用契約を結び、正職員として給与を受け取る労働（就業）
- ・アルバイト、パートなどの非正規職員
- ・謝金・弁当などの謝礼のあるボランティア
- ・謝礼のないボランティア
- ・その他、わからない

Q：あなたが継続しているスポーツを「ささえる」活動（指導・運営・補助的活動などのスポーツ支援活動）について、あなたの考えをお聞きます。

現在継続している活動のうち、最も頻度が高い活動を 1 つ思い浮かべて回答してください。

以下の質問に対して、「全くそう思わない」から「かなりそう思う」の5つの選択肢から、あてはまるものを1つ選択してください。

	全くそう 思わない	ややそう 思わない	どちらとも いえない	ややそう 思う	かなりそう 思う
1 このスポーツを「ささえる」活動をすることはおもしろい	1	2	3	4	5
2 私はこのスポーツを「ささえる」活動をすることを気に入っている	1	2	3	4	5
3 私はこのスポーツを「ささえる」活動をすることがとても好きだ	1	2	3	4	5
4 このスポーツを「ささえる」活動をすることでとても喜びを感じる	1	2	3	4	5
5 このスポーツを「ささえる」活動をするのは楽しい	1	2	3	4	5
6 私はこのスポーツを「ささえる」活動を続けていくつもりである	1	2	3	4	5
7 私はこのスポーツを「ささえる」活動を続けるためにどんなことでも乗り越えるつもりだ	1	2	3	4	5
8 私はこのスポーツを「ささえる」活動を続けていくと決心している	1	2	3	4	5
9 私はこのスポーツを「ささえる」活動をできる限り長く続けたい	1	2	3	4	5
10 私はこのスポーツを「ささえる」活動を続けるためにどんなことでもするつもりだ	1	2	3	4	5
11 私はこのスポーツを「ささえる」活動にとっても愛着がある	1	2	3	4	5
12 私がこのスポーツを「ささえる」活動を続けているのは、自らが望んでいるというよりはむしろ、やむを得ずという感じである	1	2	3	4	5
13 私はこのスポーツを「ささえる」活動をやらざるを得ない感じである	1	2	3	4	5
14 私はこのスポーツを「ささえる」活動を辞めることを考えているにもかかわらず、続けていかなければならない	1	2	3	4	5
15 私はこのスポーツを「ささえる」活動を強制的に続けなければならない	1	2	3	4	5
16 私はこのスポーツを「ささえる」活動をやりたくないが、続けなければならない	1	2	3	4	5

資料4 スポーツを「ささえる」活動の楽しさの要素（研究2-2 調査用紙）

Q：あなたが継続しているスポーツを「ささえる」活動（指導・運営・補助的活動などのスポーツ支援活動）について、あなたの考えをお聞きます。

現在継続している活動のうち、最も頻度が高い活動を1つ思い浮かべて回答してください。

以下の質問に対して、「全くそう思わない」から「かなりそう思う」の5つの選択肢から、あてはまるものを1つ選択してください。

	全くそう 思わない	ややそう 思わない	どちらとも いえない	ややそう 思う	かなりそう 思う
1 このスポーツを「ささえる」活動は、活動そのもの楽しい	1	2	3	4	5
2 このスポーツを「ささえる」活動は、コミュニケーションがとれるから楽しい	1	2	3	4	5
3 このスポーツを「ささえる」活動は、内容が工夫できるから楽しい	1	2	3	4	5
4 このスポーツを「ささえる」活動は、専門的な活動ができるから楽しい	1	2	3	4	5
5 このスポーツを「ささえる」活動は、専門以外の活動ができるから楽しい	1	2	3	4	5
6 このスポーツを「ささえる」活動は、子どもたちと交流できるから楽しい	1	2	3	4	5
7 このスポーツを「ささえる」活動は、大人と交流できるから楽しい	1	2	3	4	5
8 このスポーツを「ささえる」活動は、他の指導者やスタッフと活動できるから楽しい	1	2	3	4	5
9 このスポーツを「ささえる」活動は、参加者の成長が見られるから楽しい	1	2	3	4	5
10 このスポーツを「ささえる」活動は、参加者が楽しんでいる姿が見られるから楽しい	1	2	3	4	5
11 このスポーツを「ささえる」活動は、活動中の雰囲気が良いから楽しい	1	2	3	4	5
12 このスポーツを「ささえる」活動は、参加者の様々な感情が見られるから楽しい	1	2	3	4	5
13 このスポーツを「ささえる」活動は、参加者の笑顔が見られるから楽しい	1	2	3	4	5
14 このスポーツを「ささえる」活動は、スポーツの楽しさを普及できるから楽しい	1	2	3	4	5
15 このスポーツを「ささえる」活動は、自己成長を感じられるから楽しい	1	2	3	4	5

参考論文

1. 元嶋菜美香・杉山佳生（2022a）スポーツボランティアの参加・継続要因に関する研究動向：定義と活動実態との乖離に着目して. 生涯スポーツ学研究, 19(1): 27-36.
(序論；研究資料)
2. 元嶋菜美香・萩原悟一・宮良俊行・杉山佳生（2022b）「するスポーツ」「ささえるスポーツ」における日本語版 SCQ-2 楽しさ因子の妥当性・信頼性の検討. スポーツ産業学研究, 32(1): 83-96. (第 1 章 研究 1-1；原著論文)
3. 元嶋菜美香・相羽枝莉子・杉山佳生（2023）スポーツを「ささえる」活動の継続的な参加行動と楽しさおよび継続意志の関係：大学生の継続者・離脱者を対象とした比較研究. 生涯スポーツ学研究, 19 (2): 35-44. (第 1 章 研究 1-2；研究資料)
4. 元嶋菜美香・相羽枝莉子・杉山佳生（2024）スポーツを「ささえる」活動の楽しさ、スポーツコミットメント、活動頻度の関係：若年層のライフステージと活動形態による比較検証. 生涯スポーツ学研究, 20(2): 15-25. (第 1 章 研究 1-3；原著論文)
5. 元嶋菜美香・宮本彩・神野周太郎・田井健太郎・熊谷賢哉・宮良俊行（2021）大学が運営する地域スポーツ教室の楽しさの検討－大学生の「ささえるスポーツ」の視点に着目して－. スポーツ産業学研究, 31(1): 31-39. (第 2 章 研究 2-1；原著論文)

謝辞

本博士論文の執筆にあたり，たくさんの方にご指導とご支援をいただきました．まず，主指導教員である杉山佳生教授に，心より感謝申し上げます．6 年半にわたり研究を継続し，形にすることができたのは，杉山先生が進むべき道を示してくださったおかげです．たくさんのご指導とご支援をいただきましたこと，感謝申し上げます．

また，副指導教員を快くお引き受けいただきました，九州大学大学院の斉藤篤司教授，内田若希准教授に深く感謝申し上げます．幅広い視点から，丁寧にご指導をいただき，励ましていただきました．さらに，本博士論文について貴重なご助言をいただきました常葉大学の坂入洋右教授に感謝申し上げます．筑波大学で坂入先生とスポーツ心理学に出会い早 18 年が経ちましたが，いつも研究の楽しさを教えてくださいました．加えて，スポーツを「ささえる」きっかけをくださった，長崎国際大学にてお世話になった先生方と関係者の皆様，共同研究者として貴重なご助言をいただいた横浜国立大学の相羽枝莉子助教，様々なご協力をいただきました九州産業大学の先生方に，感謝申し上げます．

最後に，いつも優しく，そして温かくささえてくれた夫と家族に，深い感謝の意を表して謝辞といたします．

2024 年 7 月

九州大学大学院人間環境学府

行動システム専攻 健康・スポーツ科学コース

元嶋 菜美香